

---

# 流星のロックマン 永遠の絆

少年一号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン 永遠の絆

### 【Nコード】

N8734V

### 【作者名】

少年一号

### 【あらすじ】

地球の危機を三度救ったロックマン。

その正体は、まだ小学六年生になりたての、星河スバルだった。

## 進級（前書き）

これから頑張るので、よろしくお願いします

## 進級

「……私、スバル君のことが、好きです」

スバルは、その言葉を頭の中で何度もリピートする。

キーの高い綺麗な声、誰もがうらやむ顔立ち、モデル体型のスラックとした体。そんな同い年には思えない、完璧な少女が、今、自分に対して顔を赤らめ、俯いている。

どうしてこうなった？

スバルの頭は、ショート寸前だった。

時は、今日の朝まで振り返る。

あの寝坊助のスバルも、今日は眠たそうだが、なんとか学校に遅刻しない時間に起きた。

さすがに、今日は遅刻できない。それは、クラスの委員長こと、白金ルナの功績というわけでもなく、そのルナにいそぎんちゃくのようつきまつている……といったら言葉は悪いが、その二人。牛島ゴン太と、最小院キザマロに、昨晚メールで『遅刻するなよ』と念を押されたからではない。

まあ、ある種、ゴン太はスバルよりも遅刻の常連で、ルナからスバルにメールが来なかったのは、ゴン太のことで手一杯だったから、という考え方もできた。

そして、スバルも、そんなゴン太からそんなメールが来たことに、多少なりとも、自分の生活に憤りを感じたりもした。

しかし、それで生活を変えよう、とは決して思わなかった。

しかし、今日は早起きをしたのだ。ならば、なぜ早起きをしたのか。それは、今日遅刻するとなると、目立ちたくない気質のスバルにと

って、拷問と呼べるほどに脚光を浴びることになるからだ。

「おはよう。委員長!!」

待ち合わせ場所。ゴン太の家の前で、駅でもある。

そこに、ルナとキザマロはいた。しかし、案の定ゴン太はいない。

驚いた表情を、ルナは見せた。「スバル君にしては、早いじゃない」

「昨日、僕がメールしてきましたから」

キザマロが自慢気に言った。

自分の頑張りを他人の頑張りのように取られ、スバルは多少ムツとしました。

「……まったく六年生最初の始業式の日……ゴン太はまた寝坊!」

ルナの顔が赤くなる。頭に血がのぼっているのだ。

そろそろ怒ってもおかしくない。

そう、スバルは予感した。しかし、それに気づいたのは、スバルだけではなかった。スバルがキザマロの方を向くと、パチッとキザマロと目があったのだ。数秒の制止の後、二人は頷きあった。

お互いの顔は真っ青だ。

「僕たち、ちょっとゴン太を起こしてくるよ!!」

二人は駆け足でゴン太の家に入っていった。

ルナの怒りが頂点に達する前に、なんとかゴン太を連れ出さなければ……二人の心は、そう合致した。

スバルの眠気は、とうに覚めていた。

## 登校

「まったく、あんたって人は……」  
ルナが額に手を当てる。残念そうな顔で、首を横に何度も振った。

スバルとキザマロの頑張りで、ゴン太は起きた。しかし、時間に余裕はなく、歩きながら、ルナは説教をしていた。

「め、面目ねえ。委員長」  
ゴン太の顔は、少し青い。

スバルとキザマロは2メートル後方を歩いている。

「それ何度目だと思ってるの!?!」  
聞き飽きたわ、とルナは吐き捨てた。

「すまねえ」  
ゴン太は今にも泣きそうな顔だった。

「いい!?!あなたが遅刻したら、私たちも遅刻するの。あなた1人の行動が乱れただけで、私たち全員に迷惑がかかるの!?!」  
般若のような恐ろしい顔のルナは、足は前に進みながらも、説教を止めようとはしなかった。

すまねえ、と言うゴン太の声は、か細かった。

「次に同じことしたら、一週間牛丼抜きよ!?!」

「ええ、そんな!?!」

ギロツと、ルナがゴン太を睨んだ。

「うう……。わかったよ」

「わかればいいのよ」

ルナは前をむき直した。

「うまいね」

スバルはキザマロの耳元で囁いた。

「ええ、ゴン太君の好物を引き合いに出すことで、彼の寝坊を防止する作戦ですね。……でも」

「ダメだ、キザマロ!!」

スバルはキザマロの発言を手で制した。キザマロの視線がスバルに向くと、首を振った。

「それ以上は……委員長の努力が無駄になる」

キザマロはうつむいた。

「そうですね。僕としたことが」

キザマロはしおらしく言った。

いくらここまでしても、ゴン太の朝寝坊が解消されることはない。二人はそれがわかっていたのだ。

スバルは、しょんぼりと俯いて歩くゴン太を見た。

僕も君の気持ちわかるよ、と心の中でエールを送った。



ルナがハンターV.Gを取り出した。  
ハンターV.Gとは携帯端末の名前だ。メールや電話の機能はもちろ  
ん、ハンターV.Gには、ウィザードたるプログラムがある。  
ウィザードとは、個々に様々な特技を持つプログラムだ。  
その中にも、バトルウィザードたる種類があり、スバルのウィザ  
ードはそこに分類されている。

「大変。もうこんな時間だわ。みんな、走るわよ」

ルナの言葉で、全員が走りだした。

『まったく、ゴン太の朝寝坊もお前と同じくらい面倒そうだな、ス  
バル』  
スバルのハンターV.Gから声がした。

「ロック。僕は今走ってるんだよ。声かけないで、疲れるから」

ウォーロックが勝手に姿を現した。

『スバル、トランスコードを入力しろよ。さっさと学校に行こうぜ  
！！』

「やだよ。ロックマンになったら目立つでしょ」  
スバルは息を荒げながら言った。

「スバル君、喋ってる余裕なんか……キヤーー」  
ルナは悲鳴をあげた。

「ス、スバル君。早くロックをウィザードオフしなさい！！」

「委員長……まだロックが苦手なんだ」  
スバルはつぶやいた。

「いいから!!早く」ルナの走るスピードが上がる。

『ほっ』

ウォーロックはそれに気付いた。

『ガオおお!!』

ルナの悲鳴が一層大きくなる。

「キヤーー!!」

『ガオおおおお!!』

ルナとウォーロックは三人に距離をつけ、どんどん行ってしまった。

## トランスコード003

三人は校門の前まで着いた。

息を荒げたルナが、ひざまずいている。

ウォーロックは、さっきスバルがウィザードオフしていなかった。

「スバル君……ロックマン様になりなさい」  
ルナは言った。

「え、なんで？」

「見てわからないの!？」

ルナは校門の前を指差した。

よく見たら、たくさんの子童が立ち往生をしていた。

そして、先生がハンターV.Gを使って何か操作をしている。

「先生、どうかしたんですか？」

スバルは先生の前まで行くと、訊いた。

「ん……ああ、星河か」

先生は顔をあげた。

「実はな、校門のリアルウェーブが先生のアクセスキーを使っても開かないんだ」

「え……じゃあ」

「学校に誰も入れないんだ」

スバルはハンターV Gを取り出した。

「……ウイルスかな」

『だろっな』

スバルはため息をついた。

「だから、委員長はロックマン様になりなさいって言ったのか」  
『とんだ迷惑だな』

「よく言うよ。ロックは戦いたいくせに」  
スバルはハンターV Gを操作した。

「この時間なら、展望台には誰もいないはず」  
スバルは展望台に向かった。

『まったく、もう正体バラそうぜ。わざわざ電波変換するためだけに、展望台まで行くなんて面倒じゃねえか』

「嫌だよ。どうして僕が有名人にならなきゃいけないんだ」

『でも、この町にロックマンがいるって噂になってるんだろ？』

「うっ……」

実は最近、ロックマンがコダマタウンにいるのではないか、という噂がどこからか流れていた。

それは今までロックマンが目撃された場所がコダマタウンが一番多いためだった。

「とにかく……絶対に正体は明かさないよ」  
スバルは念を押すように言った。

展望台にスバルは着いた。やはり、人はいない。

「よし、行くよ。ロック」

『そういえば、ロックマンになるのも久しぶりだな』

「メテオGの事件の後は、結構平和だったしね」

『はあ……世も末だな』

「使い方間違ってるよ、ロック。とにかく、さっさと行こう……!」

トランスコード003

シューティング・スター・ロックマン

## ウェーブバトル

ロックマンは校門の電脳世界にサイバーインした。

奥に進むと、やはりウイルスがいた。

「やっぱりウイルスの仕業か!!」

『スバル、戦い方は忘れてないな?』

ウォーロックは訊いた。

「当たり前だろ。さあ、行くよ」

「ウェーブバトル、ライドオン!!」

ウイルスが衝撃波を地面伝いに打った。

ロックマンは、それをジャンプでかわす。

「バトルカード、キャノン」

左手が、銃器に変身した。

ロックマンはそれを器用に操り、ウイルスに打ち込む。  
ウイルスは爆発して消えた。

『スバル、突っ込むぞ』

ロックマンが地面に着地すると、ウォーロックが叫んだ。  
ロックマンは頷いた。

「バトルカード、ソード!!」

ウィルスの目の前に、ロックマンが高速移動した。すでに左手はソードになっている。ロックマンはそれを振り下ろした。ウィルスは真つ二つになり、爆発した。

『うおら!!』

ロックマンは後ろを振り返った。

そこにはウォーロックが現れていて、ウィルスが爆発していた。ウォーロックの得意げな顔からすると、どうやらロックマンは不意打ちを食らう寸前だったらしい。

「助かったよ、ロック」

『まったく地球の英雄が……こりゃ、もう一回修行しなきゃダメじゃねえか?』

ウォーロックは爪をたて、腕を何度も振り下ろしていた。

「修行なんて一回もしたことないし……。さ、これで、リアルウェーブの不具合も治ったはず……」  
ロックマンは突如、ひさまずいた。

『どうした、スバル!!』

「体が……重い」

『何!?!』

ウォーロックは、ウィルスがいた場所を見た。

黒いバグ。ノイズが散乱していた。

『しまった、ノイズだ!!』

ノイズが形を変え始めた。徐々に先ほどのウイルスの形になっ  
ていく。

『なんだと!?!』

それは初めて見る光景だった。ウォーロックは思わず声をあげた。

遂に、ウイルス達は元通りになった。

『エースPGはメテオGでの戦いで、ぶっ壊れた。あれ以来、電波  
変身しないもんだから、すっかり忘れてた』

「くっ……動かない……!」

復活したウイルスが、ロックマンめがけて衝撃波を打った。  
ロックマンはかわせず、モロにダメージをくらった。

『くそっ、雑魚相手に……!』

ウォーロックだけでなく、スバルも危機感を感じていた。  
ウイルスがもう一度、衝撃波をうった。  
ロックマンは目をつぶる。



ギターを弾く音がした。  
いつまでも、ロックマンの体に痛みはこなかった。

「大丈夫、ロックマン？」

聞き覚えのある声に、スバルは目を開け、上を見上げた。

ニツコリと笑うピンクの装甲を纏った少女。

「ハープ・ノート!!」

「待っててね、すぐ倒すから」

ハープ・ノートは、ウイルス達のほうにむき直した。

「ショックノート!!」

ハープ・ノートがギターを弾くと、巨大な音符が現れた。それが急速でウイルス達に突っ込む。

一撃だった。ウイルス達は、全滅していた。

## 転校生

「……大丈夫？」

ハープ・ノートは、ロックマンに手を差し伸べた。

「……うん。なんとか……ね」

ロックマンはハープ・ノートの手を握ると、立ち上がった。

「ロックマンらしくないね。どうしたの？」

ロックマンは左手を見た。

「……ノイズだよ。ウイルスを倒したら、出てきたんだ」

「倒した？ウイルスはいたじゃない」

ハープ・ノートは、ウイルス達がいた場所を指差した。

「復活したんだ」

「復活した!？」

ロックマンは頷いた。

ハープ・ノートは、驚いたように口に手を当てていた。

「……で、なんでハープ・ノートがここにいるの!？」

ロックマンはハープ・ノートを見た。

ハープ・ノートの正体の響ミソラは、多忙なアイドルだ。

仕事が忙しいはずだし、もしそうじゃなくても、学校に行っていて間違いない。

「学校は?」

ロックマンは訊いた。

「あれ、知らないの?」

ハープ・ノートはケロツとした顔で笑顔を見せた。

「……何を?」

「そりゃ、私がコダマ小学校に転校することをだよ」

ハープ・ノートはロックマンを見た。

ロックマンは、数秒間停止していた。

「……ロックマン?」

「ええええええええええ!!」

## 教室

「スバル君、スバル君」  
ルナがスバルをつついた。

「……………」  
スバルは無言で席に座っていた。  
スバルは頬杖をついていて、どうも意識がこちらに集中していないようだった。

「スバル君!!」  
ルナがスバルの机を思い切り両手で叩いた。

スバルは頬杖を止め、しかし、突然のことにビックリし、目を丸めてルナを見た。

「まったく……………私の話を無視するなんて」

「え……………何か僕したの？」

ルナの顔にイラつきが見て取れた。

「だから、無視するなってことよ」

スバルは驚きを隠せなかった。  
教室中の児童が、二人のほうを向いていた。それ程、ルナの声は大きかった。

「……………ごめん。それで話って？」

「もう……今日、このクラスに転校生が来るのは、風の噂で知っているとと思うけど」

ガクツと、スバルの右腕が机から落ちた。

「……どうしたの？」

「いやいや。なんでもないよ」

スバルは顔の前で両手を振った。

スバルはすでに転校生が誰かを知っている。

それは、国民的アイドル、響ミソラだ。さっき、電腦世界で、助けてもらった際に教えてもらっていたから、まず、間違いない。しかしその時に、ミソラから、まだクラスの人には言わないで、と口止めをされていた。もちろん、ルナ達にもだ。もしバラした場合、ロツクマンの正体がスバルだと言うことをバラすとも脅された。

「……それでね。やっぱり転校生は、新しい学校で新しい友達ができるか不安でいっぱいだと思うの」

「……絶対に大丈夫だよ」

スバルは呟いた。

「何か言った？」

「ううん、何も」

スバルは顔の前で手を振った。

今日、転校してくるはずのミソラは、すでにスバルやルナやゴン太、キザマロなど、気心が知れた連中がいる。それに、アイドル響ミソ

ラだとわかった瞬間、友達はスバルの交友関係の人数を超えると推測できた。

「だから、転校生の緊張をほぐすのは、ルナルナ団の使命だと思うの！！」

ルナは持論を展開し続けていた。

「……なるほどね」

スバルは返事を躊躇した。なんだか、自分がこき使われるような気がしてならない。

しかし、ブラザーのミソラが寂しい学校生活を送るのも、心が痛い。そうならない気はするが、確実にそうなる保証はなかった。

「そうだね。それがいい」

これもミソラのためか、とスバルは思うことにした。

「じゃあまず、転校生がどんな子か、偵察してきて頂戴！！」  
ルナの目は輝いていた。

「て、偵察！？」

ルナは頷いた。

「ゴン太ももう行ってるわ。でも、最近の学校のセキュリティをなめたらいけない。やっぱり、ロックマン様の力が必要なのよ」

「でもそれ、犯罪……」

「スバル君は」

ルナは机を叩いた。

「転校生がどんな子か、知りたくないの？」

すでに知っている、とは言えなかった。

「そりゃ……知りたいけど」

「なら、決まりね。始業式が始まる前に、育田先生が教室で転校生を紹介すると考えると、あと五分くらいで校長室を出るはずよ」

だったら待っていたほうがいい、とは言えなかった。

こうなってしまった以上、もうルナには逆らえない。もし、逆らったり、情報を提供できなかったとすると……。

スバルは身が凍りつくのを感じた。

「急ぎなさい、スバル君！！」

「……わかったよ」

スバルは立ち上がり、教室を出た。

廊下の突き当たりの角を曲がると、トイレがある。だが、その前の水道場にも、すでに人の気配はなかった。

トランスコード003

シューティング・スター・ロックマン

## 校長室

『スバル、いいのか?』

ウオーブロードに着くと、ウオーロックは現れた。

「何が?」

『ミソラは、転校生がミソラだとバラすなって言ってる。んで、委員長は、転校生の正体を突き止めるって言った』

「あっ」

ロックマンはその場に止まった。

「どっしょっ……」

『ミソラにロックマンの正体をバラされるか。ルナにバラバラにされるか、だな』

ウオーロックの口元は、笑みをこぼしていた。

内心楽しんでいるに違いない、とスバルは確信した。

「……こうなったら」

逃げよう、とロックマンが言おうとした時だった。

「……おゝい。ロックマン!!」

オックス・ファイアがウオーブロードを走ってきたのだ。

『ナイスタイミングだな!!』

ウオーロックはケラケラと笑い出した。

「転校生、見たか?」



オックス・ファイアは言った。

「ううん、今、来たところだから」

「そっか……」

オックス・ファイアは頭を掻いていた。

「ミソ……て、転校生がどうかしたの？」

思わずミソラとスバルが言いかけたことに、ウォーロックが吹き出す。

「いやな、校長室に侵入できたんだけど、転校生はもういなかったんだ」

「じゃあ、もう話は終わってたってことかな……？」

「でもよ、育田先生は座ってたぜ？」

「そっか。育田先生が座ってるんだから、まだ話はしてないってことか」

ゴン太にしては鋭いな、と思わず思ってしまうロックマン。ただ、ミソラが遅刻しているとは考えづらかった。先ほど、助けてもらっている。

『あら、何やってるの、ロックマンにオックス・ファイア』

ロックマンはビクツと体を揺らした。

突然、後ろから声がしたからだ。

ロックマンは振り返った。

「ハープ・ノート……！」

ハープ・ノート、響ミソラのウイザード、ハープもいた。さっきの声は、ハープの声だった。

「ロックマン、どうしたの!?!」

「え……あ、いや……」

ロックマンは目をそらした。

転校生の正体を暴きにきた、と言うのは、禁句に近かった。

「転校生が誰かを調べにきたんだ!?!」

オックス・ファイアが自慢気に言った。

おい、とロックマンは心の中で突っ込んだ。

「転校生が誰かを調べにきた?」

ハープ・ノートの厳しい視線が、ロックマンを刺す。

「どういうこと?」

ハープ・ノートの声は、怒りがこもっていた。

「い、委員長に命令されて……」

思わず声が裏がえった。

「し、仕方なく……」

「ハープ・ノートは、どうしてここにいるんだ?」

「さっき、ロックマンを助けた後、少し仕事が入って……育田先生に電話して、少し時間をズラしてもらったの」

「……育田先生？」

オックス・ファイアは不思議そうな顔をした。

「うん」

ハーブ・ノートは、笑顔で頷いた。

「あ、あの……ハーブ・ノ」

「じゃあ、私そろそろ校長室に行かなきゃ……！」

ロックマンの言葉は遮られてしまった。

ハーブ・ノートは、瞬く間に姿を消した。

「……校長室に……ハーブ・ノートが……てことは、ミソラちゃんが転校生!？」

オックス・ファイアが歓喜の声をあげる中、ロックマンは肩を落と  
していた。

## 挨拶

「えー、もう知ってる人もいると思うが、この6ーAに、新しい友達が来た」

あれから、15分程度がすぎていた。

育田は、教室に入るなり、こう切り出した。

「入ってこい」

育田の言葉が合図で、ミソラが教室に入ってきた。教室中に、歓喜の声が湧き上がった。

育田が黒板に名前を書く。

「みんな知ってると思うけど、彼女は響ミソラだ。ミソラは有名人だから、毎日学校に来れるとは限らないが、仲良くしてやってくれ」

はーい、と、全員が言う。

六年生になったとは言え、無邪気な子供に変わりはなかった。

スバルは浮かない顔で俯いていた。

「響ミソラです。みんな、これからよろしくお願いします!」

ミソラは深々と頭を下げた。

「ミソラの席は……スバルの隣が空いてるな」

育田が席を指差した。

「え……」

スバルは思わず声をあげた。

「なんだ、スバル。嫌か？」

「いや……そういうわけじゃ」

「なら、いいな。ミソラ。あそこの席に行ってくれ」

ミソラは笑顔で頷いた。

しかし、スバルの隣に來ると、すでに笑顔はなかった。

「よ、よろしく。ミソラちゃん」

ミソラはチラッとスバルを見た後、前を向いた。

スバルは少し心が痛かった。

## 帰宅

始業式も終わり、最初のホームルームも終わろうとしていた。

「よし、今日はここまでだ」

育田がそう言い、立ち上がった。

「白金、挨拶を」

「起立」

全員が立ち上がった。

「礼!」

ありがとうございます、と息ぴったり挨拶をした。ここでいつもなら大半の子達は帰るのだが、今日は違った。

一目散に、スバルの隣の席は人で囲まれた。

「響さんは、前はどこに住んでいたの？」

「ミソラちゃんって、どうして転校してきたの？」

口々に、ミソラへの質問が飛び交う。

「え……あ、その……」

あまりの質問の多さに、ミソラは処理しきれなかった。

「あなた達、そんなに一辺に答えられるわけないでしょ!」

ルナがミソラの机の前に入った。

「質問は明日からよ。今日は、ミソラちゃんだって転校初日で疲れ  
てるだろっし……」

嫌な顔をする生徒が大半だった。

「何か文句あるの？」

ルナは眉間にシワを寄せた。

生徒達は、逃げるように立ち去っていった。

ルナは一息つく。

「助かったよ、ルナちゃん!!」

ルナはミソラのほうを向いた。

「いいえ。困った時はお互い様でしょ」

「……でも、明日は質問攻めにあうのか」

「なんなら、ゴン太やキザマロやスバル君をガードにつけるけど」

ゴン太やキザマロは嬉しいだろうな、とスバルは感じた。  
というか、二人はすでに軽く鼻の下が伸びていた。

「……大丈夫。いざとなったら、逃げるから」

ミソラはハンターV.Gを見せた。

「電波変換して、ね」

「あら、そう」

「私、そろそろ帰ろうかな。家も遠いし」  
「ミソラは腰を浮かせた。」

「確か、自宅はベイサイドシティにあるのよね」

「うん。ここからは遠くて、ウェープロードを使って通うの」

「電波変換するのか」

ルナは合点したような顔だった。

ウェープライナーを利用していたとしても、やはりベイサイドシティからは通える距離ではない。

「……なら、スバル君。送ってあげなさい」

ルナはスバルを見た。

「え……どうして？」

「女の子一人で帰らせる気？ ウイルスが襲ってきたら、どうするの」

「委員長。だったら、俺が……！」

ゴン太が手をあげた。

「あなたとミソラちゃんなら、ミソラちゃんのほうが強いんだから、意味ないじゃない」

「確かに……！」

キザマロは笑い出した。



「この、笑うな、キザマロ!!」  
ゴン太がキザマロに襲いかかった。

「うわっ」

キザマロは、なんとかそれをよけた。

しかし、ゴン太はキザマロを再び攻撃しようとしていた。

キザマロは走って逃げ回る。

ゴン太はそれを追い回す。

「と・に・か・く。ミソラちゃんを送ってきなさい。これは委員長  
命令よ!!」

ルナはスバルを見下しながら、彼を指差した。

「わかったよ」

「じゃあね、また明日」

ミソラは教室を出て行った。

「ええ」

ルナは手を振った。

「さようなら」

キザマロはゴン太に頬をつねられながら、言った。

「また明日な!!」

ゴン太はキザマロを捕まえてない逆の手を振った。

「ほら、スバル君。早く行きなさい」

スバルは渋面で頷いた。

## 謝罪

「あの……ミソラちゃん？」

教室を出ると、ミソラはスバルの前を歩いて行ってしまった。  
スバルは早足でミソラを追った。

「待ってよ」

スバルは駆け足になった。

ミソラはすでにエレベーターの前において、ハンターV.Gで操作をしていた。

エレベーターが開く。

ミソラは一人エレベーターに乗ると、ドアを閉めてしまった。エレベーターは上に移動していた。屋上から帰る気だろう。

「ロック、電波変換して先回りしよう」

エレベーターが開くと、スバルは一步前に出た。

「……ミソラちゃん」

ミソラは驚いたような顔を一瞬見せたが、スバルの前を右折し、ウエーブステーションのほうに歩こうとした。

「待ってよ」

スバルはミソラの左腕を掴む。

「……離してよ」

ミソラはスバルに背を向けながら、小さな声で言った。顔は少々俯いているように、スバルには見えた。

「……朝はごめん。助けてもらったのに……それを仇で返すような真似をして」

ミソラは黙ってしまった。

「約束を破ってごめん」

スバルはミソラを離すと、頭を下げた。

「……本当は、こんなことで怒っちゃいけないってわかってたんだ」  
ミソラの声は淋しそうだった。

「え？」

「だって……スバル君には何度も助けてもらってるのに……敵になった時も、最後まで信じてもらってたのに、こんな小さな約束をスバル君が破っただけで……私は無視したりして。恩を仇で返してるのは、私だもん」

ミソラはスバルのほうに向き直った。

「……ミソラちゃん」

スバルは首を振った。

「ミソラちゃん、どうして怒ったの？」

ミソラは俯いたまま、黙った。

「僕の知ってるミソラちゃんは、とっても明るくて、すごく優しい。こつこつ言い方もひどいかもしれないけど、僕はあれくらいじゃあ怒らないと思ってた」

「……スバル君が、私との約束じゃなくて、ルナちゃんとの約束を取ろうとしたから」

「……え？」

スバルは意味を考えた。

ミソラの顔は、ほんのりと赤かった。

「……私、スバル君のことが好きです」

スバルは何度もその言葉を、頭の中でリピートした。

ようやく意味が理解できた。が、それはスバルの思考を再び停止させた。

「……スバル君は？」

「……え？」

「スバル君は、私のこと……好き？」

## メロディー

スバルの頭にメロディーが流れた。

その後に浮かんだのは、ミソラの悲しい笑顔。

展望台で、ミソラとは出会った。

鬼のように仕事をやらせ続けたマネージャーに、ミソラは反発した。元々、ミソラの歌は、彼女の母親との繋がりのためのものだった。しかし、マネージャーのせいで、ミソラはその原点を見失い、その暗い気持ちに、ハープがつけこんだ。それが、ハープ・ノートの誕生の秘密だ。

「僕のブラザーになってください!!」

顔が熱かったのを、スバルは覚えていた。

ミソラが泣いてしまい、どうしていいかわからず、そう言った。

ミソラはスバルの初めてのブラザーになった。

ムーとの一件の時、ミソラはエンプティに脅され、スバルの敵になった。それでも、スバルはミソラを信じ抜いた。ブラザーだから。

「とりあえず落っこちないように手、握ってあげるね」

ギユツと握られた手の感覚は、今すぐにでも思いだせそうだった。

ブラザーだから？

いや、そうじゃない。

自分と似たものを持っていたから。初めはそうだったかもしれない。しかし、ブラザーバンドを結び、時には戦い合い、そして、助け合い、気持ちは変わっていったのだ。

鈍感なスバルは、今更ながらそれに気づかされた。

「僕も好きだよ」

今回の件だって、言い訳をすれば、信じていたからだ。ミソラなら、きっと優しく笑ってくれると信じていたからだ。

なら、なぜ信じられた。

ブラザーだから？

いや、違う。

だったら、ルナもブラザーじゃないか。

「僕も……ミソラちゃんが好きだよ」

好きだから。

ミソラのが好きだから。

彼女なら、きっと笑顔で許してくれるから。

「……ホントに」

夕日に照らされながら、ミソラの目には涙が浮かんでいた。

スバルは頷いた。

「泣かないでよ」

僕が見たいのは、君のそんな顔じゃないんだよ。そんなクサイ台詞、とてもじゃないが言えない、とスバルは思った。でも、それは事実だった。

「笑ってよ」

ミソラは崩れ落ちた。

「だ、大丈夫？」

スバルは言った。

「……ヒック」

ミソラはまだ泣いているようだった。

スバルはミソラが泣き止むのを待つことにした。

電波変換して行けば、ベイサイドシティでも、ものの十分で往復できるだろう。

今は、ミソラと一緒にいたかった。

聞き覚えのあるメロディーが頭に流れた。

それは出会ったばかりの時の、暗い笑顔のミソラの歌ではない。

どんな逆境にたたされても、ファンのために、明るい笑顔で歌うミソラの歌だった。

その歌の名は、シューティング・スター！。



## 敵襲

「……スバル君、もう一回言ってほしいな」  
ミソラは言った。

あれから、30分が経とうとしていた。  
ミソラはようやく泣き止んだようだった。

「え……もう一回？」

「嫌なら……大丈夫だよ。ごめんね、急に」  
ミソラは淋しそうに言った。

これではさっきと変わらない、とスバルは思った。  
結局、ミソラを悲しませてしまう。  
つまり、スバルの選択肢は一つしかなかった。

「好きだよ」

「……ありがとう」  
ミソラは俯いた。

「だ、大丈夫？」  
スバルは心配そうに訊いた。

「うん……。本当にありがとう」  
ミソラは立ち上がった。

「帰れる？」

ミソラは頷いた。

「送ってくよ」

「ありがとう」

ミソラは呟いた。

ウェーブロードを移動しながら、二人は談笑していた。  
ミソラももう笑顔になっていた。

「スバル君、今週の日曜日は暇？」  
ハープ・ノートは言った。

「うん。暇だよ」

「じゃあさ、二人でどこかに行かない？私、その日は久しぶりの休みなんだ」

「いいよ。どこに行こうか」

ロックマンはハツとして上を見た。

「危ない、ミソラちゃん!!」

ロックマンはハープ・ノートを押した。

二人の真ん中に、黒い手が伸びてきた。

「これは……!!」

その手を出した正体は、ロックマン達が使っているウェーブロード

より、3メートルほど高いところにあるウエーブロードにいた。

「ンフフ」

聞き覚えのある笑い声だった。

「ファントム・ブラックだな!!」

ファントム・ブラックは、二人を見下ろしていた。

黒い手がファントム・ブラックのほうに戻っていった。

腹部から伸びていたそれは、ゆっくりとしまわれた。

『生きてたのか……!!』

ウォーロックは勝手にウィザードオンすると、鋭い目つきでファントム・ブラックを睨んだ。

「お前に復讐するまで、私は死なない」

『それで、早速復讐しに来たのか。懲りねえな。やられるだけってのが、わかってねえのか!!』

「……ンフフ。私もそこまで馬鹿じゃない。勝機がなければ、戦いを挑んだりしない」

『何!?!?』

「まあ、まずは彼らを相手にしなさい!!」

ロックマンの四方をウイルスが囲む。

「くっ……!!」

「スバル君、手助けするわ!!」

「そうはさせない」

ファントム・ブラックはハーブ・ノートに突っ込んだ。

「くっ、ショック・ノート!!」

ハーブ・ノートはファントム・ブラックに打ち込む。

だが、ファントム・ブラックはものともせず、ハーブ・ノートに襲いかかった。

「きゃあ……」

ハーブ・ノートは、ファントム・ブラックに首を掴まれる。

『ミソラ……!』

ハーブが言った。

「ロックマン……早くそいつらを倒さなければ、彼女は死ぬぞ……!」

「くそ……。行くよ、ロック……!」

『おう……!』

「ウェーブバトル、ライド・オン……!」

## ノイズ

ウイルスが音をたてて爆発する。  
ロックマンはひざまずいた。息はかなり荒かった。

「……ンフフ。やはりそうか」

「……何!？」

「今貴様は、ノイズ対策のPGMを持ってないんだな。そのウイルスを倒した時に現れたノイズに、今、お前は苦しんでいる」

『それがお前の作戦か』

「ンフフ。……脚本だよ!!」

ファントム・ブラックは、ハープ・ノートを離すと、ロックマンの前に光速移動した。

ファントム・ブラックは、ロックマンを蹴り飛ばした。

「……ッ!」

『なんでだ。このノイズは、ここにいる全員に多少なりとも影響を及ぼすはずだ。なんでお前は平気な顔をしてる』

「ンフフ。私はあの時、電脳空間の狭間に落ちた。出ることもできず、苦しい毎日だった。しかし、ある日、あるものが私を救った。私はそれを四六時中浴び、そして、強化され、外に出れた」

「……あるもの!？」

「ノイズだ。しかも、ただのノイズではない。メテオGが爆発した際に、飛来したノイズだ!!!」

「!!!」

「そんな……メテオGのノイズが地球に飛来していた!?……そんなの聞いてない」

「それもそうだろう。メテオGは、貴様が消滅させたのだから……だがな、ノイズの塊のメテオGが消滅したということは、クリムゾンが大量に発生するということ。クリムゾンが発生した瞬間、あの爆発でクリムゾンははじけた。だが、宇宙は広い。何十倍にもなったノイズは、爆発の衝撃で宇宙の隅々に散った。当然、地球にもそれが流れついた。しかし、メテオGほどの影響はないし、大気圏に突入する際に、いくら燃え尽きた。だから、WAXAも注視はしなかった」

『それが偶然にもお前のそばに落ちたってことか!!!』

「ソッフ。元々、メテオGの能力は凄まじい。今では、私の能力もメテオGの残骸ノイズのおかげで何倍にも膨れ上がった」

「……くっ!」

「まあ、ただのノイズに太刀打ちもできない貴様が私をどうこうできるはずもない」

ロックマンは必死に立ち上がろうとした。

「遅い…！」

だが、ファントム・ブラックは、それも許さない。  
ロックマンは仰向けに倒れた。

「……スバル君…！！」

ハーブ・ノートは痛みをこらえるように、立ち上がった。

「ショック・ノート…！！」

「フン…！」

ファントム・ブラックはステッキで、音符をはじいた。

「無駄な抵抗は止めたほうがいい。私の狙いはロックマンだけだ」

「……ロックマンを……殺す気でしょ！？」

ハーブ・ノートは言った。

「当然だ。脚本では、ラストはそうなる」

「……何が脚本よ。そんなこと……あなたのそんなつまらない脚本のせいで、私の大切な人を死なさせるなんて……私は絶対に許さない…！」

「……つまらない……脚本……？」

ファントム・ブラックはハーブ・ノートの前まで、光速移動した。  
そのまま、ハーブ・ノートの首を掴み、持ち上げる。

「くっ…！」

苦しいのか、ハーブ・ノートは、ギターを離し、首にある手を掴む。

「お前に何がわかる。お前に私の芸術など……わかってたまるか！」

ハーブ・ノートは苦しそうに足をじたばたさせていた。

「ミソラちゃん……！」

ロックマンは立とうとするが、まるで鉛のように体が重い。

「くそつ。大切な人も守れないで……何が、地球のヒーローだ……！自分を鼓舞するように、ロックマンは声を荒げながら叫んだ。ロックマンの周りにノイズが現れた。

『スバル、これ以上はよせ……！ノイズが出現し始めてやがる。ノイズ対策PGMがない体じゃ、これ以上は危険だ……！』

「自分の身の心配をして……大切な人を守れないで……そんなの絶対にやだ……！」

『バカヤロウ。死ぬかもしれないんだぞ……！ノイズは電波体の体に蓄積される。つまり、今までの分を考えたら、許容量は絶対に越えている』

ロックマンにノイズが集まりはじめた。その時、ロックマンはハツとした。

「ノイズは……蓄積される……？」

『ああ、そつだ。だから……』



「つまり……メテオGのノイズも、僕の体には蓄積されている」

ウォーロックが意味を察したのか、ウィザードオンして出てきた。

『バカ、止める。何があるかわかんねえんだぞ!!』

「……それでも……何もしないよりは……ました……!!」  
ロックマンはふらつきながらも立ち上がった。

「何をする気だ!?!」

ロックマンは、ファントム・ブラックのほうを向いた。

「ノイズ率を上昇させ……僕の体に眠るメテオGのノイズを無理やり共鳴させ、アクセスする」

「……ンフフ。なるほど、しかし、それは自殺行為だ」

「ファイナライズ……つまり、メテオGにアクセスするのに必要なノイズ率は……200%。僕の体がもつか。もたないか……」

「ンフフ。いいでしょう、勝負だ。ロックマン!!」  
ファントム・ブラックはハープ・ノートを投げ捨てた。

ハープ・ノートの意識はすでになかったらしく、立ち上がることはなかった。

「ハアハア……。いくぞ、ファントム・ブラック」

ウェーブバトル

ライド、オン!!

## 悲鳴

体が悲鳴をあげているが、ロックマンは無理やり動かす。

「バトル…カード、キャノン…！」

左手が銃器になると、すぐさま連射する。

だが、ファントム・ブラックはすばしっこく全てかわされる。

「ンフフ。そんなものか…！」

『攻撃を当てなきゃ、ノイズ率もあがらない。中途半端なノイズ率は、むしろ体を一層つらくさせる』

「……バトル、カード……ソード」

ロックマンの左手が剣になった。

ファントム・ブラックに突っ込もうとするが、足がふらいき、数秒、たじろいだ。

「隙あり…！」

その一瞬を、ファントム・ブラックは見逃さず、ステッキでロックマンを殴る。

「……くっ」

ロックマンはその瞬間、カウンターというように剣を振り上げた。ファントム・ブラックに、ようやく一太刀を入れた。

「ンフフ。もうへろへろだな」

「バトル…カード……エアスプレッド」

ロックマンは撃つ。

ファントム・ブラックには直接当たらなかったが、代わりにウェーブロードに当たった。そして、それに誘爆し、ファントム・ブラックに当たった。

「くっ……目障りな!!」

ファントム・ブラックは突っ込んだ。

『ビーストスイング!!』

ウォーロックが出現すると、ファントム・ブラックを切り裂いた。

「くおっ!!」

ファントム・ブラックは顔を歪める。

「……くそ」

ロックマンはひまづく。

『立て、スバル。せっかく上がったノイズ率が下がっちゃまっぞ!!』  
ウォーロックは叫ぶ。

「小賢しい!!」

ファントム・ブラックは、ロックマンの前に行くと、ステッキで殴り飛ばした。

「うわあああ!!」

ロックマンは仰向けに倒れた。

「……………」

『スバル、立て!!』

「…………ンフフ。とどめだ!!」

ファントム・ブラックは、ロックマンの首にステッキを突き立てる。

「終わりだあ!!」

「バトル…カード……………ムラマサブレード」

ステッキとムラマサブレードが激しく火花を散らす。

だが、ロックマンに残された力はあまりにも少なかった。

ロックマンは押されだす。

「ンフフフフ。終わりだ、ロックマン」

「…………ムラマサブレードは…………残りの力が少なければ少なくなるほど…………強くなる!!」

ステッキが弾け飛んだ。

「食らえ!!」

ロックマンは寝転びながら、ファントム・ブラックを切った。

ファントム・ブラックはふらふらになりながら、立ち上がった。

ロックマンも立ち上がる。

「……………ッ!」

ロックマンの周りにノイズが次々と出現した。  
数は増える一方だ。

「…………スバル、耐えるんだ!!」

ロッキマンは力なく頷く。

「う……うわあああああああ!!」

ロッキマンにノイズが次々と侵入していく。膨大なエネルギーのノイズが、ロッキマンの体を蝕む。

ロッキマンは頭を抱えた。

「……頭が……痛い」

ロッキマンはひざまずいた。それでも、ノイズは侵入を止めない。

「うわあああああ!!」

断末魔のような叫び声が響いた。

## ブラザーアクセス

見渡す限り真っ白な空間に、ロックマンはいた。

「……………どこだ。ここは…?」

いくら周りを見回しても、何もない。

白の世界だった。

「……………ファントム・ブラックは!?!」

いくら見渡しても、どこにもいなかった。

「……………ミソラちゃん。守らなきゃ……………」

だが、出る方法がわからなかった。

「ブラザーなんだから、守らなきゃ……………。好きな人を、守らなきゃ……………」

しかし、出る方法は掴めない。

「……………くそ……………ミソラちゃん」

その時、真っ白な空間にミソラは現れた。

「スバル君には……………いつも守ってもらってる。私もスバル君を守りたい。でも……………私じゃ、力が足りない」

「……………ミソラちゃん」

ロックマンは首を振った。

「僕はミソラちゃんに守ってもらってる。さっきだって、助けてく

れた。……もし、力が足りないなら、僕が力を分けてあげる。僕達はブラザーじゃないか。二人で頑張ろう。僕達は一人じゃない。助けあって……守り合おう」

スバルの視界がぼやけた。

ピーー

ハンターV.Gが音をたてた。

『ブラザーバンド、響ミソラ。キズナリヨク100。ブラザーアクセス』

まばゆい閃光がほとばしる。

「……スバル…君…？」

ハープ・ノートは目を覚ました。

「さっきの夢……ありがと、スバル君」  
ハープ・ノートは目を閉じた。憑き物がとれたように、清々しい顔だった。

「……何だ」

ファントム・ブラックは、後ずさった。

「……ファントム・ブラック」

閃光が弱まりだした。

ファントム・ブラックはビクツと体を揺らした。

「ここからが、本当の勝負だ」

ロクマン ハイプメテオ



## ハーブメテオ

まず目に入ったのは、ピンク色の装甲だった。先程と段違いに、体も軽い。

水色のギターも持っていた。

「……まるで、ハーブ・ノートだ」

『まるでじゃねえ。なんだか知らねーが、ハーブ・ノートと共鳴したんだよ』

「……さっき」

『あ?』

「真っ白空間に立ってて……ミソラちゃんと話したんだ。あと、インターV.Gが何か鳴ってた……ブラザーバンドとか、キズナリヨクとか、ブラザー……アクセスとか」

『ブラザーアクセス?』

ロックマンは頷いた。

「流星ネットワークに接続はされてないのか」

『いや……この感じ、メテオGにいた時と同じだ』

「じゃあ……一体」

『……！！スバル、おしゃべりはあとだ！！』

ウォーロックは、ファントム・ブラックがステッキをロックマンに振り下ろしかけているのに気がついた。

「うん」

ロックマンは、涼しい顔で受け止めた。

「ファントム・ブラック……。ここからが、本当の勝負だ」  
ロックマンはファントム・ブラックを睨みつけた。

「……貴様……！！」

「ショックノート！！」

ロックマンはギターを弾いた。

巨大な音符が、ファントム・ブラックに激突した。

「なぜだ……。なぜ勝てない」

ファントム・ブラックはひざまずいた。

「……ファントム・ブラック。これで終わりだ」

ロックマンはギターの弦に指をかけた。

「ショックノート！！」

ファントム・ブラックに音符が激突した。

「うわああああ……！！」

閃光がほとばしったあと、ファントム・ブラックはいなくなっていた。

## スバル家

ミソラは目をパツと開けた。

ここはどこだろう。まず、そんな疑問が頭の中を占領した。周りを見回すように寝転びながら首を小さく動かすが、正直真つ暗で何も見えない。

ミソラは体が何かに触れているのに気がついた。持ち上げてみるとそれは軽い。そして、手触りはフワフワしていた。

「毛布……?」

ミソラはそれが毛布であることに気がついた。

ということは、ここは自宅だろうか、とミソラは考えた。

いや違う、と心の中でその考えを振り払った。なぜなら、ミソラの意識がある寸前まで、ミソラはファントム・ブラックに首を掴まれ、窒息死させられそうだったのだから。

「……そうだ。スバル君は!？」

ミソラは上半身を起こした。

手探りでハンターV.Gを探した。嫌な考えが浮かんだ。

ここは実は病院で、軽傷の自分はとりあえずベッドで寝かされ、スバルは重傷、今も目を覚まさず、いつ死んでもおかしくない。

最後にミソラがスバルを見たのは、ファントム・ブラックにやられているところだった。それだけに、どうしてもそう思わずにはいられなかった。

「ハーブ……ハーブ!!」

ミソラは言った。

返事はない。それだけに、一層不安にかられた。

「スバル君!？」

ミソラはさつき夢の中にスバルが出てきたことを思い出した。しかし、場所は真っ白な空間。まさか、あそこは天国でスバルはすでに死んでしまったのではないか。

その時、フツと周りが明るくなった。

まず、ミソラの目に入ったのは、地球儀と天体望遠鏡。

そして、階段の壁に貼られる三枚のポスター。

下のほうが慌ただしい。すると、階段のほうから尖った髪が徐々に見えた。

「……あ」

ミソラは目を丸くした。

今、どこにいるのかも。大切な人の安否も、それでわかった。

「どうしたの!？」

スバルは駆け足でミソラに近寄った。

「……スバル君んち？」

「あ、……ミソラちゃんち行ったことないから、わかんなくて……ミソラちゃんも気絶したまま、目を覚まさないし。だから、僕の家運んだんだ」

「……ハープは？」

「下で父さんや母さんと喋ってたよ」

ミソラは納得したが、緊張感が切れてしまい、次の言葉が出なかった。

「……嫌だった？急に僕のベッドで寝かされて。母さんも、ミソラちゃんなら、私のベッドで寝かせたほうが、って言ってたし」

「え……うつん。そんなことないよ」

ミソラは何度も首を振った。

よく見ると、スバルは心配そうな顔でミソラを見ていた。

「そ、それに、スバル君の部屋は空の見通しがいいしね」

ミソラはそう言い、大きな窓を指指した。

「あ、あれは何星かな!？」

ミソラはてきとうな星を指差した。

話を逸らしたかったがために、口走ったが、これが幸か不幸か、スバルの気を逸らせられた。

しかし、ミソラはすぐにミスに気付いた。

「あれ？あれは」

「スバル君、お腹空いちゃったな」

ミソラはスバルの言葉を制して言った。

「あ、そうか。待っててね、ミソラちゃんの夕飯のこと、母さんに話してくる」

スバルは階段を下り、部屋を出た。

ミソラはホッと胸をなで下ろした。

『危なかったな』

ウォーロックが、階段を上り、ミソラの前に現れた。

どうやらスバルは、勉強机にハンターV.Gを置いたらしく、ウォーロックは勝手にウィザードオンして出てきたらしい。

「ロック君」

ミソラは苦笑いして見せた。

『スバルは自分の興味のある話はキラキラした目で語りだすからなウォーロックは腕を組み、頷きながら言った。彼も被害を被ったことがあるらしい。』

「うん……でも、食い意地張る女に見えたかもね」

『元々、少食じゃねーだろ？』

「まあ、そーだけど……一応、さ。女の子だし……そういうおしとやかな部分を見せなきゃね」  
ミソラは頭を掻いた。

その時に、あることに気付いた。

『その髪でか？』

ウォーロックがすかさず、ミソラが気付いた点を挙げた。

「ウソ、スバル君と話してる時も、ずっとこんなのだったの!?!」  
髪が寝癖でグシャグシャになっていた。

ミソラは鏡がないので、手だけでどうにかしようとした。

『ずっとだよ。まあ、スバルは気にしてなかったみたいだけどな』

ミソラは顔を赤くした。

唯一の救いは、スバルがそれを気にしていないようだということだ

つ  
た。



## 注射

「ごめんなさい。夕飯をご馳走になっちゃって」  
ミソラは言った。

ミソラが目覚めてから、三十分程度が過ぎていた。

「いいのよ。ミソラはスバルの大切な友達でしょ？」  
アカネは笑顔で答えた。

「でも……」

「何？スバルにはお世話になりたくない理由があるの？」

アカネは興味深々といった顔で、ミソラは多少気圧された。

「……それで、スバルとはどこまでいったの？」

アカネはスバルを横目に見ながら、ミソラの耳元で囁いた。

「……え？」

ミソラは驚いた顔をした。

「あら、まだ何も？」

ミソラは返事に困った。真実を話すべきか、否か。  
ただ、一つ気がかりなことがあった。

確かに、二人は両思いだというのはわかったが、それだけだ。交友関係は今までと大差はない。ようは、お互いの気持ちを理解し合っただけだった。

「えーと……ちょっと進んだかな」

「あら、何があったの？」

アカネは目を輝かせながら、ミソラに顔を近付けた。  
ミソラはアカネの耳元で先程の出来事を囁いた。

「父さん、実は話たいことがあるんだ」  
スバルは真剣な顔で、大吾に寄った。

「なんだ。まあ、とりあえず座れよ」

大吾は自分が座るソファアを指差した。  
空いているスペースに、スバルは腰をかけた。

「実は、さっきファントム・ブラックが襲ってきて……それで、  
インターV Gが変なこと言ってたんだ」

「変なことを言ってた？」

大吾は意味不明だと言わんばかりに、スバルに笑ってみせた。  
「どういうことだ？」

『スバルのエースPGM壊れただろ。それでスバルはファントム・  
ブラックと戦ってるとき、ノイズの影響を受けたんだ』  
ウォーロックが突然現れ、言った。

「おお、すっかり忘れてたな」  
大吾は言った。

「……でき、ファントム・ブラックはメテオGの残骸ノイズで、ノ

イズの耐性ができたって言ったんだ」

「メテオGの残骸ノイズ。そうか……地球への被害はあまり出てなし、何よりメテオGに比べたら微量なエネルギーだから、まだ公表されてはいないが、それでファントム・ブラックなる者を強化させてしまったってわけか」

「それで……僕も、僕の体には、メテオGのノイズが蓄積されててもおかしくはないから、周りのノイズ率を上げて、そのノイズを無理やり共鳴させて、力を蘇らせて、耐性を作ろうと思ったんだ」

『だから、ファイナライズのノイズ率200%までノイズ率を上げたんだ』

「なるほど、流星ネットワークにアクセスするには、ノイズ率が200%必要。ある意味、メテオGに力を借りるには200%のノイズ率がいる。そして、それさえあればメテオGは活発になる。体内に眠るメテオGの残骸ノイズは、それで共鳴され、力を発揮した。よくそれだけのことを、とっさに考えたな、スバル」

「ただ、気になることがあるんだ」

「ハンターV Gが何かを言ったってやつか？」

スバルは頷いた。

「響ミソラ。キズナリヨク100。ブラザーアクセス……って」

「ミソラやキズナリヨクはなんとなくブラザーバンドのこととわかるが……ブラザーアクセス、か」

スバルは頷いた。

「僕も初めて聞いたんだ」

「……わかった。明日、WAXAと一緒にいこう。精密検査をしよう」

「セイミツケンサ？」

「ああ、体を調べることだよ」

「体を調べる？」

スバルはハツとした。

「まさか……注射をしたり？」

「……さあな、何を検査するかは、まだわからん」

「ぼ、僕、大丈夫だよ。病院の独特な匂いがダメなんだ」

大吾は笑って見せた。

「ダメだぞ。注射にビビってたら、地球を守ってきたロックマンの名が廃る。それに、注射をするかもしれない場所は、病院じゃない」

「し、知らないよ、そんなの。とにかく、注射は絶対にしないからね！ー！」

だが結局、スバルは大吾に言いくるめられたのだった。

## 精密検査

スバルは右腕の関節部分をさすった。  
未だに、注射をさせた痛みがした。

『まったく、注射ぐらいで……』

ウォーロックは勝手にワイザードオンすると、ため息をついた。

「いいよね、ワイザードは、注射を刺されないんだから」

『へっ、例え注射を刺されるとしても、俺は痛くもかゆくもないね』

スバルは白い目で、ウォーロックを見た。

『なんだ、その目は』

「……別に」

スバルはウォーロックをよそに、さっさと先に進んだ。

『おい待てよ、スバル!!』

スバルはさっさと先に進んだ。

ウォーロックは、スバルが進む廊下の風景を見た。何やら、人よりもワイザードが多くなってきた。

『スバル、こっちで合ってるのか?』

「合ってるよ」

スバルは、リアルウェーブのプレートに『ウィザード検査所』となつている部屋の前で止まった。

『おい、スバル……』

「ロック、今日は君の検査もあるんだよ？」

『何！？』

「当然だろ。ロックマンに変身中におきたんだから……ロックマンは、僕とロックでロックマンだろ？」

『き、聞いてねえぞ！！』

「言っていないもん。さ、頑張つてね」  
スバルは不気味な笑顔を見せた。

『ふざけんな。俺は他人に体をいじくられるのが大嫌いなんだ！！』

「へえ、さつき僕にはあんなこと言つといて、自分は逃げるんだ」

『ぐっ……！！』

「本当はロックも怖いんだろ。注射」

『違う！！』

ウォーロックは怒鳴った。

『わかったよ。見てろよな』

ウォーロックは一人、部屋の中に入っていった。

スバルがその後、聞いたのは、ウォーロックの断末魔のような叫び声だった。

## 結果

スバルとウォーロックは、グロッキーな状態ながら、天地のところに向かった。今回のロックマンの精密検査の担当は、天地であった。天地はWAXAのコンピューターの修繕作業、開発協力、その他諸々のため、まだWAXAに通っていた。

スバルは天地の部屋のドアにノックした。

「どうぞー!!」

スバルは部屋の中に入った。

「どうですか、天地さん？」

「……はつきり言って……かなり未知数の力だ。だが、まあ、わかったことは伝えておこう」

天地は難しい顔つきだった。

「お願いします」

「このブラザーアクセスという力。多分、メテオGの流星ネットワーク経由でスバル君のブラザーと共鳴を始めるんだ。そして、その際に、ノイズチェンジと同じ効果が発揮され、ブラザーアクセスが行われる」

「ようは、ノイズチェンジと一緒に体に害はないんですね？」

天地は頷いた。



『……でも、メテオGはもうないじゃねえか』

「これは想像だが……スバル君は、ファントム・ブラックとの戦いの時、無理やりノイズ率を上げ、メテオGの残骸ノイズとの共鳴を図った。それが成功し、ロックマンの体内に小さなメテオGが誕生したんだと思う」

スバルは跳ねるぐらいに驚いた。

「ロックマンの体内に!？」

「元々、電波体の体内にノイズは蓄積される。メテオGもノイズだから、今回も同様だろう。ただ、基本的にはメテオGは体内にはない。ノイズ率が、200%必要だ。それだけなければ、流星ネットワークにアクセスできないし、メテオGも出現しない」

『でも、どうしてミソラのハンターV Gと共鳴出来たんだ?直接的に、あいつはメテオGと関わってねえだろ?』

「それは違うぞ」

天地は首を振った。

「メテオGの影響を受けていないハンターV Gなんてなかった。メテオGのノイズは毎日のように、降り注がれていたのだから。多分、ブラザーバンドを組んでいれば、誰とでもブラザーアクセスはできるだろう。まあ、だからノイズチェンジよりは体に疲れを感じる可能性がある」

「どうしてですか?」

「ノイズチェンジは、ある電波体の姿に似せて、その力を与えつつ、変身するわけだが、ブラザーアクセスは、いうならばブラザーとの以心伝心だ。キズナリヨクはメテオGの強大な力を抑止する働きがある。つまり、キズナリヨクが低い状態でブラザーアクセスをする、最悪、体内のメテオGが暴走を始め、君は消滅するかもしれない」

「……」

『ど、どうしてだよ』

「冷静に考えてごらん。メテオGがもし地球に墜落していたら、今頃地球の電子機器は全て壊れていた。メテオGが体内にある。つまり、電波を破壊する、ということだ。ロックマンの場合は、ノイズに対する耐性は計り知れない。つまり、外にノイズが放出されないまでも、君の体は簡単に破壊できる、というわけだ。なら、この前はなぜ、そうならなかったか。それは、体内のメテオGをキズナリヨクが押さえ込んでいるからだと予想される」

「……じゃあ、もしキズナリヨクが下がったり、低い人とブラザーアクセスしたりしたら」

「最悪、君は死ぬ。そうなれば電波変換が解けるはずだから、二度とメテオGは現れない」

「そんな……！！」

スバルは顔が真っ青だった。

「だが、この力はまだ未知数だ。もしかしたら、打開策を生み出せるかもしれない。とりあえず、とうぶんはこれをアビリティに」

天地はPGMを手渡した。

「ノイズ対策PGMだ。これでメテオGの力が暴走した時、多少は食い止められるだろう」

「……………ありがとうございます」  
スバルはそれを受け取ると、すぐにアビリティに装着した。

「あと、君がここに来るきっかけになったハンターVGが喋ったというやつだが……………多分、ノイズがハンターVGにそういう副産物を産んだんだと思う」

「そうですか」

「……………話はこれで終わりだ。お疲れ様」

「……………あの、天地さん」

「なんだ？」

「このノイズ対策PGM……………ノイズチェンジは……………」

「できないよ。あれは、エースPGMという特別な力が宿ったプログラムだから出来たんだ。これは、ただの対策PGMではない。ミソラ君やゴン太君にも転送してある。ただちゃんとノイズ率は表示される」

「……………そうですか。ありがとうございます」

スバルは虚ろな目で部屋を出た。

## 異変

帰りのウェーブライナーの中、スバルは虚ろな目で外を見ていた。

『……おい、スバル。そろそろコダマタウンだぞ』

ウェーブライナーの中の人は多い。しかし、全員がWAXAからの乗客というわけではない。WAXAの駅で降りるには、まず、WAXAへの定期券がいる。これは、WAXAでしか発行しておらず、必ず乗車のさい、運転手に見せなければならぬ。見せない場合はWAXAは素通りされる。更に、場所を特定できないよう、特殊なジャミングが施されていて、その定期を持たない者に、決して場所を特定できないようにされていた。

他にも、WAXAの建物に入るまでにはいくつかの段階を踏まなければならない。指紋認証しかり、ハンターV.Gのリアルナンバーの認証や、声紋認証、WAXA入館登録者のウィザードの周波数認証などもある。

「……え、何？」

スバルはウォーロックに聞き直した。

『そろそろコダマタウンに着くんだよ』

ウォーロックは苛立ちながら言った。

「え……あ、本当だ」

『しっかりしろよ』

ウェーブライナーは停止すると、ドアが開いた。

コダマタウンの一つ前の駅に到達していた。

スバルはドアを見ていた。

しかし、一向にドアは閉まるうとしなかった。

「……………どうしたんだろ？」

その時、車内アナウンスが響いた。

『ご乗車の皆さん。大変、申し訳ございません。現在、当ウェーブライナーは、ウイルスの影響により、運転を停止しています。もうしばらく、お待ちください』

『ウイルスか。出番だな、スバル』  
ウォーロックは言った。

スバルは返事をせず、俯いた。

『おい、さっさとウイルス達を倒しに行くぞ』

「……………うん」

スバルはウェーブライナーを出た。車内では、電波変換をしたら丸見えだった。

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン！！」

ロックマンは、ウェーブライナーの天井にジャンプした。

ウイルスが二体、ツルハシで天井を攻撃していた。

「バトルカード、ワイドソード！！」

ロックマンの左手がソードに形状を変えた。

「やあー!!」

ロックマンは二体を同時に倒した。

『……あっさりだな』

ウイルス達がいた場所に、ノイズが発生した。

『チツ。あの時と一緒にか!!』

ロックマンは構え直した。  
ウイルス達は、復活した。

「バトルカード、キャノン!!」

一体のウイルスを倒した。しかし、そのウイルスもすぐに復活をした。

「なんで……復活するんだ」

ロックマンはウイルスを倒す動作を何度も繰り返した。  
しかし、ウイルスは破壊と再生を繰り返す。

「ハアハア……くっ」

『これで何度目だ。ウイルス達はいつまで……』

「バトルカード、エアスプレッド!!」

ウイルス達が破壊された。しかし、すぐにノイズとなり、ウイルス

に戻る。

「この……バトルカード、キャ」

ロックマンはキャノンをインストールしようとして、あることに気付いた。

ビジライザーに表示されているノイズ率が200%に迫っていた。

「うわっ!!」

ウィルスの衝撃波がロックマンを襲った。ロックマンは仰向けに倒れた。

『スバル、何を躊躇ってるんだ』

「……ノイズ率が」

『何言ってるんだ。死にそうになったことは何度もあっただろ。今更、何ビビってるんだ!!』

「……確かにそうだけど……それは、僕しかできないことだったからだ。僕が命を懸けなきゃいけないからだ……。ブラザーアクセスをして、もし死ねば、僕の死は無駄じゃないか」

『ふざけんな。それが世界を救った男のセリフかよ!!』

「今までは絆が僕を助けてくれた。でも今回は違う。気づかないうちに絆が壊れていたら……僕は死ぬんだ!!」

『お前……絆を信じられなくなったのか!?!』

「……ッ!!」

ロックマンはウェーブロードに飛び移った。

「……………帰ろう。サテラポリスが来たみたいだ」

『おい、スバル！！』

ウォーロックの言葉には耳を傾けようとせず、ロックマンはウェーブロードを使ってコダマタウンに帰った。



## 言い訳

スバルは展望台に来ていた。

スバルは上を見上げた。広大に広がる空、幾万も輝く星。

「……あそこで、僕は戦ったんだ」

スバルは言った。

メテオG。スバルが命がけで破壊した。

ウォーロックがウィザードオンして現れた。

「……ロック」

『お前は命がけで戦った。みんなのために……。だから、俺はお前のことを嫌いだと思うやつなんかいないと思うぞ』

「……そうかもしれないね」

『……スバル。絆を信じる。お前はそれを信じてこそ、お前なんだ』

スバルは俯いた。ウォーロックの言葉が、胸を刺すような気がした。友達は大切にしなければならぬ、その考えが頭を支配した。

しかし、少しするとその考えは渦を巻き、スバルはモヤモヤした気持ちになった。はたして、自分は何を信じてきていたのか。

絆はもろい。それを痛感したような気がした。

誰でもない、自分によって、それは証明された。

「……ロック」

「なんだ？」

「僕は弱いね」

ウォーロックは返事をしなかった。

「……僕は死にたくないよ」

なぜ、今さらそう思ったのか、不思議だった。

さっきまでは、ブラザーアクセスで死ねば、無駄死にと解釈していたが、それは違うと思えた。ロックマンとして、敵と立ち向かい死ぬことは、決して無駄ではないのだ。

言い訳にも感じた。死と隣あわせの能力を使いたくなくて、死にたくなくて、必死に言い訳をしたように感じた。

つまり、スバルは死にたくないのだ。

しかし、その理由が、まったくわからなかった。

「……死にたくないよ」

今にも消えそうな声で、スバルは言った。

流れ星が流れた。瞬間、それは消え去り、何事もなかったように空には幾万の星がきらめき続ける。

自分もいつかあの流星のようになるのではないか、とスバルは感じた。

それでも、空に広がる幾万の星のように、人間は素知らぬふり。

地球でスバルはちっぽけな存在。ちっぽけな命。いくら地球を救っても、最悪その死すら気づかないだろう。

ロックマンで死んでも、スバルの状態で死んでも一緒だ、とスバルは思った。無駄死にだ。

しかし、すぐにその考えを振り払った。

結局、言い訳じゃないか。

## 苦渋

大吾は天地の部屋のドアをノックした。

「入るぞ」

大吾が部屋に入ると、天地は深刻な顔で俯いていた。

「大吾先輩」

天地は言った。

「どうだった、スバルの検査結果は」

「……………」

天地は返事をなかなかしなかった。

「どうした？」

「……………すいません。スバル君には嘘をつきました」

「……………どういうことだ？」

天地がスバルに話した検査結果を話した。

「……………それで、何を嘘ついたんだ？」

大吾は平静を装いながら言った。

だが、内心はショックだった。息子がまた死と隣あわせ。自分は何もできない。

「……スバル君は……ロックマンは確かにノイズに対する耐性は強いですが、しかし、いくら抑制されていても、どうやらメテオGの力が外に出てしまっているんです」

天地は後ろにあるコンピュータを操作した。

大吾のハンターV.Gからエアディスプレイが出現すると、どこかの電脳世界の映像が流れた。

「……これは？」

大吾は言った。

「この前、コダマ小学校の校門の電脳世界でウイルスが発生しました。いくらアクセスのポップアップを使っても、校門が開かなかったそうで、学校の職員がサテラポリスに通報したそうです。ですが、サテラポリスが来る前に事件が解決。原因究明のため、サテラポリスは電脳世界の映像を貰いました」

「それがこれか」

天地は頷いた。

「これから、ロックマンが来ます」

「なるほどな。ロックマンが解決したのか」

天地は大吾の言葉に返事をしなかった。

電脳世界にロックマンが現れた。

ロックマンはウイルスを撃退した。その後、ノイズが出現する。

ロックマンがひるんでいる間に、ノイズが形を変えていき、ウイルスが元通りになった。

「なんだ、この現象は」

ロックマンがノイズの影響がまったく反撃できそうもない時に、ハーブ・ノートが現れた。ハーブ・ノートがウイルスを撃退した。

「……おかしいと思いませんか？」

「ハーブ・ノートの攻撃では復活せず、ロックマンの攻撃では復活した」

「ええ、そうです」

「だが、ノイズの復活に使うエネルギーが、ロックマンとの戦いでなくなったとは考えられないか？」

「……これを見てください。先ほど、ウェーブライナーが停止する事態が起きました。多分、スバル君が乗ったであろうウェーブライナーです。サテラポリスが到着した時の映像で、ロックマンのような人影が少し残ってました」

エアディスプレイの映像が切り替わる。

ロックマンがウイルスをキャノンで撃退した。しかし、ノイズが現れると、ウイルスが復活した。

ロックマンは突然、ためらったような仕草を見せると、ウイルスの衝撃波を食らった。

その後、ロックマンはサテラポリスのほうを一瞬向くと、姿を消した。

「ウイルスが復活する様子も残されていますね？」

その後、映像は続き、ウイルスはサテラポリスが撃退した。

「サテラポリスが到着するまでの間に、乗客から上から何度か爆発音がしたと証言があります。多分、サテラポリスが来るまで、ロックマンは戦い続けていたんでしょう」

「……サテラポリスで倒せたウイルスを、ロックマンが倒せないはずがない」

天地は頷いた。

「ウイルスが復活したと考えたほうがいいと思います」

「だが……ウイルスはどのように復活したんだ」

「ファントム・ブラックがロックマンに話したことはご存知ですね」

「ああ、スバルから聞いた」

「あの話を聞いて、僕は一つの仮説を立てました。ロックマンの体内に眠るノイズが放出され、それがウイルスが倒された後に出現するノイズに共鳴し、そのノイズがウイルスの状態まで形状が戻ってしまうという現象です」

「聞いたこともない話だな」

天地が深く頷いた。

「多分、攻撃のさいにメテオGのノイズが放出されやすいんでしょ

う」

「……ちょっと待て。メテオGはブラザーアクセスをした時しか、発生はしないはずだろ？」

天地はあつと声をあげた。

その後、考えるように顎に右手を置いた。

「……僕は、根本から間違っていたのかも知れない」

天地はコンピューターを操作し、なにやら難しい持論を組み立てていった。

「……そうか。メテオGのノイズは、元々ロックマンの体内に存在はしているんだ。そして、ブラザーアクセスをすると、ノイズが集結し、メテオGとなる」

「つまり、ブラザーアクセスをしていない時は、バラバラの状態……だから、放出されやすい」

天地は頷いた。

「むしろ、ブラザーアクセスをしている時のほうが安全なのか」  
大吾は言った。

「いえ、もうノイズ対策PGMは渡しているので、多分、体に影響はないでしょう。それにキズナリヨクが低い相手とのブラザーアクセスは、メテオGのノイズが集結しにくいから、体に及ぼす害はあ  
るはずです」

「……だが、今のロックマンは危険だな。歩くメテオG……電波は

ひとたまりもない。まだ、そういった報告がされていなくても、いつかは……」

「しかも、強敵と戦ったりしたら  
天地は首を振った。」

「いや、キズナリヨクが高ければ、メテオGは抑制されたままだから、大丈夫でしょう。スバル君が、絆を信じられなくなるとは思わない」

「ダメだ!!」

大吾は声を荒げた。

「……え？」

「そんな楽観的な考えで、もしスバルの周りで電波障害が起きたらどうする。その時に一番傷つくのは、スバルのはずだ」

「……じゃあ、どうするんです？」

「打開策はある。まず、メテオGの破壊、もちろん、ロックマンが耐えきれないようにしなければならない。それか、メテオGの集結を半永久化する。そうすれば、ロックマンのノイズに対する耐性、キズナリヨク、この二つで抑えこめる。だが、ロックマンは一生メテオGを抱えて生きなければならない。とりあえず、このどちらかが一番だろうな」

「……どっちも苦渋の決断ですね。……でも、それができるまでは？」

大吾は俯いた。



「……まさか……!!」

「隔離しかないだろうな」

## 逃走

「……あかね。話があるんだ」

大吾は深刻そうな顔で、あかねを呼んだ。

「何？」

あかねは大吾の座るソファーの前までいった。

「どうかしたの？」

大吾は一向に俯いたままだった。

「……実はな」

スバルはその一部始終を、隠れながら玄関で見ている。声は聞こえないが、何やら深刻な顔付きにあかねは変わっていった。

「……出そびれた」

『何か二人とも、神妙な顔付きだな』

ウォーロックは声を立てないように喋っているようだった。

スバルは頷いた。

大吾の声が、少しだけ聞こえた。

「……だから、スバルを隔離しなければならぬ」

「隔離！？」

スバルは大声で言ってしまった。

大吾とあかねの視線が、玄関のほうに向いた。

「……スバル？」

「いるのか、スバル」

スバルは隠れるのをやめ、ゆっくりと二人の視界の範囲に入った。

「……僕は隔離されるの？」

「ああ、そうなるはずだ。スバル、これはお前のためでもあるんだ」

「隔離するのが……僕のため？」

「そうだ」

「……違うよ。……そんなの僕は嫌だ!!」

「スバ……」

大吾が言い切る前に、スバルは家を飛び出した。

「スバル!!」

大吾が叫んだ。

スバルは家の横にあるウェーブステーションの前に立った。

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン!!」

## 緊急指令

ハーブ・ノートは欠伸をした。

すでに時刻は、一般人は寝る時間だ。当然、ミソラも寝ていたのだが、ハンターV.Gにメールが届いた。送り相手は、サテラポリスだった。

至急、WAXAに来てくれ、という内容だったので、眠い目をこすりながら、ミソラは電波変換し、WAXAに向かっていたのだ。WAXAに着いたので、ミソラは電波変換を解いた。

様々な認証をクリアし、ミソラはWAXAに入っていった。

サテラポリスには、すでに眠そうなゴン太やヨイリー、長官やサテラポリスの職員がいた。

「遅れてすみません」

ミソラは頭を下げた。

だが、まだスバルが来ていないようなので、自分が一番最後というわけではないと思った。

「……全員揃ったな」

長官が口を開いた。

ミソラはえっ、と声をあげた。

「あの……スバル君は？」

長官やヨイリーが俯く。

ミソラも、直感でスバルが何か絡んでいると気付く。

「……単刀直入に言う。今回の指令は、ロックマンを捕まえてくる

「というものだ」

一同がざわつく。

ゴン太も口を半開きにし、驚いた様子だった。

「ス、スバルがどうかしたのかよ……じゃなくて、ですか？」

ゴン太が言った。

「……ミソラ君はすでにロックマンの新たな力を見ているはずだ」

「新たな力？」

ミソラは検討もつかなかった。

ロックマンが新たな力を手にしたとすれば、それはファントム・ブラックとの一件でだろうか。

だとしたら、気絶していたミソラはわからない。

「……そういえば、君は気絶していたんだっただな」

「すみません」

それよりも、スバルがどうしたのだ。なぜ、スバルを捕まえなくてはならないのか。

長官がブラザーアクセスの力を説明した。

そして、メテオGのノイズのことも。

「……歩くメテオG……あのロックマンが……地球を救ったロックマンが」

サテラポリスの職員が呟いた。

「ロックマン……スバル君に自覚症状はないが、キズナリヨクが低

下したら、電波障害がいつ起きてもおかしくないだろう。だから、一刻も早く彼を隔離しなければならぬ」

「あの隔離した後は、いつ解放されるんですか？」

ミソラは訊いた。

「……それはわからないわ。WAXAの技術力次第かしら……ね」

「そんな……！」

ミソラが意気消沈している間に、話は終わっていた。職員が次々と持ち場に離れていった。

「あ、ミソラちゃんとゴン太ちゃんは残って」

ヨイリーは言った。

移動を開始しようとしていたゴン太は、多少顔を歪めながら、ヨイリーの元に向かった。

「入ってきて」

ヨイリーの言葉で、ルナとキザマロが入ってきた。

「……みんなに集まってもらったのは、スバルちゃんの今のキズナリヨクを確認するためよ。すでにマモロウちゃんやマナブちゃん……それに私のキズナリヨクは0よ」

四人がハンターV Gを取り出し、キズナリヨクを確認した。

「……この前までは100だったのに……今は15しか」  
ルナは言った。

「僕は10です」  
キザマロは言った。

「俺も10だ」  
ゴン太が言った。

「……ミソラちゃんは？」

「……100です」

ルナ達から、えっと驚いた声があがった。

「……なら、スバルちゃんはミソラちゃんの話なら耳を傾けるかもしれないわね」

「……はい」

ミソラは頷いた。

「ミソラちゃん。危険な任務になるかもしれないけど……スバルちゃんを説得してみようだ。……もし、失敗したら、急激にキズナリヨクが下がって、メテオGのノイズが放出され、あなたの体にも異変が起きるかもしれない」

「それでも構いません。やらせてください」  
ミソラは言った。

「……本当にいいのね？」

ミソラは頷いた。

「……今、WAXAが総力をあげて、ロックマンを探しているわ。そろそろ目撃情報が入ってきても……」

『ナンスカで、ロックマンとおぼしき電波体の目撃情報があった。至急、B班は向かうように』

ミソラは、ようやくサテラポリスの職員達が班分けされていたことに気が付いた。

「ナンスカ……。すぐに向かいます」

「ミソラちゃん」

ルナがミソラを止めた。

「何、ルナちゃん」

「……今は、どうしてあなたのキズナリヨクだけが下がっていないか。……聞かないわ。……だから、必ずロックマン様を……スバル君を連れて帰ってきなさい」

ミソラは笑顔を見せると、頷いた。

「行くよ、ハープ」

『ええ』

「トランスコード、ハープ・ノート……!」



## ナンスカ

「電波転送、スカイウエーブ、オン・エア!!」  
ハープ・ノートはスカイウエーブを進んだ。

「……ミソラ、大丈夫？」

「何が？」

「……もし、スバル君が説得に耳を傾けなかったら……戦いになるかもしれない」

ハープ・ノートは、ピタツと動きを止めた。

「……ハープ、おかしいと思わない？」

「……何をかしら」

「スバル君は、今まで何度も死にそうになってるんだよ。なのに、急に死ぬのが怖くなって、絆を信じられなくなったんでしょ？」

「それで、隔離の話が追い討ちをかけたのよね」

「……みんなの迷惑になるくらいなら……彼なら、隔離は喜んでくれると思わない？」

「確かにそうね」

「それに、やっぱりおかしいよ。今更、死ぬのが怖くなるなんて」

『……ミソラ、今は、スバル君に会うのが先決じゃない？全ては、スバル君に聞けばいい』

「……そーだね。行こう、ハーブ！」

スカイウェーブを進むと、ナンスカへのワープゾーンを見つけた。ミソラはそこから、ナンスカに降りたった。

ハーブ・ノートは、サテラポリスのウィザードを見つけた。

「あの……」

ウィザードが振り返った。

『ハーブ・ノート……か……』

「あの、ロックマン……は」

突如、そのウィザードが真っ二つになり、爆発した。

ハーブ・ノートは一瞬何が起きたかわからなかったが、すぐにわかった。

「……スバル…君？」

ハーブ・ノートが見たのは、冷たい瞳のロックマンだった。

## 説得

「……スバル君？」

ハープ・ノートは呼びかけた。

「ミソラちゃん、どうしたの？」

ロックマンの声は抑揚がなく、そう言っておきながら、まるで興味なしといった感じだった。

「あ、あのさ。戻ろうよ、WAXAに」

ハープ・ノートは危険を察したが、任務を怠れないと思った。

「……戻れば、僕がどうなるかわかってるの？」

ハープ・ノートは無言で頷いた。多分、何を言っても説得は不可能だ、とハープ・ノートは思った。

しかし、説得しなければ。

「……スバル君、ルナちゃん達も心配してるよ？」

「……そっか。でも、今の僕は逃げるのが先決なんだ」

ロックマンは周りを見回した。

ロックマンが前に一歩踏み出すと、ハープ・ノートがロックマンを進む道を遮るように、大の字で立っていた。

「……何をしてるの？」

「……スバル君。今の君がどこかに行くと、迷惑がかかるよ」

「……そうだね。今、僕は犯罪者みたいなものようだし」  
ロックマンはあざけ笑った。

「だから、サテラポリス遊撃隊のミソラちゃんも駆り出されたんだね。ブラザーの僕を裏切って」

『ミソラ、スバル君とのキズナリヨクが下がったわ』

ハープ・ノートは額から汗を流した。

「違うよ。今、スバル君の体にはメテオGがあるの」

「もう聞いたよ。天地さんから。でも、ブラザーアクセスをしなければ、発生はしないと聞いた」

「違うの。メテオGは、ブラザーアクセスをすることで集結して……そうじゃないときは、バラバラの状態。だから、外に放出されてしまうの」

ロックマンは俯いた。

「天地さんは嘘をついたのか」

「そうじゃないよ。スバル君に教えた時は、まだわかってなかったの」

「じゃあ、ミソラちゃん。どうして、僕が隔離されなきゃいけないのか……。教えて？」

「……スバル君のキズナリヨクが下がってきているから、メテオGの抑制ができなくなってきてるでしょ？」

ハープ・ノートは肩で息をし始めた。

メテオGのノイズの影響が、ノイズ対策PGMを付けていても、体に表れていた。

「ブラザーアクセスをしたほうが安全なの？」

「うん。キズナリヨクが高い相手ならね」

「……僕は死にたくないんだ」

「……なんで？」

ロックマンは数秒の沈黙の後、首を横に振った。

「わかんない」

「……今、みんながスバル君のために頑張ってるよ」

ハープ・ノートは片膝をついた。

『ミソラ、ノイズの影響が』

ハープは言った。

「……大丈夫だよ、ハープ」

ハープ・ノートは立ち上がった。

「……ミソラちゃん。やっとわかったよ。僕がどうしても死にたくないか」

ハープ・ノートは目を丸くした。

「……でも、だからこそ、僕は逃げる」

ロックマンはハープ・ノートの横を歩いていこうとした。

ハープ・ノートに、それを止める力は残ってなかった。

「……待つて!!!」

ハープ・ノートは声を荒げた。

力は残ってないが、気力で構えた。

「何をする気？」

「逃げる気なら……私を倒していきなさい。ロックマン!!!」

「……僕は君を傷つけないんだ」

「……私は……あなたに何かを傷つけてほしくないの」

今のロックマンが行動すること、それは、周りに多大な被害をもたらすことになる。

必ず、誰かが傷つく。

「……わかったよ、ハープ・ノート」

「いくわよ」

ウェーブバトル

ライド・オン!!!

## キズナリヨク

「ハアハア……シヨックノート!!」

ハーブ・ノートはギターを弾く。

ロックマンはそれをすんなりかわした。

「……ハーブ・ノート。そろそろいいかい？」

「……ロックマンは攻撃をかわしてばかり……」

ハーブは呟いた。

確かに、ロックマンはハーブ・ノートに攻撃をする素振りは一切見せない。

「それに……キズナリヨクが一向に減らない」

スバルとミソラのキズナリヨクは、一度低下した後、再び上昇していた。今は100だ。

「どうして……どうして私を攻撃しないの？」

ハーブ・ノートは肩で息をしながら言った。

「……もう言ったじゃないか。僕は君を傷つけないんだ」

「だったら、WAXAに戻って。私、今の君は見たくないよ!!」

「……」

ロックマンは視線を揺らがせた。

内心、迷っていた。

「…………スバル君!!」

ハープ・ノートの声が、胸にグサリと刺さったようだった。

「…………スバル」

ウォーロックが囁くような声で言った。

「お前が死にたくない理由…………それに、隔離されたくない理由…………同じ理由だろ?」

ロックマンはギクリとした。

ウォーロックの言っていることは正しかった。

ロックマンはハープ・ノートを見た。苦しんでいる。

「…………ミソラちゃん」

ハープ・ノートがロックマンを見た。

涙が浮かんでいた。

「…………僕は君を傷つけたくなって…………」

それがスバルが死にたくない理由で、隔離されたくない理由だった。今、スバルが死ねば、たかさんの人が気づかないかもしれない。だが、ミソラ達は必ずそれを知り、悲しむ。

好きな人に、そんな思いはさせたくない。そんな子供染みた思いで、スバルはブラザーアクセスを拒み、絆を信じられなくなったのだ。だが、ミソラだけはキズナリヨクが下がらなかった。それを不思議にスバルは思った。理由に気付いたのは、ハープ・ノートが、ロックマンの目の前で片膝をついたさっきだった。

自分の発するノイズのせいで、一番大切な…………大好きなミソラが苦しんでいる。守りたい。



そう思ったのだ。

いや、好きという感情ではなかったのだろう。

スバルはルナやゴン太、キザマロだって大好きだ。

スバルはきつとミソラを愛しているのだ。

絆ではない。これは愛なのだ。

絆を超えた、もっと強い力なのだ。

だから、ミソラのキズナリヨクは下がらなかった。

絆以上の力で、ミソラとは繋がっているのだ。

そして、だからこそ、その人を傷つけないと思うのは当然なのだ。

しかし、スバルは選択を迫られていた。

今、確実にミソラは傷ついているのだ。

これでは、本末転倒であった。

「……お願い、スバル君」

ハーブ・ノートは力なく言った。

ロックマンは返事も出来ず、ただ押し黙った。

隔離されれば、ミソラは傷つく。

ハーブがウィザードオンしてでてきた。

「スバル君、ミソラはスバル君に傷ついてほしくないの。……だから、隔離の話も否定的じゃなかった。このままあなたが外にいれば、スバル君は絶対に傷つくから。それに、もし、スバル君が隔離されても、ミソラは離れる気はないわ。スバル君を、一人孤独な空間にいさせる気はない。危険でも、一緒にいる気よ。それがミソラの覚悟なの。スバル君が、少しでも気が和らげば、ミソラはそれでいい」

「……スバル君が……言ってくれたんだよ」  
夢でだけ、とハープ・ノートは笑いながら付け足した。  
「助け合って……守り合おう、って」

ロックマンはブラザーアクセスが発動する前の、真っ白な空間でのことを思い出した。

「……あれは……本当にミソラちゃんだったの？」  
以心伝心。まさしくそれだった。

ミソラを傷つきたくなくて、とスバルは思っていた。  
しかし、それが嘘だったことにスバルは気付いた。  
本当は自分が傷つきたくないのだ。

その中に、自分が傷つければ、ミソラも傷つくというような状態で、  
ミソラが絡んでいたのだ。  
死にたくないと思ったのもそれだ。  
自分が死ねば、ミソラに会えなくなる。  
そうなれば、ミソラも悲しいから。  
都合よく言い訳をしただけだった。  
言い訳をして、不都合から逃げ、周りに、ミソラに迷惑をかけているだけだった。

「……ごめん」  
ロックマンは呟いた。  
歳を取るにつれ、人間は賢くなるから卑怯になる。  
ほら、また言い訳をしている。

スバルは自問自答を続けた。  
何が正しく、何が間違っているのか。  
だが、間違いなく、今の自分は間違っている、とスバルは思った。

「…………ミソラちゃん」

「…………何？」

「僕…………隔離されるよ。待ってる。父さんや天地さんを信じて…………」

ハーブ・ノートは汗びっしょりながら、笑顔を見せた。  
ロククマンは自分が情けなく、俯いた。

「…………星河…………スバル」

だが、スバルはすぐ顔を上げた。

「ミソラちゃん、僕の後ろに!!」

ハーブ・ノートはぐったりしながら、スバルの後ろに回った。

「…………ごめん」

ハーブ・ノートは呟いた。

返事はしなかったが、スバルは罪悪感に駆られていた。  
謝るべきは自分なのだから。

「誰だ!!」

静寂が二人を不安に駆る。

「…………ウイングブレード!!」

「そこかー!!」

ロックマンは素早くバトルカードをインストールしていて、左手はソードと化していた。

相手の攻撃の威力は凄まじく、ロックマンは急いでソードで弾き返した。

軽やかに、相手は舞った。

その後、ロックマンは目を丸くした。

「……………暁……さん……?」

「……………嘘」

ハーブ・ノートは両手で口を隠した。

アシッド・エースが、確かに二人の前に立っていた。

## 記憶

「暁さん、生きてたんですね!？」

ロックマンは歓喜とも取れる声を発した。

「良かった……本当に良かった」

ハープ・ノートは泣きじゃくる。

「……星河スバルに……響ミソラ。我らがマスターの敵  
アシッド・エースは言った。

「え……今、なんて？」

「……あれ」

ハープ・ノートは電波変換が解かれ、倒れた。

「ミソラちゃん!？」

ロックマンはミソラに駆け寄る。

どうやら気絶しているようだった。

しかし、ロックマンには理由がわからなかった。

「ッ。スバル、こいつメテオGのノイズを発してるぞ。だから、ミ  
ソラも耐えきれなくなったんだ!！」

「暁さんが……メテオGのノイズを？」

「それに、暁は今、お前を攻撃してきただろ!！」

「……暁さん。どうしたんですか、一緒に戦ったのに!！」

「……一緒に戦った？」

『……まさか、記憶が!?!』

「そんな……」

『スバル、来るぞ!!!』

ロックマンはソードを盾にした。

アシッド・エースが、もう一度突っ込んできたからだ。

「コガラシ!!!」

ロックマンはそれをかわした。

「くらえっ!!!」

ロックマンがかわした先に、アシッド・エースは先回りしていた。

ロックマンはソードで二度、切りつけられた。

「くそ……。戦うしかないのか」

『スバル、後ろだ!!!』

ロックマンの背中にレーザーが当たる。

『いい加減にしろ。このままじゃ死ぬぞ!!!』

死ぬ。もうミソラに会えない。

「……そんなの嫌だな」

ロックマンはバトルカードをインストールした。

「キャノン!!」

ロックマンはアシッド・エースに向けて放った。

しかし、かわされた。

アシッド・エースが、また迫ってきた。

「いまだ!!」

アシッド・エースが攻撃に転じる一瞬の隙を、ロックマンはついた。

アシッド・エースが吹き飛ばす。

「ぐっ!!」

「ロック、ノイズ率を200まで上げるよ」

『ブラザーアクセスだな!!』

ロックマンは頷いた。

「僕はブラザーを……みんなを信じる!!」

ブラザーよりも、大切な存在ができて、スバルはそのことを忘れていたのかもしれない。

信じる。友達ならば、ブラザーならば、むしろ当然のことだ。

『それで……誰とするんだ?』

ロックマンはアシッド・エースを指差した。

「……僕は、暁さんを信じてるから」

ウォーロックは呆気にとられた様子だったが、少しすると笑いだした。

『よおし、行くぞ。スバル!!』

「うん!!」

ロックマンは構えた。



記憶（後書き）

本当はアシッド・エースとの戦いはもうちょっと早くしたかったんですけどね……。

スバル君がぐれちゃって（笑）

## 暁シドウ

「バトルカード、ワイドソード!!」

ロックマンはアシッド・エースを斬りつけた。

現在のノイズ率は、50%。

「コガラシ!!」

アシッド・エースが竜巻を発生させた。

ロックマンはそれをジャンプして回避した。

「バトルカード、エアスプレッド!!」

ロックマンが放ったそれは誘爆し、アシッド・エースを襲った。

アシッド・エースはダメージを受けた素振りを見せない。

「……そんなものか？」

アシッド・エースは言った。

「……ロック、ノイズ率は？」

『70だ』

「そっか。……ノイズ率が下がらないうちに!!」

ロックマンはソードをインストールし、アシッド・エースに突っ込んだ。

「ふん……!!」

アシッド・エースの左手がソードに変わると、ロックマンのソードを受け止めた。

刃が数秒間交わるが、お互いに引けを見せない。

ロックマンは後ろにジャンプした。

勢いをつけ、再度突っ込んだ。

アシッド・エースは無言で攻撃を止めた。

「……やっぱり強い」

『スバル、ノイズ率が下がってきたぞ!!!』

「くそ……」

その時、二人の周りに大量のノイズが現れた。

『この二人の戦いの影響か!!!』

「……そうだ」

ロックマンはアシッド・エースと距離をおいた。

「ロックバスター!!!」

ロックマンの狙いはアシッド・エースではなかった。  
ノイズが消し飛ぶ。

『……スバル、何を?』

ノイズは大きくなり、復活した。

「僕の中のノイズと共鳴することで……あのノイズは強化され、復

活した。そして……僕の中のノイズの力が入っているからあのノイズは僕と磁石のようにくっつく!!」

ノイズがロックマンに近づいていった。

ロックマンは同じ行為を続けた。

『……スバル、気をつけるよ。暁のヤロウとはブラザーだが、キズナリヨクは0だ』

ロックマンは頷いた。

「……ロック、ノイズ率は？」

『……もう、200だ!!』

ハンターV.Gが鳴った。

『ブラザーバンド、暁シドウ。キズナリヨク0。ブラザーアクセス』

ロックマンを閃光が包み込んだ。

## 以心伝心

真っ白な空間にロックマンはいた。

「……………ミソラちゃんとブラザーアクセスした時と同じだ」

どうやらこの空間が、ブラザーアクセスしてブラザーと繋がるさいに、前段階として来る空間だということに、スバルは気付いた。来る理由はただ一つだろう。ブラザーとの共鳴を図るのだ。

ロックマンの目の前に、一瞬で暁シドウが現れた。

「……………ここは？」

シドウは周りを見回した。

「ここには、暁さんと僕しかいません」

ロックマンは決意を露わにした目で、シドウを見た。

「……………星河スバル。どういうことだ」

抑揚のない喋り方で、シドウは言った。

「ここは、僕がブラザーに力を借りるためにある場所です」

「ブラザー……………だと？」

ロックマンは頷いた。

「……………暁さんは僕とブラザーだ」

シドウは俯いた。

「……そんな記憶、俺には存在しない」

「だったら、僕が思い出させる!!」

「何？」

「……ブラザーアクセスは、ブラザーと共鳴する。だったら、僕の暁さんに関する記憶を、暁さんに共鳴させる」

『そんなことできるのか!?!?』  
ウォーロックが驚いたように訊いてきた。

「……わからない。暁さんとのキズナリヨクは0だし、共鳴されな  
いかもしれない、けど、何もしないなら、ブラザーアクセスした意  
味がない!!」

「……お前」

シドウはつぶやいた。

「行きます!!」

その空間に、閃光がほとばしった。

ハンターV.Gが鳴った。

『ブラザーバンド、暁シドウ。キズナリヨク、上昇。30。ブラザ  
ーアクセス』

## 白い部屋

スバルの視界はうつすらとぼやけていた。目を細め、それでも戻りそうもないので、右手でこすった。視界がゆっくりと良好になっていった。

「……ここは？」

清潔感のある白い壁の部屋だった。部屋の広さは、スバルの部屋程度あるだろう。

『ようやく起きたか！！』

突如、目の前にウォーロックが現れた。スバルは驚き、ベッドの端までダイブした形になった。

「……ロック。びっくりするじゃないか」

呆れたようなうんざり声で、スバルは後頭部を掻きながらいった。

『……ああ！？文句があるのかよ。こっちはお前が起きるまで、ずっと退屈だったんだぞ！！』

自己中心的な発言を、スバルは無視しつつ、頭の中でリピートしていた。

お前が起きるまで。はて、自分は最後にいつ寝ただろう。寝た？いや、それはおかしいだろう。まず、知らない場所で寝ていたのに、それを安易に受け取ることが、スバルにはできなかった。なら、ここはどこだ。

そう思うと、記憶が鮮明に蘇ってきた。

「ロック、暁さんは!?!」  
スバルは言った。

『ああ、あいつなら……』  
ウォーロックが言いかけた瞬間、左側にあつた自動ドアが開いた。

「スバル君!?!」  
そこから、ミソラが笑顔で現れた。  
ミソラは走ってスバルの横まで来た。

「良かった。私が意識を取り戻したら、暁さんもスバル君も倒れて  
て……」

「……じゃあ、暁さんは」  
スバルはつぶやいた。

『ああ、記憶を取り戻した。それで、今頃は医務室で寝てんじゃね  
えか?』

「ううん。もう起きて、元気に仕事してるよ!?!」  
ミソラは言った。

「……あれ、医務室はここじゃ……」  
スバルは言った。  
当然、怪我人としてスバルも運ばれたはずなので、そこにいておか  
しくない。

『違う。ここは隔離部屋だ』

ああ、そういえば、とスバルは思った。  
自分が隔離対象にされていたことなど、シドウとの戦いから忘れて



いたのだ。

「……あれから何日経ってるの？」  
スバルは訊いた。

『大体、十八時間だな』

またリアルな時間だな、とスバルは思った。  
三日三晩寝ていたほうが、まだ暇つぶしにはなっただろう。

「本当に……良かったよ。スバル君が無事みたいで……」  
しゅんとした様子で、ミソラは言った。

前言撤回だ。多分、三日三晩寝ていたら、ミソラをかなり不安がらせていただろう。

ハンターV.Gが鳴った。

『スバルのだぞ』  
ウォーロックが言った。

スバルはハンターV.Gを取ると、エアディスプレイを出した。

「よお、スバル」  
シドウがニヒルな顔で画面に写っていた。

「曉さん!!」

「おいおい……元気なことだな」  
シドウが頭を描いた。

「……暁さん。記憶が戻ったんですね」

「ああ、おかげでな」

「……それで、要件は？」

「用があるのは、お前じゃなくて、ミソラだ。お前には……あれだ、お目覚め祝いで電話した」

スバルは笑ってみせた。

「わかりました。……ミソラちゃん」

スバルはエアディスプレイの向きを、ミソラの前に行くようにコントロールした。

「……はい。わかりました」

まるで、スバルに聞こえないようにするためのように、ミソラの声は小声だった。

シドウの声も、小さかった。

エアディスプレイが消えた。

「ごめん、スバル君。私行かなきゃ……！」

「任務が入ったの？」

「うん」

ミソラは頷いた。

「そっか……頑張ってるね」

ミソラは再度、頷いた。

「それじゃ……仕事でここに来れない日は、毎日電話するからね」

「毎日？それじゃ、ミソラちゃんが参っちゃっよ」

ミソラはフフッと笑った。

「わかった。じゃあ、できるだけにするね!!」

それじゃ、とミソラは言いながら、手を振り部屋を出て行った。

「……あれ、そういえば、暁さんはどうして僕が起きたってわかったの？」

『ああ、あれだ』

ウォーロックが部屋の隅にある、カメラを指差した。

『四六時中、お前は見張られてるぜ』

スバルは思わずため息をついた。

「本当に？」

ウォーロックは頷いた。

『まあ、ここは、必要以上に色々揃ってるぞ。風呂、トイレ、テレビ、外の景色も見れるようだ』

ウォーロックが、あっちにたくさんあると言っように、ミソラが出て行ったほうとは逆側にある扉を指差した。

「……まさか、トイレとかにもカメラがあるの!?!」

『あると思うか?』

そこまでプライバシーを漁ると思うか、とウォーロックは言わんばかりの勢いだっただけ。実際、付いていない。

『ただ……強力なジャミングがしいてある。本当は、外に出るのも気持ちワリイ』  
ウォーロックは言った。

「……まあ、我慢するしかないか」

## スカウト1

「よく来たな、ミソラ」

シドウはうまい棒をかじりながら、言った。

ミソラは苦笑いを浮かべた。

「そろそろゴン太も来るはずだ」

それから三分後、ゴン太が現れた。

「よし、揃ったな。それじゃあ、今日の任務だ!」

「……暁さん、元気ですよ。スバル君なんて、ようやく起きたってところなのに」

「うん? まあ、な。あいつは寝坊助だろ。なんとなく」

「俺に負けず劣らず、寝坊助だぜ。……じゃなくて、です!」

「まあ、ゴン太は明らかにそういう感じだしな」

シドウは笑った。

「……それに、来るべき敵に備えなければ……今度はロックマンが戦力にならない可能性があるんだからな」

ミソラは息を飲んだ。

あの話を聞いた時、驚き、執念深さを感じた。

あれは、シドウが目覚めた10時間前にさかのぼる。

「……ここは」

シドウはベッドから上半身を起こしながら、言った。

「起きたのね、シドウちゃん」

「……ヨイリー博士」

シドウは言った。

その時、ベッドを囲んでいたサテラポリス職員が、安心したように息を吐いた。

「良かった。記憶が戻ったのね」

「ああ、そういえば……スバルは？」

シドウは全てを悟ったようだった。

ミソラはスバルの手を握った。こうすれば、早く起きるかもしれないと思った。

スバルは目を固く閉ざしていた。

『ミソラ、そろそろ休んだら？昨日から寝ずにその調子じゃない』  
ハーブはウィザードオンすると、言った。

ミソラは首を振った。

「私……スバル君と、守り合って、助け合って約束したから……」

少しでも、力にならなきゃ」

ハープはため息を吐いた。

『……今のあなたの行動。それは、あなたの自己満足よ。スバル君は、目を覚ましてない』

ミソラの心にグサツとハープの言葉が刺さった。

確かに、こんなことをしてスバルが目覚めるなら、スバルはとつくに目覚めているだろう。

それに、スバルを起こすことは、当然だが、助けることでも、守ることでもない。

「……スバル君を見ると……いつも不安になる。FM星人との戦い、ムー大陸での戦い、メテオG。私、いつも助けてもらってばかりだった。ちつとも、助けてあげてないのに」  
それは事実だった。

今回のアシッド・エースとの戦いも、ミソラは何もできなかった。

『……今のスバル君は、アシッド・エースとのキズナリヨクが低い状態で起こしたブラザーアクセスの影響で、意識を失っているだけ……その内、戻るわ』

「その内って……いつ？」

『それはわからない』  
ハープは言った。

「……私は、スバル君のそばにいる気なの。この隔離部屋から、一歩もでるつもりはないよ」

『ミソラ』

ミソラのハンターV.Gが鳴った。電話のようだ。ハンターV.Gから、エアディスプレイが出現した。ヨイリーがうつる。

『シドウちゃんが起きたわ』

「本当ですか!？」

ミソラは言った。

『ええ……みんなに話したい話があるそうだから、できれば、来てくれない?』

「え……えっと」

『ミソラ』

ミソラがたじろいでいると、ハーブが横槍を投げてきた。  
『行くわよ』

「……でも」

ミソラはスバルを見た。

『今ここにいても、スバル君との約束は果たせないわ。だったら、今までスバル君ができてくれたことを、スバル君にしてあげましょ。それが、約束を果たせることだと思わない?』

「……スバル君がしてくれたこと?」



ハープが頷く。

『命がけで、みんなを守ることよ』

ミソラは俯いた。

『一番の近道は、まず、WAXAの力になることよ』

「……わかった。すぐに行きます。ヨイリー博士!!」

『ええ、待ってるわ』

ヨイリーがうなずきながら、言った。

エアディスプレイが消えた。

「……そうだね、ハープ。スバル君はいつも命がけで守ってくれた」

ハープが頷く。

「……ただね、ハープ。一つ違うよ」

『どうということ?』

ハープは首を傾げた。

「……私は、スバル君と同じように、命がけで守る。スバル君はみんなのためにしたんだろうけど……でも、私はスバル君のためだけだよ。スバル君を守るために、WAXAのお手伝いをするの。スバル君に傷ついてほしくないから、WAXAをお手伝いする」

ハープは数秒黙った後、クスツと笑った。

『そつね。なら、頑張りなさい』

「うん……」

ミシラは部屋を飛び出した。

## スカウト1 (後書き)

ハープは首を傾げた、という表現を使ったが、果たしてハープに首はあったか？

## スカウト2

ミソラは司令室に入った。  
すでに、何十人も人間が集まっていた。

「ミソラちゃん!!」

ゴン太がノシノシとミソラの前に走ってきた。

「あつ、ゴン太君!!」

「スバルはどうだった!？」

ミソラは首を振った。

「まだ、起きないみたい」

「そっか……ま、スバルなら、すぐに元気になるだろ!!」

楽観的な物言いだったが、何よりそれがミソラの励みになった。

「……みんな、こっちに注目してちょうだい!!」

ヨイリーの声が響いた。

雑談していた人間達も、一斉に黙った。

「みんなも知ってると思うけど……シドウちゃんが帰ってきたわ」

シドウが出てきた。

「迷惑をかけてすまなかったな」

「……それで、シドウちゃんがみんなに言わなければならぬこと

があるみたいなの」  
ヨイリーが言った。

シドウは頷いた。

「……やつは死んでいなかった。今も、再び地球を乗っ取るうと、陰でメテオGのノイズを拡散させたり、それを知りうる、手懐けさせられそうな電波体に与えなりしているんだ」

「……やつとは誰だ!？」

「……ディーラーのボス、キングだ」

一斉に周りがざわついた。

キングと言えば、ロックマン、スバルのおかげで死んだと思われていたからだ。

「でも、ロックマンが倒したはずじゃ」

ミソラが言った。

「あいつがいた場所が悪かった。メテオGにいたせいで、やつの残留電波は、ノイズに共鳴され、復活して、命を取り留めた。実は、俺も同じだ。あいつが、俺が死んだディーラーのアジトにメテオGのノイズを作為的に飛来させたことが原因だ。うまいこと、記憶のデータだけは消されたが……スバルとのブラザーアクセスのおかげで取り戻せた」

「……キングは今どこに!？」

シドウは首を振った。

「悪いが……覚えていないんだ。キングにうまくやられた」

「ロックマンのいない今、戦力不足は否めないわ。だから、手分けをして、スカウトをしてきてちょうだい。これが今回の指令よ。武力行使の可能性が予想されるから、基本的には遊撃隊に任せることになると思うわ」

ヨイリーが言った。

「まさか、またソロに!?!」

ゴン太が叫んだ。

以前、スカウト組は痛い目にあっている。

「ええ、彼も候補の一人よ」

「……ミソラ、ゴン太。スバルがいない分、お前たちの負担は大きくなると思うが、頼めるか!?!」

「はい。大丈夫です!!!」

ミソラは言った。

「おつよ!?!」

シドウがニツコリと笑った。

「なら、指令の時はおって連絡する。今日は休め、特にミソラ!?!」

ミソラは背筋をピンと伸ばした。

「いつ目覚めるかわからない王子様を待つなんて、体に毒だぞ」

ミソラは顔を赤らめながら、俯いた。

「わかりました」  
そうつぶやいた。

ミソラはスバルの眠る部屋に入った。

『ミソラ、さつき暁さんも言ってたじゃない。体に毒だって』

ミソラは笑顔で首を振った。

「スバル君と一緒にいる時間が、私は一番幸せなの。だから、疲れなんか感じないよ!!」

それから10時間経ち、スバルは目覚めた。ある意味、ミソラの体も大きな負担がかからずに済んだ。

ミソラはシドウに呼ばれ、司令室に足を運んだ。そして、ゴン太が現れた。

「……さっそく、指令をクリアしようじゃないか」

「今日はどこに行くんだ？」

「ええと…… ナンスカだ」

「またナンスカか……」

「そういえば、ミソラはスバルを追っかけて行ったばかりだったな」

「暁さんもでしょ？」

ミソラは笑ってみせた。

「そういえばそうだったな」

シドウは頭を掻く。

「それで、誰をスカウトするんですか？」

「ん、それは行ってからの楽しみだ。ま、もういなくなってるかもしれないけどな」

「えー」

「よし、それじゃ、さっそく行くとしよう……」



### スカウト3

ナンスカに、三人が降り立った。

「それで、どこに？」

ハーブ・ノートはアシッド・エースに訊いた。

「遺跡だ。そこに、目的の奴はいる」

アシッド・エースは言った。

遺跡に入ると、爆発音がした。

「何！？」

「……いるようだな」

アシッド・エースはうっすらと笑顔を浮かべた。

「進むぞ」

「……いくよ、ヒカル！！」

「おうよー！！」

その声が聞こえた後、再び爆発音がした。

「ジェミニ・スパーク。歴史的建造物の前で、あんまりはしゃぐな」

「……え、誰？」

ジェミニ・スパークのホワイトは、呆気にとられたように言った。

「……こいつには、見覚えがあるだろ」

アシッド・エースが、オックス・ファイアを指差した。

「オックス・ファイア。……まさか、ゴン太!？」

「……その声、まさかツカサか!？」  
オックス・ファイアは叫んだ。

「久しぶりだね。ゴン太!!」  
ジェミニ・スパークWはオックス・ファイアの近寄った。

「お前も、元気にしてたみたいだな!!」

「ゴン太が元気なのは、あの像を見たらわかったけどね。ゴンター  
ガ様!!」

「おい、止めるよ……」

オックス・ファイアは、ぶっきらぼうに言った。

フツとジェミニ・スパークWは笑った。

「……ツカサ、さっさとしろよ!!」

ジェミニ・スパークBが苛々したように、言った。

「……あれがヒカルか。気性は荒いようだな。封印するんじゃないか  
ったのか？」

アシッド・エースが言った。

「ヒカルは、封印するんじゃない、和解決なんです。ヒカルも邪悪  
な面は出なくなってきてるし、その方が、スバル君の力にもなれる  
し」

「……スバル君の？」  
「……ハープ・ノートは言った。」

ジェミニ・スパークWが頷いた。

「……僕は、僕を救ってくれたスバル君を助けたいんだ」

スバルの人望の厚さを、ミソラは感じた。人のため、ブラザーのために、命を懸けたのだから、そうであってもおかしくはない。

「……ツカサ、続けないのか!？」

ジェミニ・スパークBは再び叫んだ。

「……待つてよ、ヒカル。……それで、何か用ですか？」

「ああ、スバルのため、地球のため、WAXAのサテラポリス遊撃隊の一員になってほしい」

アシッド・エースは、スバルの状況、キングの生存の話をした。

「……僕はいいけど」

「俺は嫌だぜ!!!」

ジェミニ・スパークBがこちらにようやく寄ってきた。

「……ヒカル、ストレス解消の一環だと思えないか？」

アシッド・エースは言った。

「……どういうことだ？」

「キングと戦うとなれば、強敵もたくさんいるだろうからな。ストレス解消にはもってこいだと思うぞ」

「……なるほどな、敵を苦しむほど、痛めつけるか。楽しそうだ」

「だろ？」

ジェミニ・スパークBは、三人を見た。

「……お前たちも、なかなか強いのか？」

「ん……まあな」

ジェミニ・スパークBは、気味悪く笑った。

「だったら、今、俺達と勝負しろよ。ストレス解消させる」

アシッド・エースは目を見張った。

「……わかった。まずは、俺が戦ってやるっ」

アシッド・エースは言った。

「……そうだね。特訓の成果、見せてやろう、ヒカル!!」

「おう。……どうせなら、それで俺達がWAXAに入るか賭けようぜ。俺達が負けたら入る」

「なら、勝ったら？」

ジェミニ・スパークBは考えるように、上を見た。

「……わかった。WAXAには入らず、ストレス解消のために、週

に一回はここに来い!」

「フ。面白いな。その賭け、のろっ!」

「あ、暁さん。もし、負けたら……」

ハーブ・ノートが耳打ちした。

「なんだ。ミソラは、俺が負けると思っているのか？」

「……少し」

アシッド・エースは苦笑した。

「任せる。もし俺が負けても、お前達には非はない」

「そうだけど……」

「ま、任せろって」

アシッド・エースは、一歩前に出た。

「いくぞ!」

「おう、来い!」

三人は構えた。

ウェーブバトル

ライド・オン!!

#### スカウト4 アシッド・スパークvsジェミニ・スパーク

先に仕掛けたのは、ジェミニ・スパークだった。

ジェミニ・スパークBが、アシッド・エースにエレキソードを携え襲いかかった。

「くらえっ!!」

「そうはいくか」

アシッド・エースも、それに対抗するため、左手をソードに変えた。ソード同士が、激しく火花を散らす。

「いけ、ツカサ!!」

ジェミニ・スパークBが叫んだ。

アシッド・エースの後ろに周り込んでいたジェミニ・スパークWは左手を突き出す。

「ロケットナックル!!」

その後、左手がロケットのように飛んできた。

「くっ!!」

アシッド・エースは、ジェミニ・スパークBのソードを弾くと、ジャンプした。

「逃がすかよ!!」

ジェミニ・スパークBもジャンプし、再びソードで斬りつけようとした。

アシッド・エースはソードで再び対抗した。

「……なるほどな、コンビネーションはさすがなもんだ」

「へっ、余裕ぶっこいてられんのかよ」

ジェミニ・スパークBは、ソードではないほうの手、右手をアシッド・エースの腹に当てた。

「ロケットナックル!!!」

ジェミニ・スパークBの右手が発射された。

アシッド・エースは、零距离からの攻撃をかわすことはできず、吹き飛ばされた。

「やるな!!!」

アシッド・エースは、着地すると、素早く体勢を整えた。

「エレキソード!!!」

ジェミニ・スパークWが待っていたと言わんばかりに、アシッド・エースの背中を狙う。

「バトルカード、インビジブル!!!」

アシッド・エースが、半透明になった。

ジェミニ・スパークWの攻撃は、空を切った。

「ステルスレーザー!!!」

アシッド・エースは振り向きざまに、レーザーを三発放った。

ジェミニ・スパークWはかわせない。

「ツカサー!!」

ジエミニ・スパークBが、アシッド・エースを後ろかなエレキソードで斬りつけた。

しかし、インビジブルの状態のため、またも空を切る。

アシッド・エースは、それを尻目にジャンプした。

「ワイドウエーブ!!」

アシッド・エースは、ジエミニ・スパーク二体に命中するように、水の衝撃波を放った。

「うわっ!!」

ジエミニ・スパークWの叫び声はしたが、ワイドウエーブの影響で発生した砂煙で、二体の状態は確認できない。

『シドウ、これであの二人がやられたとは考えにくいでしょう』

アシッドが、ハンターVGから言った。

「ああ、わかってるよ」

『この砂煙……利用しない手は、向こうにはありません』

「……なるほどな。つまり、俺達はそこを逆に狙えばいい」

アシッド・エースは、背中と肩にある噴射口を開いた。

砂煙が晴れていく。

人影が二つ、手を繋いでいるようにくっついていった。

『アシッド・エースの居場所が確認できたら、撃つでしょうね』



アシッド・エースは着地した。

「いけるか？」

『ええ』

砂煙が完全に晴れた。

「「ジエミニサンダー!!」」

重ねた拳から、極太レーザーのような、電気がアシッド・エースに向かって放たれた。

「バトルカード、カワリミ!!」

アシッド・エースが、ポンと煙にかわった。

「しまった、どこだ!!」

ジエミニ・スパークWが、周りを見渡す。

「ここだよ」

ジエミニ・スパーク二体は、後ろを振り返った。

二人が、手を繋ぎ、そばにいる状態なら、この一撃で二体とも倒せる。

アシッド・エースはそう考えた。

「ウイングブレード!!」

背中と肩の噴射口から、強烈なバーナーが吹き出し、アシッド・エースを加速させていった。

それは、作戦通り、ジェミニ・スパーク二体共に命中した。

## スカウト5

「……くそっ」

ジェミニ・スパークBは地面を殴った。余程、悔しかったのだろう。

「俺の勝ちだな」

アシッド・エースは誇らしげに言った。

「……ヒカル、潔く、WAXAに入ろう。ここでの僕との戦いも、飽きただろ？」

「……それもそうだな。賭けにも負けたし……仕方ねえか」

「……決まりだな」

「よろしくな、ツカサー!!」

オックス・ファイアが、ジェミニ・スパークWに寄った。

「よろしく、ツカサ君、ヒカル君」

ハープ・ノートも続く。

「うん、よろしく!!」

ジェミニ・スパークWは笑顔で返した。

「お、おう……」

ジェミニ・スパークBは、ぎこちなく返した。

「……よし、一度WAXAに戻ろう」

アシッド・エースは言った。

それに、全員が頷いた。

## スカウト6

「……その子がツカサちゃん？」

「ええ、さっそく手合わせしましたけど、なかなかの手練れでしたよ」

ミソラ達は、WAXAの司令室に戻ってきていた。忙しい中、ヨイリーが出迎えてくれた。

「……よろしくお願ひします」  
ツカサは緊張しているようだった。

「……それで、あいつらの居場所は特定できましたか？」  
シドウがヨイリーに訊いた。

「いいえ、彼らはトランスコードを持ってないし、探すのはなかなか困難なの。まだ、見つかってないわ」

「そうですか」  
シドウは俯いた。

ミソラは、シドウのこんな顔は珍しいと思った。  
シドウは齒を食いしぼり、悔しそうな顔だった。

「……よし、当分は自宅待機だ」シドウが言った。

「……おい、ツカサ。お前、またナンスカに行くのか？」

「うん。サテラポリス遊撃隊の一員になった以上、なるべく日本国内にいるつもりだよ。だから、多分コダマ小学校に戻る、かな」

「本当か!？」

ゴン太は嬉しそうに、声をあげた。

「うん」

ツカサは笑顔で頷いた。

「……それじゃ、私はスバル君に会いに行こうかな!」  
ミソラは言った。

「あつ、僕も行こうかな、スバル君とは最近会ってなかったし」  
ツカサが言った。

「待て、ツカサは残ってくれ。お前には、これからちょっとしたメデイカルチェックをしてもらわなければいけないんだ」  
シドウが言った。

「ええ……そつか、仕方ないですね」  
ツカサは言った。

「……それじゃ、私は行くね!」  
ミソラは司令室を出て行った。

「……それじゃ、暁さん。メデイカルチェックのほうを」

「あ、悪いな。あれ、嘘」  
シドウは言った。

「え……」

「出来ることなら、スバルとミソラを二人きりにしてやりたくてな」

「あ……」

ツカサは気づいたようだった。

「それにしても、ゴン太が行くと言い出さなかったことには驚いたよ……」

シドウはゴン太のほうを向いた。

ゴン太は必死にハンターV.Gを操作していた。

「……い、い、ん、ち、よ、う、へ……ツ、カ、サ、が、コ、ダ、

マ……」

「……何やってるんだ？」

シドウはゴン太を指差し、ツカサを見た。

「……メールを打ってるんじゃないでしょうか」

「……なるほどな」

## スバル

「……外が見れるって……これ？」  
スバルはつぶやいた。あまりにもすることがなかった数時間。ようやく外の景色を見てみようと考えたのだが、隣の部屋に行ってみると、まず目に入ったのは窓だった。外は暗く、夜のように感じた。

「……時間はまだ昼なのに」  
スバルはハンターV Gで時間を確認していた。  
スバルは窓に近づき、下を覗いた。

「……青い。もしかして、地球？」  
地球とおぼしき物体は、広大に、青々しく丸かった。

ウォーロックがウィザードオンした。

『ここは、コスモウエーブからしか来れないからな』  
「なんで!？」

『強力なノイズのせいで、地下にもお前はいれないんだろ。空が一番手っ取り早かったんだろうぜ』

「……ま、星が近くで見れる分、まじかな。人も見たいけど……」  
『それなら、これを使えよ。超高性能電波望遠鏡。ここからでも、下の人間ぐらい実寸大で見えるだろうぜ』

「……それはいいすぎだけどね」



『……それに、人間なら来たみたいだぜ。……良かったな』  
ウォーロックは何かを感じとったらしい。  
良かったな、と言っておきながら、なぜだか少し嫌そうだった。

「スバル君!!」

隣の部屋に声が響いた。

床を走る音がした後、ドアが開いた。  
ウォーロックはウィザードオフした。

「ミソラちゃん!!」

「仕事、終わったから来たの!!」

ミソラは満面の笑みで言う。

「本当にさっそくだね。まだ、さっき来た時から、あんまり時間経  
つてない……」

「あれ、スバル君は私が出るの、嫌だったかな？」

「そんなわけないよ」

スバルは焦りながら、顔の前で両手を振る。

「ふふつ、そっか。なら、いいよ!!」

それから少し、他愛のない談笑が続いた。

「……こじ、高いね」

スバルは窓から下を見下ろしながら、言った。

「うん。ここまで、スバル君を運んだのは、私なんだからね」

「あ、そうだったんだ。ありがとう!!」

「どういたしまして」

スバルは再び、外を見た。

「……あれ、昴星だよな」

「スバル……星？」

ミソラは可哀想な視線でスバルを見た。

「……スバル君が見つけたてい？」

「……プレアデス星団の和名だよ」

「……良かった。スバル君が孤独な空間に、我を見失ったんじゃないかと」

「いやいや、まだ大丈夫だよ」

スバルは顔をひきつらせた。

「……スバル君は、本当に星が好きだね」

「え……うん。最初は、父さんの影響だったけど……良くも悪くも良くも悪くも。良きは、父が宇宙に行つて湧いた感心。悪きは、宇宙で遭難した父が見つかるかもしれないという子供ながらの浅はかな考え。」

「……良かったね。お父さんが帰ってきて」

「……………うん」

手放しには喜べなかった。

ミソラは母がいない。その苦しみは、マイナスな感情で引き寄せられるFM星人、ハーブを寄せるほど、大きなものだった。

スバルにもその苦しみはわかった。大吾がいなかったから。しかし、今はいる。今では、幸せな家族水入らずの環境なのだ。

それに比べ、ミソラは……………。

「……………私ね。スバル君がメテオGから帰ってこれないかもしれないかもしれない。なった時、少し諦めてたの。ロックマンは何度も生きて帰ってきたけど……………今度は宇宙だもん。広すぎるよ」

「……………でも、僕は絆の力で……………レゾンウェーブのおかげで帰ってこれた」

ミソラは頷いた。

「みんなが諦めてなかったから、すぐに私も諦めちゃダメだと思えたの」「みんなそうだよ。だったら、僕は、父さんやロックともう二度と会えないと思ってた。でも、実際には会えた。二人が諦めてなかったから」

「……………私は諦めてちゃいけないかったと思うの。一時でも。少しでも」

「……………僕達は絆で繋がってるんだよ」

「……………え？」

「僕達は絆で繋がってるんだよ。だから、誰よりも不安に思うし、誰よりも喜べたりするんだ。大切だから、絶望は誰よりも感じるん

だ。少しの希望でも、誰よりも強く信じられるんだ。ミソラちゃん  
はただ諦めたんじゃないよ。それを糧に、より強く、誰よりも僕を  
信じてくれたんだ」

「……スバル君」

「何？」

「ありがとう」

宇宙は広く、かつ暗い。一人では孤独で、絶望を抱くに違いない。  
しかし、絆の力があれば、その絶望も抱かない。  
会いたい。そう願えば、再び会える。

宇宙の中の、銀河の中の惑星、地球に生けるちっぽけな人間。

昴星よりも、何万倍と小さく、かつ弱い。

しかし、絆の力があれば、それは昴星よりも何万倍と大きく、かつ  
強い。

ちっぽけな人間のちっぽけな絆が、昴星をも超す大きな力になっ  
たりする。

彼らは、そんな神秘的なパワーを胸に秘めている。

## 凶敵

「……集まったな」

シドウは言った。

彼の眼前には、ミソラやゴン太、ツカサがいた。

「今日もスカウトしに行くぞ。ターゲットは、ソロだ」

ミソラは背中がゾクツとした。

ロックマン以外に、彼に太刀打ちできる相手はいるのだろうか。

「……さっそく、行く……」

シドウの前に紫色の閃光が走った。

「……おいおい」

シドウはつぶやいた。

「……暇だね」

『かれこれ、隔離されてから3日目だからな』

時間だけを見たら、まだ経ってないように思えたが、体感するとかなり経っているように感じたのが事実だった。

「……寝ようかな」

スバルは目をつぶろうとした時、目の前に紫色の閃光が走った。

スバルは唾然とした表情で、口を半開きにし、目を丸くした。閃光が晴れると、ブライがスバルを見下ろす。

「……ソロ。どうしたの!？」

ブライは剣と化したラプラスをスバルに突きつけた。

「電波変換しろ!！」  
ブライは言った。

「……今はダメだ。僕の体には、メテオGのノイズがあつて……それが影響して、電波変換できない」

「周りの電波を壊すからな。だが、ここは宇宙だ。壊れるものはない」

「……でも、この部屋には特殊なジャミングが  
言いかけて、スバルは気付いた。

なぜ、ブライは電波体なのに、この空間で平然といられるのだ。

『……なんだ。ジャミングが……ないのか?』

異変を察知し、ウォーロックもウィザードオンして出てきていた。

「……さつさと電波変換しろ」  
ブライは言った。

「……でも」  
WAXAとの約束がある。

「……あまちゃんだな。なら、電波変換せず、ここで死ぬのをお前

は選ぶのか？」

ブライがラプラスをスバルの鼻先まで寄せた。

「……言っておくが、お前のそれは絆ではない。ただの無駄死にだ」

「何！？」

「約束を守り抜くのが、絆と言うなら、死ねと言われたら死ぬのと同じだ。自分のためにも、相手のためにも、時には約束を破るのが絆だ」

スバルは返事ができなかった。

「……男と男の勝負だ。余計な私情は挟むな！！」

スバルの脳裏に、FM星のコスモウェーブでの会話が蘇った。

「……これは、ムーメタルをかけた戦い……か」

ブライが頷いた。

「そろそろ紋章が浮かぶ。ぐだぐだはできない」

「……わかったよ。あの時、君を邪魔したのは、僕だ。ずっと迷ってた。あれが正しかったのか」

「本当にあまちゃんだな」

「……あの時は、あれが正しかった。でも、今、君と戦わないのは正しくないよね」

スバルは立ち上がった。

トランスコード  
シューティング・スター・ロッキーマン!!



## 激戦

ウェーブバトル!!  
ライド・オン!!!

「バトルカード、キャノン!!!」  
ロククマンは左手をキャノンに代えると、すぐに放った。  
しかし、ブライの前に発生した電波障壁が、ブライを守った。

「……やっぱりすごいな」  
ロククマンはつぶやいた。

「バトルカード、マッドバルカン!!!」

連続で弾丸がブライを襲った。

「これなら、電波障壁だって……」

しかし、電波障壁は平然とブライを守り続けた。

「これなら……。バトルカード、ブレイクサーベル!!!」  
ロククマンは左手をサーベルに代えると、ブライに突っ込む。  
サーベルを振り下ろすと、ブライを電波障壁が守る。

「……ブレイクソードでも突き破れない!?!」

「……お前が成長しているように、俺も成長はしている。……今度  
はこっちの番だ」  
ブライがラプラスを真上に投げた。

「ラプラス!!」

剣と化したラプラスが、一直線にロックマン目掛けて急落下した。

「くっ。バトルカード、バリア」

ロックマンの上にバリアが発生し、ラプラスを食い止めた。

「無駄だ……」

ラプラスが、バリアを突き破った。

「くっ」

ロックマンは後ろに飛び跳ね、攻撃をかわした。

ブライが再びラプラスを掴む。

「……いくぞ!!」

ロックマンが瞬きした瞬間、ブライは先程の位置から消えていた。

ロックマンが次にブライを目視したのは、すでにブライが目の前に現れた時だった。

「バトルカード」

バトルカードのインストールより先に、ブライがロックマンを斬りつけた。

「ぐわっ!!」

ロックマンはかわせなかった。

バランスを崩しそうになるが、後ずさりながら、体勢を立て直した。

「……くそ。強い!!」

「ブラザーアクセスしろ。ロックマン」

「……何!？」

なぜそれを知っている、とロックマンは言いかけた。

「……早くしろ。俺は気が長くない」

しろと言われれば、それがブライの作戦ではないか、とロックマンは疑った。

「……スバル、それしかねーぞ。とてもじゃねーが、このままだと電波障壁は破れない」

「……そうだね。それしかない!!」

たとえブライに作戦があろうと、それを打ち破れる力がブラザーアクセスにはある。それは、今までの戦いでも実証済みだ。シドウの記憶を取り戻せたように。

「……ノイズ率をあげなきゃ」

「……こいつらを倒すんだな」

ブライがそう言うと、ロックマンを囲むように数体のウイルスが現れた。

「……用意していたのか」

ますます怪しいではないか。しかし、引く訳にはいかなかった。

「いくぞ!!」

ロックマンはバトルカードをインストールした。

「ソードファイター!!」

ロックマンはウイルスを数度斬りつけた。  
別のウイルスが、つるはしを掲げた。

「バトルカード、キャノン!!」

ロックマンはそのウイルスを破壊した。

「よし、今ので大分ノイズ率が上がったな」

そして、ブライが出したウイルスを全滅させた瞬間、ノイズ率20%を超えた!!

「ブラザーアクセス!!」

ハンターV.Gが鳴った。

『ブラザーバンド、響ミソラ。キズナリヨク100。ブラザーアクセス』

ロックマンの周りを閃光が走った。

## ムーメタル

「ロックマン、ハーブメテオ!!」  
ロックマンはピンクの装甲、水色のギターを手に、閃光をかききつた。

ブライがフツと笑った。

「……………ぐっ」

ロックマンは胸を押さえ、ひざまずいた。

「なんだ……………」

ブライがゆっくりとロックマンに近づいた。

「……………今も、お前の中のメテオGのノイズは増大している。なぜだか、わかるか？」

「……………何」

「ムーメタルが、メテオGのノイズを破壊し、そのノイズがクリムゾンになり、ノイズになり……………それを繰り返しているからだ」

ロックマンは更に苦しそうに胸を押さえた。

「ムーメタルがある状態で、異物のメテオGを出現させる……………それはお前の命を蝕み、紋章の発生を早まらせた」

ロックマンは胸に当てた手をどけた。

ムーの紋章が浮かび上がっていた。

「……………これが」

「……………ブラザーアクセスを発動した状態だ。死にはしないだろう」  
ブライが右手を振りかぶった。

「そして、もうこれ以上のメテオGのノイズの増幅はなくなる。今  
のお前のキズナリヨクなら、抑え込める」  
ブライが右手に徐々に力を込めるのがわかった。

「……………ブライ」

「ムーメタル。もらいうける!!」

ブライはムーの紋章が発生しているロックマンの胸の部分に、腕ごと突っ込んだ。

「ぐっ!!」

ロックマンは、意識を失った。

## ムーメタル（後書き）

作者的には、このブライとの戦いはまったく納得できませんでした。勝手にノイズが増幅しているなどと、ブライが口走ったので。

なぜ書いたか、実に理解がしがたいです

すみませんm（――）m

## 寝起き

「……うん」

スバルはゆっくりと目を開いた。

「あ、起きた？」

スバルの視界に、ミソラの顔がズームして入る。

スバルは驚いた顔で体を横にずらし、上半身を浮かせた。先程の位置だと、ミソラの顔に当たるからだ。

「……びっくりしたな」

「フフ。そっか」

スバルは顔を横に振った。なぜ寝たのか、記憶がない。その時、走馬灯のように記憶が蘇った。

「ソロは!?!」

ミソラは顔をひきつらせた。あからさまに、言いにくそうだった。

「……ソロなら、帰っていったよ」

その時、ウォーロックがウィザードオンをした。

『……おい、ミソラ。ジャミングを解いたのは、誰だ』



ミソラの体がピクツと揺れた。

『ソロじゃねえだろ。と言うかまず、ソロはスバルの居場所をどうやって知った!?!』

「……………ロック、どういうこと?」

『この前から、少しおかしいと思ってたんだ。スバルの前だと、曉との電話も小声。今回のジャミングが解かれていたのも、ソロが乗り込んできたのも。それに、ソロの話で気になったことがあった。メテオGのノイズが増幅しているってことだ。……………お前達、俺達に何かを隠してねえか?』

『ミソラ、いいんじゃない?』

ハープも、ウイザードオンしてきた。

『やっぱり、スバル君は地球のヒーローなんだから……………彼も今の状況を知りたいのは当然でしょ?』

「……………でも」

『わかるわよ、ミソラ。スバル君がそうしたように、あなたもスバル君を巻き込みたくないんでしょ?』  
ハープがミソラを宥める。

スバルは、わけがわからなしいたげに、顔をしかめていた。

「ミソラちゃんは何を黙ってるの!?!」

スバルに言われ、ミソラは浮かない表情をした。

「……スバル君は、今、WAXAの戦力にはなれない。変に焦らせるなら、黙っていたほうがいいと思ったの」

「……何を？」

「まずは、ソロの話をするね。なぜ、彼がスバル君の居場所を突き止められたか」

スバルは黙ってミソラの話聞くことにした。

「ソロは、スバル君に戦いを挑む少し前、WAXAに乗り込んできたわ。私たちが、ちょうど彼をスカウトしようとした瞬間だった。その時、ソロは話を始めたの。君の体のメテオGのノイズは、増幅し続けているって」

「……ムーメタル」

ミソラは頷いた。

「ムーメタルは、ソロにとって大切な物。だから、スバル君の居場所を言えって言ったの。スバル君は殺さないし、ムーメタルだけが目当てって言うってた」

「……ソロなら時期を伺って、ゆっくり狙ってもおかしくないのに」

『……つまり、急がなければならぬ理由があった』

ミソラはうつむいた。

「キングは生きてみたいなの。暁さんが言うってた」

スバルは目を丸くした。

「……………そんな」

『おいおい、なんでそんな大切なこと、今まで黙ってたんだ!』

『あなたは隔離されてたからよ。焦ってほうが、良い結果はでないでしょ?』

『……………くそっ!』

「……………それに、私はスバル君を守りたかった。傷ついてほしくなかった」

『おい、ミソラ。スバルは友達が傷ついたほうが、傷つくぜ』

「わかってる。……………だから、私がスバル君の代わりを……………ロッキマの代わりにするつもりだった。心強い仲間も、増えた」

「心強い仲間?」

「ツカサ君だよ」

『ジエミニのヤロウか!』

「……………ソロは?」

ミソラは顔を振った。

「……………どこかに行っちゃったの」

「……そっか」

ミソラのハンターV Gが鳴った。  
電話のようだ。

『……ミソラか。すぐに戻ってくれ』  
相手はシドウだった。

「はい。わかりました」

電話はそれで終わった。  
数秒後、ミソラがスバルを見た。

「……行くね」

「ミソラちゃん」

「……何？」

「僕に分まで、頑張ってね」

「うん」

ミソラは部屋を出て行った。

「……ロック」

スバルはミソラがいなくなると、言った。

『なんだ？』

「……僕や父さんがあんなに命がけで頑張ったのに、キングは生きてたんだね」

『まあ、仕方ねーよ』

「……今、僕達は何もできない。キングの攻撃は、前みたいに地球のみんなを恐怖にさらすかもしれない」

『スバル、今はミソラ達を信じるしかねーよ』

「……そうだね」

スバルは握り拳に力を込めた。自分に何かをする力はある。しかし、何もできない。

無力感とは違った感覚は、言いようがなく、抗うすべもわからなかった。

寝起き（後書き）

なんとか言いくるめられたと信じてます

## 敵襲

ハーブ・ノートは、コスモウェーブから降りた。  
ドカんと、爆発音がした。

「……………何!?!」

『ミソラ、あれ』

ハーブがウイザードオンすると、WAXA基地のほうを指差した。

WAXA基地に、攻撃をする電波体達が目に入った。

「……………嘘。こんなに急に!?!」

ハーブ・ノートは、すぐに電波体達がキングの下部達と察知した。  
ハンターV.Gが鳴った。

電話のようだ。

ミソラはエアディスプレイを出した。

『今、どこだ。ミソラ』

アシッド・エースが画面に映った。

「もうWAXAkの目の前です」

ハーブ・ノートは移動しながら、電話を続行した。

「キングですか!?!」

『多分な。あいつめ、ムーの残留電波に、メテオGのノイズを与えたんだ』

「ムー?」

雪男のような電波体、コンドルのような電波体、そして、首長竜のような電波体が中心になり、WAXAを攻撃していた。しかし、どの電波体も一体というわけではない。数体いる。

「全部見たことある」

『……すでに、ツカサやゴン太も戦闘に出てる。お前も、すぐに始めてくれ』

「わかりました」

ハープ・ノートは頷いた。

エアディスプレイを消すと、ウェーブロードから飛び降りた。

「いくよ、ハープ」

ハープ・ノートは、水色のギターを構えた。

「ショックノート!!」

巨大な音符が、コンドルの電波体に命中した。

「……貴様、何をする」

コンドルの電波体は、ハープ・ノートのほうを向いた。

「WAXAに攻撃するのは止めなさい。それ以上やったら、ただじやおかない!!」

「……上から目線だな。われより下にいるのに」

「あなたが飛べるから、高い位置にいるだけ」



「高い位置にいる。すなわち、われのほうが強い!!」  
コンドルの電波体が突っ込んできた。

水色のギターで、ハーブ・ノートは受け止めた。

『ミ、ミソラ。痛いわよ!!』

「お願い、我慢して。ハーブ!!」

両手でギターを支えるが、だんだん押されていく。  
ハーブ・ノートは、ギターの裏側から弦をひく。

「ショックノート!!」

巨大な音符が、コンドルの電波体に激突した。  
その爆風で、ハーブ・ノートも尻餅をついた。

「……お前、やるな。われの名は、コンドル・ジオグラフ。……覚えておくがいい。まあ、すぐに死ぬことになるがな!!」  
コンドル・ジオグラフが、先程よりも早いスピードで突っ込んだ。  
た。

『も、もう私で受け止めないでよ!?!』

「うっ」

確信をつかれ、ハーブ・ノートは思わずギターをしっかりと持ち直した。

コンドル・ジオグラフは、ハーブ・ノートに突進するのではなく、

急上昇した。

「……どこまで行ったの？」

ハープ・ノートが上を見上げても、コンドル・ジオグラフは見えない。

ハープ・ノートは目を細め、空を見た。

「……あれ、なんだろ」

ハープ・ノートは指差した。

遠くてよく見えないが、何かが数個落ちてきているようだった。

「ハープ、あれ、何かな」

『……ミソラ、あれって』

ハープは、声を荒げた。

『爆弾よー!!』

時すでに遅し。ハープ・ノートの周りは、爆発のせいで起きた砂煙で何も見えない。

コンドル・ジオグラフは、笑いながら降りてきた。

「馬鹿め。爆弾も見抜けないとは」

砂煙が晴れると、ハープ・ノートは痛みをこらえながらも意識は保っていた。

「何……?」

「ショックノートを地面にぶつけて……爆風を吹き飛ばした」

「……なるほどな」  
コンドル・ジオグラフが、後方に下がった。

「これでどうだ。……フライング・インパクト!!」  
コンドル・ジオグラフが突進を図る。

「マシンガンストリング!!」  
水色のギターから伸びた弦が、コンドル・ジオグラフに巻きついた。  
ハープ・ノートは、精一杯の力でコンドル・ジオグラフを投げ飛ばした。

「何!？」

「……ショックノート!!」

巨大な音符がコンドル・ジオグラフに激突した。  
うおお、とコンドル・ジオグラフが悲鳴をあげた。  
その叫び声が消えると、コンドル・ジオグラフは消えていた。

敵襲（後書き）

急な展開ばかりで

ごめんなさい m ( ) m

## 牛対雪男

「プロオオオオオ!!」

オックス・ファイアは、雪男の電波体の腹を殴った。

「オラアアア!!」

雪男の電波体が、やり返しと言わんばかりにオックス・ファイアを殴った。

「……このヤロウ!!」

オックス・ファイアは、雪男に突進した。

雪男の電波体は一步後ずさった。

「……なめんなあ!!」

雪男の電波体は、オックス・ファイアの頭を掴むと、頭突きをした。オックス・ファイアは、頭がクラクラし、足がおぼつかない。

「……この……」

「ショックノート!!」

巨大な音符が、雪男の電波体を倒した。

オックス・ファイアは、目を丸くし、黙り込んだ。

「大丈夫、ゴン太君!？」

「……大丈夫だけだよ。俺はあいつと男同士の男の戦いを……」

「あの電波体一体にかまってる暇はないよ。まだ、たくさん相手は

いるんだから!!」

ハープ・ノートは、WAXA基地のほうを指差した。

「……あいつは!!」

オックス・ファイアの視界に、さっきの雪男の電波体が目に入った。

「ブロオオオオ!!」

オックス・ファイアは、素早く走っていった。

「オックスタツクル!!」

オックス・ファイアは、雪男の電波体に突進した。

「テメエ!!」

雪男の電波体が、オックス・ファイアを殴った。

「このヤロウ!!」

オックス・ファイアは、雪男の電波体を殴った。

「やったな!!」

雪男の電波体は、オックス・ファイアにリアットをくらわせた。

「ブロオオオオ!!」

オックス・ファイアは、エルボーを決めた。

「……お前、やるな!!」

雪男の電波体が、フツと笑った。

「お前もな!!」

「……俺の名は、イエティ・ブリザードだ。覚えておきな!!」

イエティ・ブリザードは、何度も両胸を叩く。

「ナダレダイコー!!」

イエティ・ブリザードの後ろから、巨大な雪崩が押し寄せた。

雪崩は、オックス・ファイアだけでなく、戦闘中のウィザードや、ムーの電波体まで飲み込んだ。

「オ、オックス。ヤバくねえか」

『雪崩がでかすぎる。かわせねーぞ』

「おい、どうするんだ!!」

『ブロオオオ!!』

そんな間にも、雪崩がオックス・ファイアに迫る。

「……スバル。委員長」

オックス・ファイアはつぶやき、俯いた。

スバルなら、ロックマンなら、この状況も脱する手だてを思いつくはずだった。

ルナだって、心強く何かをしてくれるだろう。

『ゴン太、スバルや委員長を頼るな。このままじゃ、一生お前は半端もんだ!!』

オックスに言われ、オックス・ファイアは顔をあげた。

「……そうだ。俺は立派な戦士なんだ。スバルや委員長を頼らなくたって……俺は乗り越えられるんだ!!」

オックス・ファイアの肘の部分につく、射出口から炎が飛び出した。

「オックスフレイム!!!」

オックス・ファイアの口から、強力な炎が飛び出した。

『プロオオオ。範囲が広すぎる!!!』

オックスの言うとおり、雪崩はオックス・ファイアが発する炎の何倍もワイドに流れる。

「諦めるか……。スバルみたいに、俺だつて!!!」

オックス・ファイアが発する炎が強まった。

「……プロオオオオオオ!!!」

一瞬の閃光の後、雪崩は後片もなく消えていた。

「……へっ」

「……くそ。ナダレダイコは……力を使いすぎる……んだ」

「とどめだ。オックスタックル!!!」

オックス・ファイアは、イエティ・ブリザードに突進した。

「ぐあああああ!!!」



## 抵抗（前書き）

今更ながら、タイトル適当です

## 抵抗

「敵勢力拡大、このままでは、第一ゲート突破されます!!」  
WAXAの中を、職員やサテラポリスが走り回っていた。

「ワイザード戦力、80%損害。すでに、ムーの電波体にやられて  
いるワイザードばかりです!!」

「絶対に中にいれさせるな。メインコンピューターを破壊されたら、  
ここは終わりだ!!」  
長官が叫んだ。

「……ヨイリー博士、ノイズキャンセラーを改造して、ムーの電波  
体を一掃できませんか？」  
男の団員が、ヨイリーに近寄った。

「無理よ。ムーの電波体の周波数は、多種多様。多分、キングが対  
策してきたんでしょうね」

「……くそ、ロックマンがいれば!!」  
団員は、悔しそうに歯を食いしばった。

ヨイリーが足を止めた。

「……ヨイリー博士？」

「……こんな状況でも、大吾ちゃん達、特別科学班はロックマンの  
メテオGノイズ対策PGMの開発をやめてないわ」  
特別科学班。

大吾をリーダーとし、日本WAXAの超エリートばかりを選びすぎた、ロックマンの中に存在するメテオGノイズを除去、もしくは永久コントロールできるPGMを開発する班。天地も、その班の一員だ。

「……奇跡は起きるものじゃない。起こすものなの」

団員が口を半開きにして黙る。

「……あら、奇跡を起こす気はないの？」

「……いえ」

団員は何度も首を振った。

「……そうですね。奇跡を起こしましょう!!」

ヨイリーがニッコリと笑った。

「シドウちゃんや、ミソラちゃん達も頑張ってるわ。一分一秒でも耐えましょう!!」

「はい!!」

団員は決意の表情を見せた。

ヨイリーはモニタールームに移動した。  
くまなく、画面を見た。

「……みんな頑張ってる」

ヨイリーはつぶやいた。

彼らが諦めていない限り、自分は諦めてはいけない。  
できることは必ずある。

奇跡を起こす。

ヨイリーは食い入るように画面を見た。

## 希望

「天地、戦況は!？」

「ウィザード戦力の80%が削られたようです。ミソラ君達も、すでにだいた敵と戦ったようです」

「そうか」

大吾は、コンピューターを操作した。

ここは、WAXA92階。特別科学班のコンピュータールームがある。

「やはり、ロックマンがいないのは痛手だな」

特別科学班の一員が言った。

「そうね。ハープ・ノートや、オックス・ファイアだと、力不足は否めないものね」

さらに、別のメンバーが言った。

「……お前らは、この戦い、勝てると思ってるか？」

大吾は言った。視線はコンピューターに向いている。

二人がだまりこんだ。

「……俺は知つての通り、宇宙を漂流していた……。だが、助かった。希望を忘れなかったからと、俺は常々思ってる。希望を忘れなかったから、メテオGをギリギリまでくい止められた。希望を忘れなかったから、スバルや……。アカネと再び会えた」

大吾は視線を二人に向けた。

「希望を忘れるな。そして、その希望を忘れないため、ロックマンの力になるぞ」

「……そうですね。弱気になっちゃいけない!!」  
団員は、コンピューターと向かいあった。

「……私、ロックマンのノイズ耐性を強化するPGMを作ってみます!!」

もう一人の団員も、仕事に戻る。

「……大吾先輩、未確認物体から交信があります!!」  
天地が叫んだ。

「何、まさかキンググからか!?!」

大吾はコンピューターを操作し、回線を繋げた。

「いえ……これは宇宙の彼方からです。地球からかなり距離があります!!」

「……これは」

画面に表示された周波数を見て、大吾は手を止めた。

ザザザと、ノイズが聞こえる。

回線が繋がった。

## 奇襲

「エレキソード!!」

ジェミニ・スパークWは、首長竜の電波体を斬りつけた。  
首長竜の電波体は消滅した。

「……なかなか減らないな」

ジェミニ・スパークWは、ため息をついた。  
首長竜の電波体と、ジェミニ・スパークは、相性がいいのか、倒すのはたやすかった。  
しかし、なかなか終わりは見えない。  
BとWは、別々に相手をしているのだが、それでも数が減ったようには感じなかった。

「何、悠長に構えてる、ツカサ。来るぞ!!」

ジェミニ・スパークBが叫んだ。

ジェミニ・スパークWは、噛みつきこうとしていた首長竜の電波体の頭に飛び乗った。

「くらえ!!」

ジェミニ・スパークWは、首長竜の電波体の頭に、エレキソードを突き刺した。

そして、首長竜の電波体は消滅した。

「ツカサ、こいつ、ブラキオ・ウェーブつつうらしいぜ」

ジェミニ・スパークBが叫んだ。

正直、名前などどうでもよかった。

ジェミニ・スパークWは周りを見回した。

ハーブ・ノートも、オックス・ファイアも、ジェミニ・スパークBも必死に戦っている。

「…………あれ？」

ジェミニ・スパークWは、もつとくまなく周りを見回した。

「…………ヒカル、おかしい!!」

ジェミニ・スパークWは叫んだ。

「何がだ!!」

ジェミニ・スパークBは、戦闘中ながらも、声をはった。

「いないんだ!!」

「誰がだ!？」

戦闘に余裕が出来たのか、ジェミニ・スパークBが振り向こうとした刹那、ジェミニ・スパークBは倒れた。

「ヒカル!？」

ジェミニ・スパークWは、何があったかはわからなかったが、ジェミニ・スパークBが倒れたのはわかった。

急いで、駆け寄ろうとした。

「…………その程度か」

ジェミニ・スパークWの後ろから、囁くような声だった。

ジェミニ・スパークWが振り向こうとした瞬間、彼は意識を失い、電波変換は解けた。

「…………ハンターを借りるぞ」



ツカサのハンターV.Gは奪われた。

「オックススタックル!!!」

オックス・ファイアは、イエティ・ブリザードに突進した。  
イエティ・ブリザードは、消滅した。

「……数、減らねーな」

オックス・ファイアは、息が荒かった。

『こらえる。今が正念場だ!!!』

オックスが叫んだ。

「よし!!!」

オックス・ファイアは、息を吸い込んだ。

「オックスフレ……」

頭が揺れるような感覚だった。

そのまま、オックス・ファイアは意識を失い、電波変換は解けた。

『テメエ、何するんだ!!!』

オックスが叫ぶ。

相手は無言で、ゴン太のハンターV.Gを奪った。

「ショックノート!!!」

巨大な音符が、敵をなぎ倒す。  
しかし、数は一向に減らない。

『……ミソラ、みんなの電波を感じないわ!!』  
ハープが叫ぶ。

「ど、どういうこと?」

『ほんの一瞬だった。……危ない、ミソラ!!』

ハープが叫ぶも、時すでに遅し。

ハープ・ノートは、背中越しにまがまがしい殺気を感じた。  
そして、次に感じたのは、不快感。まるで、頭の中でのみ、地震が  
起きているようだった。

薄れゆく意識の中、ハープ・ノートは後ろを振り返った。

「……え?」

ハープ・ノートの電波変換は解けた。  
そして、ミソラは意識を失った。

『……どういうことよ』

ハープは今にも消えそうな声で言った。

「見てわからないか?」  
冷徹に言い返された。

『……味方じゃなかったの!?!』

「ああ、違った。俺は敵だったんだよ」

『……ふざけないでよ』

ミソラのハンターV Gも、奪われた。

## 裏切り

「……なんか、胸がモヤモヤする」

スバルはベッドに寝転びながら、胸を押さえた。

『……俺も、嫌な予感がするぜ』

その時、部屋の中心に閃光が走った。

「なんだ!?!」

スバルは上半身を起こした。

「……よう、スバル」

アシッド・エースが、右手をあげた。

「曉さん!?!」

スバルはベッドから降り、シドウに近寄った。

『スバル君、来ちゃダメよ!?!』

ここもった声が響いた。

「え……今の声、ハーブ?」

スバルは足を止めた。

アシッド・エースは黙ったままだった。

『スバル、絶対こいつに近寄るな!?!』

再び、ここもった声がした。

「今度はオックス?」

気味悪くなり、スバルは周りを見回した。  
しかし、すでに声の  
聞こえた場所はわかっていた。

「……暁…さん？」

スバルはアシッド・エースを見た。  
刹那、アシッド・エースが消える。  
その時、スバルは胸に激痛を感じ、吹き飛ばされた。

「……ぐっ」

スバルは胸を押さえ、うずくまる。

『暁、テメエ、何をするんだ!!』

ウォーロックがウィザードオンをした。

「……星河スバル、君を殺しにきた」

そう言い、アシッド・エースは三台のハンターV.Gを投げ捨てた。  
スバルは、見覚えのあるカラーリングのハンターV.Gを見つけた。

「まさか、ミソラちゃんとゴン太のハンター!？」

「もう一つはツカサのだ」

「……どうして、キズナリヨクは100なの」

「……キズナリヨクを改ざんするPGMをキングが作った。お前は偽りの絆に踊らされていたんだ。嘘だと思えば、キズナリヨクを見つめる。もう0のはずだ」

スバルはハンターV.Gを取り出し、キズナリヨクを確認した。

確かに、0になっている。

「……暁さん。本当に敵なんですか？」

「そつだと言っている」

「どうして……なら、どうしてWAXAに!？」

「キングの命令だ。敵の戦力を探れ、とな」

『おい、暁。お前は確かにスバルとのブラザーアクセスのおかげで記憶を取り戻したはずだ。なのに、どうして』

「……記憶なんか毛頭関係ない。以前の俺の考え、思想がわかったところで、今の俺とは考え方も思想もまったく違う。以前の記憶を取り戻したと言って、以前と同じになるはずがない」

『なら、なんでサテラポリス遊撃隊のスカウトを手伝った!！』

「……信用させるために他ならない」

『くそ。スバル、電波変換だ!！』

「電波変換をしてもいいが……こいつらはどうなるかな」  
アシッド・エースは三台のハンターV-Gを指差した。

「電波体のこいつらが、メテオGのノイズを食らって何も無いわけないだろ？」

アシッド・エースは冷徹に笑った。

「……暁さん」

「キングの命令は、星河スバルの抹殺」

アシッド・エースは、左手をソードに変えた。

「……嘘だ。暁さんは、そんな人じゃない」

「言ったたる。今と昔では、考え方も思想も違つと!!」  
アシッド・エースはスバル目掛けて走りだした。

『スバル!!』

ウォーロックが叫ぶ。

スバルは強く目を瞑る。

「……どういづつもりだ、アシッド」

スバルは目を開けた。

前には、電波変換を解いた暁シドウがいた。

『……すみません。しかし、あなたは間違っている』  
アシッドはウィザードオンをした。

『星河スバル、ウォーロック。シドウの願いを教えましょう』

「アシッド!!」

『シドウ、あなたは反逆者などではない。あなたの考えを伝えたら、必ず彼らも』

「いいから……。アシッド、電波変換をしろ!!」

『シドウ……』

数秒考えた後、アシッドはウィザードオフし、暁シドウは電波変換をした。

「……待ってください。暁さんの願いつて何ですか!!」

「……お前が知る必要はない」

『スバル君!!』

ハープがウィザードオンし、スバルに言った。

『私達はどうなってもいいから……電波変換しなさい』

スバルはハープを見た。

「……何を言ってるんだ!!」

『ミソラ達も、アシッド・エースにやられたわ。彼は味方じゃない!!』

「ミソラちゃん……も」

スバルはアシッド・エースを見た。

「大したことなかったよ」

アシッド・エースは笑いながら言った。

「……でも、ハープ達が……」



『スバル君!!』

ハーブが叫んだ。

スバルは口を真一文字に閉ざしていた。

「……………ロツク、行くよ!!」

スバルは言った。

アシッド・エースがフツと笑った。

「自分が助かるため……………こいつらは無駄死にか」

「……………今ここで決断しなかったら、みんな死ぬ。だったら、僕は……………」

「結局そうじゃないか。命乞いしたら、このウィザード達くらい生かしてやる」

「お前を野放しにするわけにはいかない!!」

「俺を倒せるのは、お前だけだと?……………甘い考えだな」

「……………そうだ。この考えは甘い考えだ。……………でも、こうするしかないんだ!!」

スバルの脳裏に、ミソラやハーブ、ルナルナ団員やツカサ、大吾にアカネなどの顔がよぎった。

アシッド・エースの言うとおり、甘い考えだった。自分以外の命を切り捨てるのだから。

守りたいのに、自分は無力だ。

「……………両方つかみ取る」

「何？」

「……僕に出来るかはわからない。でも、だったら両方とも掴みとる！！ウィザード達を死なせない！！」

「……本末転倒だな。その方法はない」

『いや、ある！！』

スバル、アシッド・エースは上を見上げた。確かに、上から声がした気がしたが、そこには屋根しかない。

「……今、どこから声が？」

『久しいな、スバル』

瞬間的に、ドラゴンのような影、ペガサスのような影、レオのような影がスバルの横に現れた。

『AM三賢者！！』

ウォーロックが叫んだ。

「……サテライトの管理者か」  
アシッド・エースはつぶやいた。

『……メテオGのノイズ、確かにお前の中から感じる』

「なぜ、それを！！」

『我らは全て知ってる。……ケフェウスもだ』

「ケフェウスも……」

『お前の身を心配していた。友として、ブラザーとして』

『そして、我らと共に、お前に力を授けるために動いていた』

『以前、サテライトは莫大な量のデータを我らの力で捌ききっていた。しかし、今ではその活動も停止している。そこで我らは、サテライトの莫大なエネルギーを、お前に与える手はずをWAXA職員に教えた。そろそろくるぞ』

ピロピロ、とスバルのハンターV Gが鳴った。

「チッ！」

アシッド・エースは、スバルのほうに走りだした。しかし、AM三賢者の影が間に入った。

『お前の相手は我々だ。少しの時間稼ぎなら、この体でもできる』

『スバル、急げ』

スバルはハンターV Gを操作した。

天地から、メールが来ている。文章はないが、添付してあるプログラムがあった。

それをアビリティに装備した。

ピーー、とハンターV Gが鳴った。

『デルタドライブシステム起動』

「……………デルタドライブシステム？」

『スバル、ノイズ率が急激に下がったぞ！！』

『……………それは、三機のサテライトの膨大なエネルギーがキズナリヨクを目安に、メテオGを直接抑えるようにプログラムしてあるはずだ』

スバルがA M三賢者のほうを見た。

すでに、ペガサスの影しか残っていない。

『メテオGは……………すでにお前の手中だ。漏れることもないし、お前の体を蝕むこともない……………』  
それだけ言い、ペガサスの影は消えた。

「……………トランスコード、シューティング・スター・ロックマン」

スバルは電波変換し、ロックマンとなった。

「……………体が軽い」

「……………ウィザード達は邪魔になったな」

アシッド・エースはハンターV Gを見た。

「こいつを倒したら、破壊しよう」

「そんなことはさせない、アシッド・エース。ここでお前を倒す！！」

「こいー!」

ウェーブバトル  
ライド・オン!!

## デルタドライブシステム

「バトルカード、コガラシ!!」

「バトルカード、エアスプレッド」

ロックマンとアシッド・エースが、熾烈を展開する。

「スバル、デルタドライブシステムだが、どうやらノイズ率はお前の意志によって簡単に上下できるようだ。後、ノイズ率を上げたからって、ノイズが噴出するわけじゃないみたいだぜ。まったく、なんてどでかいエネルギーなんだか、サテライトってのは」

「……なら、ノイズ率よ。上げれ!!」

ロックマンは叫んだ。

ピーー、とハンターV.Gが鳴った。

「ノイズ率ジヨウシヨウ。100…107…152…197、  
200」

「ブラザーアクセス!!」

ロックマンは更に叫んだ。

ピーー、とハンターV.Gが鳴った。

「ブラザーバンド、暁シドウ。キズナリヨク0。ブラザーアクセス」

「何…?」

ウォーロックは声を上げた。

『スバル、暁となんて……何をする気だ!?!』

「アシッドが言った、暁さんの願いを聞き出す!?!」

閃光が走った。

願

ロックマンが目を開けると、真っ白な空間に立っていた。

「……………暁さんは？」

ロックマンは周りを見回すが、シドウが現れる気配はない。

「……………キズナリヨクは0だからな。何が起こるかわからん」

その時、スバルの脳裏に映像が流れた。

スバルは頭を抱えた。

「なんだ……………今のは？」

「お前もか、スバル」

「じゃあ、ロックも？」

ウオーロックは頷いた。

再び、スバルの脳裏に映像が流れた。

赤い空、大きな飛行機、ミサイル、逃げ惑う人たち。

「……………これは、戦争？」

「……………そうか。これは暁の記憶だ！！」

「暁さんの？」

「以前、クインティアやジャックの国が、戦争で滅んだって言って



たよな。 曉も、あの時から何かしらの理由で傍にいたんじゃないのか？』

「なら、今のはジャックやクインティア先生の国で起きた戦争？」

……ここに……、クイ……、イア、ジャ……。

スバルは耳を研ぎ澄ました。

「ロックー!!」

『ああ、今度はこっちみたいだな』

真っ白な空間から、声がした。

どこにい……、クイン……、イア、ジャッ……。

「……何を言ってるんだ？」

どこにいる、クインティア、ジャック。

「……」

『………そういつのことか』

「……うん」

スバルは頷いた。

「……… 曉さんの願いは、クインティア先生やジャックを見つけるこ

とですね」

アシッド・エースが動きを止めた。

「……ああ、そうだ」

「思想も考えも変わってない。むしろ、強くなった。二人と暮らしたいから」

「……そうだ」

「だから、キングの命令には背かなかった。あの二人は、トランスコードを持ってないから、WAXAでは居場所を特定できない。キングの情報網のほうが見つけるのは早く、楽だった」

「……そうだ」

「……だからって、みんなを裏切るなんて!!」

「……ティアやジャックが、俺の全てなんだ。わかってくれとは言わない」

シドウへの信頼。スバルはそれをシドウとの絆と思っていたのかもしれない。しかし、シドウは違った。シドウは、クインティアやジャックを守り、共に生きたいと思っていた。それが、シドウの全てであり、絆の象徴だった。

「……暁さん、ジャックやクインティア先生は僕達も手分けして探します。だから、止めましょう」

「無駄だ。キングですら、二人の居所は掴めていないんだ。演技ではなく、本当に」

「だったら、キングに荷担する意味はないじゃないですか」

「キングのほうか、まだ可能性が高いんだ」

「……でも……」

「戦うしかないんだ、ロックマン」  
アシッド・エースは構えた。

「……暁さん、僕は今の暁さんは間違っていると思ってます」

「そんなこと俺もわかってる。でもな、間違いが必ずしも間違いだとは限らない」

「いいえ、今の暁さんは大間違いだ!!」

「……これ以上は止めよう。お互い、変に意識すると、本気を出せない」

ロックマンは構えた。

「必ず間違いを認めさせる。そして、キングとの関係を断ち切る!!」

「ティアやジャックを見つげるため……お前を倒す。ロックマン!!」

二人は瞬間移動すると、激しく火花を散らし合った。

## 参戦

「ハーブ・ノート、オックス・ファイア、ジエミニ・スパーク、いずれも戦闘不能のようです……。おまけに、アシッド・エースが裏切った。今、ロックマンと戦闘中」  
天地は言った。

ロックマンとアシッド・エースが戦闘を始めて数分後、WAXA基地では慌ただしいムードが漂っていた。

「ロックマンの状態は!?!」

「どうやら、デルタドライブシステムはうまく馴染んでいるようです。……しかし、アシッド・エースと戦闘中なので、戦線には立ってないでしょう。とりあえず、画面に映像を映しておきます!?!」  
天地はコンピューターを操作し、真っ暗な画面に映像を流した。ロックマンとアシッド・エースが、戦いを繰り広げていた。

「残りのウィザードの数は!?!」

「すでに100を切ってます。ただでさえ、ムーの電波体は強力なのに……。ウィザードでは手に負えません!?!」  
更に別画面に、WAXA基地付近での戦闘も流れていた。  
ムーの電波体は、計り知れないほど数がいた。

「……まずいな。WAXA遊撃隊が全員やられたとなると……。最終障壁もいつ突破されるか。それに、ミソラ達の安否も……」

『おい、見るよ』

ムーの電波体が、ピンクのパーカーを着た少女の周りに集まる。少女はうつぶせに倒れ、意識を失っていた。

『こいつ、響ミソラじゃねえか!?!』

『本当だ。でも、どうしてこんな場所に!?!』

『……お前、あれ見たか。ミソラちゃんの新ドラマ』

『ああ、キング様に黙ってこっそりと……』

ムーの電波体が談笑にふける。

『……でも、ミソラちゃんがどうしてここに?』

ムーの電波体が首を傾げた。

『俺は見たぜ。ミソラちゃん、ハープ・ノートなんだよ!!!』

ムーの電波体が驚いた顔をした。

『マジかよ』

『ああ、たくさん敵を倒してたぜ』

『……でも、ミソラちゃんにやられるなら、俺は本望だぜ?』

『俺もだ!!!』

『アシッド・エースのヤツ。俺達の敵を……』

更に、ゴン太の周りにもムーの電波体は集まっていた。

『手柄横取りしやがってな。点数稼ぎに必死なことだ』

『今、あいつはどこに?』

一体のムーの電波体が、上を指差した。

『……上?』

『宇宙だよ』

『ああ、そういうことか』

『ロックマンを倒しにいったみたいだぜ』

『……なら、こいつは俺達が口裏合わせれば、俺達の手柄にできるな』

『ああ、だからまずは……こいつを二度と喋れないようにしなくちやな』

ツカサの周りに、ムーの電波体が集まっていた。

『……双葉ツカサ。よし、一番キング様からの点数が高いぜ』

『だが、やったのはアシッド・エースだろ』

『バカやろう、あいつは今、宇宙にいる。口裏合わせればバレない』

『そうか、お前、頭良いな』

『……やっとだな。やっと、ムーが復興できる』

『それもこれも、キング様が我らを蘇らせてくれたおかげだな』

『ああ、ラ・ムーの残留電波から、我らの個々の電波体を分析、復元してくれたおかげだ』

『そして、キング様の命令に従えば、ムーを復興してくれるとも言ったのだ』

『……ようやく、だな』

ミソラの周りのムーの電波体が、喧嘩を始めていた。

『ぶざけるな、こいつを始末しなければ、ムーの復興はないんだぞ  
……』

『ミソラちゃんの歌声を聞けなくなるくらいなら、ムーなんか復興しなくていい!!--!』



『お前ら……!!』

「……バカな奴らだ」

ムーの電波体が、一斉に周りをキョロキョロ見回した。

『誰だ!?!』

「……お前らの慕うキングは、お前らを道具としか思っていない。ムーの復興など、手を貸すはずがない」

『何……。どこだ、出てこい!!』

黒い装甲を身に纏った、ブライがムーの電波体の眼前に立つ。

『その紋章……ムーの者だな!?!』

「そつだ」

『……我らは仲間同士じゃないか。ムーの復興は願わないのか!!』

「……ムーの復興は願ってる。しかし、お前らは仲間じゃない」

ムーの電波体は、ブライを見失う。

『後ろだ』

一体のムーの電波体が叫んだ。

一斉に、ムーの電波体達が振り返った。

「……今の攻撃も見抜けないのか」  
「ブライはため息をついた。」

『な……に』

「ミソラの周辺にいたムーの電波体は、全て消滅した。」

「……キングの力によって蘇ったムーの電波体など、仲間ではない」

## 身代わり

「……これは」  
天地が眩いた。

「どうした!？」

「ムーの電波体が……急速に減ってます」

ブライが参戦して、それは数分後のことだった。  
ムーの電波体を倒しているのは、まごうことなき、ブライだ。

「……ブライです。ブライが一人で」

「よし、急いでウィザードを総員出動させよう。出し惜しみはするな。そんなことできる余裕はない!!」

ブライはラプラスを剣に変え、ムーの電波体達を破壊していく。

「……数だけだな」

そんなブライ目掛けて、ミサイルが飛んできた。  
全方位からだった。

「ほう……」

ブライは眩いた。

『ウィザードオン!!』

ブライを守るように、サテラポリスのウィザードが現れた。  
そして、ブライ代わりにミサイルを受けた。

「……余計な真似を……。電波障壁がある俺にとって、こんな防  
ぐのは容易い」

『……だが、全方位ってのはまずかつたんじゃないか？』  
一体のウィザードが、最後の力を振り絞り、呟いた。

「……どうだかな」  
ブライはジャンプし、ミサイルを放ったムーの電波体を、ラプラス  
で切り裂いた。

『……頼んだぞ、ブライ』  
ウィザードは消滅した。

身代わり（後書き）

言うにこの回は、次の回に繋ぐための軽いエピソードですね。

本当に中身はスツカラカンです

すみません

## 罪

数時間前。

「ねえちゃん!!」

「……何？」

「ニュースを見るよ。日本のWAXAが、襲撃にあってるみたいなんだ!!」

「……だから、何？」

「キングの仕業みたいなんだ!!」

「それが？」

「……襲撃に会ったんだから、スバルもいるはずだ。恩返しがしたいんだ!!」

「……ジャック。わかってるの？私たちは、重罪人なの。WAXAなんかに出向いて、戦いを手伝ったって、最終的には捕まる運命なの」

「わかってるよ。でも、スバルへの恩はどうするんだよ!？」

「……あの子に感謝はしているわ。でも、私は、シドウも失い……あなたも失ったら……」

「……ねえちゃん」

「ジャック、その話はもう止めて。それに、今の私たちはヴァルゴもコーヴァスもない。無力よ」

「……わかったよ、俺、下にいるから」

ジャックは一階のリビングに着くと、机を思い切り殴った。

スバルへの恩返しはしたいが、姉、クインティアの言うとおり、コーヴァスも持たず、そして、重罪人の自分がWAXAに出向くなど、バカにもほどがあるようにも思えた。

しかし、この重罪人として過ごすなら、いつそのこと罪を償うのが楽にも感じた。

それを行動に起こせなかったのは、クインティアがいたからだ。シドウが死んで以来、そして、改心して以来、クインティアはジャックにより一層付きつきりになった。

もう、ジャックしかない。それは、ジャックも同様だといえた。もう、クインティアしかない。

しかし、恩返しをしたい。

自分を闇の中から引き上げてくれた、青い流星に。

しかし、力がない。

頭を抱えるしかない。悩むしかない。

『力なら、やるぜ?』

ハンターVGからだ。そして、その声は聞き覚えがあった。

「コーヴァス……。どうして」

『さあな。残留電波が、お前の気持ちに共鳴したみてえだ。お前の体に蓄積されたメテオGのノイズが、その全エネルギーを使って、今の俺を作った』

「……力をくれるって」

『……安心しろ。今の俺は、お前の気持ちをベースに再構築されたみてえだ。いささか、気性の荒さは収まってる。もう地球の破滅を楽しんだりしない』

「……でも、ねえちゃんが」

『お前、割と優柔不断だな。いいか、お前は、ねえちゃんのためと思ってるかもしれないが……お前自身がねえちゃんに頼ってるんだ。だから、一歩が踏み出せない』

「……!」

『俺も、若い頃はやんちゃした。FM星だと、重罪人さ。……俺は後悔してんだ。一回死んで、な。お前はそんな思いするな。罪を償い、恩返しをし、もう一回友達と会え。そして、ねえちゃんと会え』

「……コーヴァス。そうだな」

電波変換!!

ジャック、オン・エア!!



## 罪（後書き）

前半は声だけです  
ね。  
描写が思い浮かぶか、不安です

葛藤

「…………ジャック？」

クインティアは一階のリビングに繋がるドアを開けた。リビングには、誰もいなかった。

「…………ジャック？」

『ジャックなら、コーヴアスが連れて行ったわよ』

ハンターV Gから、声が聞こえた。

それも、一番忘れたい声。すぐに、誰の声か思い当たった。

クインティアはハンターV Gを手にとった。

「…………どうして」

『あなたの体の中のメテオGのノイズが、全てのエネルギーを使って私を作ったの』

そこにはヴァルゴがいた。

『いいのかしら。ジャックったら、WAXAに行つたみたいよ』

「え…………」

クインティアは視線を泳がせた。

「…………勝手な行動ね。私は知らないわ」

『いいのかしら』

「いいのよ。捕まったら、自業自得だわ」

ヴァルゴがため息をついた。

『……私が復活できた理由、教えてあげるわ。あなたが力を欲していたからよ。あなたもかわいいわね。表では知らんぷりでも、裏ではしっかり心配してる』

「何のことかしら？」

『アラアラ、とぼけちゃって。……素直になったら、ティア』

ヴァルゴは、至って平静だった。以前のように、馬鹿にした笑い方をしない。

「……確かに、ジャックは守りたいわ。でも、捕まるのは御免ね」

『……本当にそうかしら』

「……どういう意味？」

『……あなた達姉弟は、暁シドウの存在を除けば、二人ぼっちだった。そんな弟を、あなたが見捨てるとは思えない』

「勝手な想像よ」

『……だったら、私はどうして復活できたの!？』

「私が望んだとでも？」

『ええ、そうよ。あなたが私を望んだ』

ヴァルゴはきつぱりと言い切った。

『……あなたが救いたいのは、ジャックや、シドウだけじゃない。』

メテオGで、恐怖を煽った人間全員よ。罪滅ぼしのつもりでね』

「……………私に自覚はないわ」

『……………ジャックのほうはまだ大人ね』

「何ですって？」

『ジャックのほうが、まだ大人ね。自分の罪を理解し、少しでも贖罪をしようとしてる。あなたは、結局自分のことばかり……………』

「そうね。でも、私がいなくなったら、ジャックはどうするの？」

『なら、ジャックがいなくなったら、あなたはどつするの？』

クインティアは先ほどのジャックとの会話を思い出す。思い切り、弱音を吐いたばかりだ。

何も言えず、クインティアは押し黙った。

『……………何も言えないのかしら。あなたは勘違いしてるみたいね』

「……………え？」

『あなたは、自分のために逃げてるのよ。ジャックとかシドウがどうとか言ってるけど、結局は自分のため』

「そんなこと……………」

ないとは言えなかった。

『……………シドウは、あそこにいたみんなのために死んだわ。そして、

ジャックはみんなのために戦争に赴いた。……あなたは？」

クインティアは俯いた。

『あなたは、自分のために、何もしないの？それで良いの？』

「……………違う」

『あなたの守りたいものは、自分なの？』

「違う」

クインティアの脳裏に、シドウの顔が浮かんだ。しかし、すぐに消える。シドウはもういない。

「……………シドウ」

あなたは何のために生きたの？

心の中で呟いた。

返事は返ってこない。当然だった。

しかし、答えは聞かずともわかっていた。

そして、それを受け継げる人は自分しかいなかった。いや、クインティアがするのは使命。

「……………行くわ。WAXAに」

『ティア』

「シドウの代わりに……………私がみんなを救う」

ヴァルゴが優しく微笑んだ。

『そうと決まったら……行くわよ』

「ええ」

電波変換

クインティア、オン・エア！！

葛藤（後書き）

暁さんは生きてるんですけどね  
ジャックもクインティアも知る由がなかったわけです

## 決意

「……何故、ブラザーアクセスをしない」

アシッド・エースは肩で息をしながら、言った。

「……暁さんと話をするため」

ロックマンも、肩で息をする。

アシッド・エースは、フツと笑った。

「まるで、俺相手では全力を出す必要がない、と言うことが」

「ええ、そうです」

「……強くなつたな」

「暁さんの代わりになろうと思ったから」

「何？」

「ジョーカーの自爆で、暁さんが死んだと思った後、僕は自分ができることを考えた。でも、それはなかった。僕は僕自身であり、暁さんは暁さんだから」

「……お前の意志の力があつたから、メテオGは破壊できた。俺の意志を受け継ぐだけなら、誰でもできる。だが、代わりにはなれない、か」

ロックマンは頷いた。



「……それに、僕と暁さんとは、持っているものが違う。僕には、愛はない」

「……ミソラはどうした？」

「……ハハ、怒られちゃうな」

ロックマンは俯いた。

「……やっぱり、止めると言うことは」

「ないよ。だから、こうして戦ってるんだろ」

「……そうですね」

アシッド・エースは構えた。

「悲しい顔をするな。やりづらいだろ」

「……わかりました」

ロックマンは眉間に皺を寄せた。

「さ、もう一回始めましょう!」

「ああ!」

二人は即座に姿を消した。

四方八方で、火花を散らし合う。

## 反応

「……この周波数は」  
天地は呟いた。

「ヨイリー博士、ヨイリー博士!!」

コンピューターに向かっていたヨイリーが天地のほうを振り返った。

「どづしたの!?!」

「この周波数を見てください!!」

画面に、二つの特異な周波数が刻まれていた。

「……まさか」

「くらえっ!!」

ロックマンがキャノンを放つ。

「バトルカード、バリア!!」

キャノンの閃光を、バリアがかき消した。

「ソード!!」

アシッド・エースが、左手を刃に変え、突っ込んだ。

「バトルカード、ブレイクサーベル!!」

ロッキマンの左手も、サーベルに変わる。

サーベルとソードが、激しく火花を散らす。

「バトルカード、インビジブル」

サーベルに反発する力が、急になくなり、左手は自然と下に流される。

「バトルカード、プラズマガン!!」

アシッド・エースが、銃器をロッキマンに構えた。

「バトルカード、ステルスレーザー!!」

アシッド・エースの後ろに、小型の飛行機が浮かぶ。そして、レーザーを数発放った。

「インビジブルを!!」

アシッド・エースは、攻撃をかわせない。

そして、半透明の状態から脱した。

「バトルカード、ダバフレイム」

アシッド・エースは、地面に突きとばされた。

「ハアハア」

ロッキマンは見下しながら、息を整えた。

「ハアハア……ここまでとはな」

アシッド・エースは立ち上がった。

『そこまでしなさい、あなた達!!』

室内に、ヨイリーらしき声が響いた。

「…………ヨイリー博士？」

『今までのあなた達の戦いは、モニターから見てたわ』

「…………だったら、俺が裏切ったことも知ってるだろ!？」  
アシッド・エースは叫んだ。

『ええ…………でも、裏切る理由はないはずよ』

「何？」

『下に降りてきなさい。…………そしたら、わかるわ』

「…………まさか!?!」

アシッド・エースは、周波数を変え、室内を出た。

「…………僕達も行くわ」

『ああ』

ロックマンはハンターV.G三台を拾い上げ、周波数を変え、室内を出た。

## 愛

どれほど、この瞬間を待ちわびたか……。数えても、数えきれない。あの時、まだ力はなくて、とてもじゃないが、二人を連れて行くことはできなかった。

後悔した。日が経つにつれ、強まるその思いは、強力な力をつけることで逃れる道を見つける。今ならできる。ディーラーから、二人を連れ出せる。

しかし、強力な力の代償は、体に刻々と刻まれた。激痛、吐血、嘔吐。

そんなことは日常茶飯事のようになりつつあった。

それでも、思いは強まるばかり。しかし、ディーラーを抜け出したシドウは、向こうからの接触を待つしかなかった。

遂に時は来た。ジャックはいなかったが、クインティアが大量の手下を連れ、WAXAに現れた。

傷つけないように戦った。戦士失格だった。

しかし、戦士などという非条理の称号は欲していなかった。いつ戦いに繰り出され、いつ死ぬのかもわからないからだ。非条理なことこの上ない。

そして、欲していたのは、何よりも二人だった。

愛す者達を、欲するのは当然なのだ。

しかし、クインティアは愛よりも深い悲しみ、憎しみにとらわれていた。

強力な力の代償が、体を襲った。

結局何も出来ず、ロックマンがクインティアを捕らえた。

上辺では改心するよう勧めたりもしたかもしれない。しかし、内心は望んでもいない。

そんなシドウに、訃報が届いた。  
ジャックも捕まった。

守るべき者、愛す者達は、気付いたら重罪人となり、牢に繋がれた。

むなしかった。

何もできなかった自分。守れなかった自分。

そして、朗報が届く。

ディーラーのアジトが見つかった。

誰が二人を重罪人にした？

誰が二人を牢に繋がせた？

他でもないキングではないか。

恨みはキングに矛先が向いた。

そして、ロックマンには気絶してもらい、キングと対面した。

しかし、結局何もできなかった。

いや、何も出来なくはなかった。

欲してもいなかった戦士という称号のため、脱獄した二人を助けるため、ジョーカーの爆発を一心に受け、塵となった。

そして、キングに再構築され、ロックマンを襲った。

あの時、ロックマンにブラザーアクセスをされそうになった時、キズナリヨクが上がった。

あれは、キングの作ったキズナリヨク改ざんプログラムの影響ではない。

記憶というプログラムを抜かれたシドウは、心にモヤモヤしたものを日々感じていた。

そしていつしか、記憶を取り戻したいと感じるようになった。

シドウ自身、記憶を取り戻したかった。

そして、その願いが叶い、記憶は蘇る。  
クインティア、ジャックの存在を思い出すと、ますます強まった後悔の念。

しかし、二人が改心した今、もう壁はない。

二人を見つけられれば、願いはかなう。

しかし、二人は見つからない。

トランスコードを持たない二人は、WAXAでは発見は難しいのだ。なら、キングのほうはどうだろうか。

元々、二人はキングの下で悪事を働いていた。なら、キングのほうが、情報を得やすいに違いない。

だから、シドウはキング側についた。

アシッド・エースはWAXA基地前に降り立った。

周りを見回した。

ここに二人がいるのか。

「シドウ」

聞き覚えしかない声だった。

待ち望んだ声だった。

アシッド・エースは後ろを振り返った。

電波変換を解く。

「……久しぶりだな。二人とも」

押し寄せてくる感情は、自然と目を潤した。

不思議と、足が勝手に進む。

それはクインティアも一緒らしい。

言葉の掛け合いはなかった。必要ないからだ。  
体が密着し合う。強固な力で掴み合い、当然だが簡単に離せそうもなかった。

「…………おかえり」

シドウは呟いた。

「…………ええ」

押し寄せた感情は、決壊したダムのように、シドウの目からこぼれ、溢れた。



## 条件

「……わかってるわよね、シドウちゃんに、クインティアちゃんに、ジャックちゃん」

ヨイリーの声はいつになく、引き締まっていた。

「ま、待ってください。ヨイリー博士」

「スバルちゃんは黙ってなさい」

スバルは、ヨイリーの圧力に押され、押し黙った。

「……三人共、重罪人に代わりはないわ」

「……そうですね、だから、出るところに出て、裁かれるつもりさ」  
シドウは笑顔を崩さない。

「私達も……そのつもりです」

クインティアは俯いたままだったが、覚悟は伝わった。

「……そうだ。罰を受けて、そして、またみんなと会っんだ」

「……クインティア先生、ジャック………暁さん」  
スバルは呟いた。

ヒシヒシと、覚悟たるものは感じられた。

「……フウ、覚悟が伝わりすぎて、面白みがないわね」

「………どういう意味だ。ヨイリー博士？」

「……今、WAXAは壊滅の危機にさらされてるわ。なのに、大事な戦力を牢に繋ぐなんて、そんな真似はできない。だから、あなた達を試すことにしたの。情状酌量の余地があるか」

「……いっぱい食わされたわけか」  
シドウは頭を掻いた。

「そして、あなた達のためにも、条件を提示するようにも言われるわ。それは、あなた達が戦力になるなら、今回の重罪はチャラにしてあげるってことよ」

「……ありがたいよ」  
シドウは言った。

「私は条件に乗るわ」  
クインティアは言った。

「……本当にそれでいいのかよ」  
ジャックは呟いた。

「ジャック？」

「……俺たちがしたことは、真つ当な犯罪だ。なのに、そんな簡単にそれをチャラになんて」

「そう思ってるだけで、十分じゃないか」  
シドウが言った。

「え？」

「その犯罪を後悔し、そして、償おうともしてる。なにより、償う環境はWAXAが用意してくれてる。罪を償う気持ちで、その条件を飲めばいいんだ。全ては取り返せないかもしれないが、それしか方法はない。このまま、牢で何もしないよりもマシだしな」

「……そうだな、わかったよ」

ジャックはヨイリーに向き直った。

「俺も、その条件に乗るよ。そして、みんなを守るんだ」

「……決まりね。ミソラちゃん達三人が目覚めたら、次の指令を出すわ。それまで、ゆっくりと休んでね」

「……あの、ミソラちゃんの病室はどこですか？」

「なんだ、早速甘えに行くのか？」  
シドウが茶化す。

「ち、違いますよ。ハンターを返さなきゃいけないし……」

「ゴン太達のだってあるだろ？」

「そ、それはそうですね……」

シドウがにやけるが、シドウの後頭部に張り手が飛んできた。

「茶化すのも、大概にしなさいよ。迷惑してるでしょ？」

「クインティア先生」

「……ほら、行きなさい」

クインティアは、手を振った。

「はい」

顔を赤らめがら、スバルは部屋を出た。

「……あなた達には、別の指令を出そうかしらね。みんなのために」  
ヨイリーが言った。

「……やっぱりそうか。WAXA遊撃隊を、分解するんでしょ？」

シドウが訊くと、ヨイリーは頷いた。

「ええ、ジャックちゃんとクインティアちゃんが入ったことで、人員も増えたことだしね。半分づつにして、ちょうどいいくらいだからね」

「そうね。あなた達はこれから、WAXA偵察隊として、頑張ってもらつわ。とりあえず、ミソラちゃん達が起きるまで、まだ足りない戦力を増やすため、スカウトなどをしてほしいの」

「了解だよ。なら、WAXA遊撃隊のリーダーはスバルか」  
シドウは言った。

「なら、早速お願いね。これがリストよ」  
ヨイリーがハンターV Gを操る。

シドウのハンターV Gに、ヨイリーからメールが届いた。

「……ちよっと多くないかあ？」

「あら、罪滅ぼしの気持ちはどうしたの？」

「……わかったよ」

シドウは頭を掻いた。

「早速行くか。二人共！！」

「ああ！！」

「ええ！！」

## 黒光り

「ゴン太とツカサ君のハンターは、二人の枕元に置いてきたし……」  
二人にしたら、多少、ぞんざいな扱いだが、スバルに悪気はない。

「よし、ミソラちゃんの病室に行こう」

そう言う前から、スバルの足はすでにミソラの病室に向かっていた。  
ミソラの病室の前に、スバルは立った。

「……そういえば、この前までと逆の立場になったな」

『何言ってるんだ。お前はケガなんかしてねえだろ。バカして隔離されただけじゃねえか』  
ウォーロックはため息をついた。

『あらあら、案外そうかもよ。ミソラは、スバル君を病人みたいに見てたし』  
ハープが横槍をさした。

「病人……僕が？」

『ええ、精神的な、ね。あの時は、いつでれるかわからなかったもの。少しでも励まさないやと思ったんでしょうね』

「……ハハ、そうなんだ」

スバルが頭を掻いた瞬間、ミソラの病室のドアが開いた。  
スバルは驚き、目を丸くしながら、ドアが開いた先を見た。

「…………ミソラちゃん？」

ミソラが顔を青ざめさせながら、そこにいた。

「…………スバル…君？」

ミソラの目から、涙が溢れた。

そして、スバルの胸にダイブした。

「ど、どうしたの？」

「ハープがない……………」

「ハープなら、ここに……………」

「ハープがない……………から、ゴキブリが」

「ゴキブリ？」

「すごく大きいのがいるの、部屋に…！」

ミソラが部屋を指差した。

『…………ミソラは、足がたくさんある虫が駄目なの。特に、ゴキブリ  
に関しては、気絶したことがあるわ』

「…………はは、そうなんだ」

スバルは笑うしかなかった。

黒光り（後書き）

衛生面が行き届いてない病室ですね……。



## 説明

『スバル、朝だぞ!!』

ウォーロックは、ベッドのある二階に上がりながら、叫んだ。

『スバル!!』

「……うるさいよ、ロック。もう起きてるから」  
スバルはベッドから上半身を起こしていた。

『ほう、お前にしたら早起きじゃねえか』

「そりゃ、久しぶりの学校だしね」

『……いつもこうなら楽なのにな』  
ウォーロックは呟いた。

「何か言った？」

『いいや、何も』

ウォーロックは平然と首を振った。

スバルは一階に降り、朝食を済ますと、家を出た。

まだ、学校に戻れることは、ゴン太やミソラ以外には伝えていないので、家の前の迎えは誰もいない。  
一人きりで、スバルは学校に向かった。

「……なんだか緊張するな」

スバルはそう言い、胸を抑えた。

果たして、クラスメイトはどんな態度でスバルを迎え入れるのか。忘れているか。いや、無いことを祈りたい。

なら、祝福してくれるか。なんとも言えない。

まず、自分はどんな形で休みを取っていたのか、スバルは知らなかった。

それだけに、深く考えるだけ無意味な気がした。

ようは気合いだ。それで、どうにかするしかないのではないか。

スバルは息を大きく吸うと、吐いた。

「……よし」

スバルはドアをガラガラつと開けた。

「みんなおはよう!!」

スバルは笑顔で、そう言い、教室に入ると、一斉に視線がスバルに向いた。

覚悟していたことなので、スバルは笑顔を崩さない。

だが、次に感じたのは、おぞましいオーラだった。

「ス・バ・ル・く~~~~ん。訊きたいことがあるんだけど」

それを見ると、スバルの顔は一気に青ざめた。

スバルに真っ先に話しかけたのは、ルナだった。

しかし、様子がおかしい。声色も低く、怒りに似たような感覚を抱いているようだった。

スバルは二歩後ずさった。

「この日を待ってたわ。はっきりさせようじゃない」

スバルはルナを見た後、教室中を見回した。ミソラも、ゴン太もキザマロもいるではないか。他のクラスメイトもすでにほとんどがいる。

だが、ミソラ以外が他人の振り。

ミソラはミソラで、スバルと目が合うと笑顔で手を振る始末だった。

「スバル君、さあ、教えてもらいましょうか」  
ルナが怒りながら言った。

少なくとも、スバルにはそう見えた。

「ま、待ってよ、委員長。何を!？」

「とぼけるのも、いい加減にしないで!！」

スバルは背筋を伸ばした。

「ミソラちゃんとの関係よ!！」  
さっさと教えてもらおうかしら、とルナは続けた。

「ミ、ミソラちゃんとの!？」  
スバルはルナから殺気を感じた。

下手な言葉は許さない。真実を言え、とルナの目は物語っていた。

「……えっと、それは」

そうわかっていながら、スバルはあくまで誤魔化そうとした。

「はっきり言いなさい!！」

はっきり言ったら、どんな目に会わされるかわかったもんじゃないか

った。

「…………それは、さ」  
スバルは言葉を濁した。

ルナは歯を食いしばり、怒りを露わにした。

「ミソラちゃん、あなたも当事者よ。来なさい!!」

「は〜い!!」

ミソラは笑顔で二人の元に来た。

「おはよ、スバル君」

ミソラは、スバルの横に立つと、笑顔で言った。

「う、うん」

なぜ、そんなに平然としてられるんだ、ミソラちゃん、とスバルは心の中で呟いた。

「…………で、あなた達の関係は？」

ルナが仕切り直したように、スバルとミソラの顔を交互に見ながら、訊いた。

「ブラザーだよ。初めての」

ミソラは言った。

無難な返答に、スバルは安心せずにはいられない。

「それだけじゃないでしょ。だったら、スバル君はどうしてさっきあんなに悶えたのよ」

「そりゃ、ルナちゃんの威圧感にやられたんだよ」

「……だったら、二人のキズナリヨクだけ、どうして下がらなかったのよ」

ルナは勢いを弱めながら、言った。

スバルは思わずドキリとした。ミソラも、同様のようだった。

「……私やゴン太やキサマロだって、ブラザーよ。ブラザーに、最初も最後まで関係ないわ」

「あるよ。初めてのブラザー申請の時のスバルの顔、私忘れたことないもん」

ミソラは言った。

「……それでも、キズナリヨクが揺らぐほど、大きな違いが生まれるかしら」

ミソラは押し黙った。

「……どうなの、スバル君」  
ルナは言った。

もう、隠すのは無理だとスバルは思った。

「……僕は、ミソラちゃんが好きなんだ」  
スバルは言った。

ルナの目が大きく見開かれた。大粒の涙が、両目からポロポロと零れ落ちた。

「……ルナちゃん？」

ミソラが、ルナに近寄った。両肩を、優しく掴もつとする。

「止めてー!!」

ルナが、ミソラの手を力強く振り払った。

「委員長ー!!」

キザマロが異変に気付き、立ち上がった。

「ど、どうしたんだよ」

ゴン太も立ち上がった。

二人とも、ルナに近寄った。

「……大丈夫か、委員長」

ゴン太は訊いた。

「……ええ、大丈夫よ」

ルナは立ち上がった。しかし、目は腕で覆い隠され、嗚咽を時々もらした。

「……私、保健室に行くわ」

ルナは言った。

「え、でも、そろそろ授業が」

「いいのよ」

ルナは強くそう言い放ち、廊下に出て行った。

## ずる賢い女

「……委員長、大丈夫かな」  
スバルは横に座るミソラに、小声で訊いた。

「……どうだろ、泣いてたしね……」  
こうなったのも、自分達のせいだと、ミソラは気付いていたが、果たしてスバルはどうなんだろうか。

「……委員長、どうして泣いたんだろうね」  
スバルは呟く。

やはり気付いていなかったか、とミソラは思った。

自他共に認める、スバルの鈍感ぶりは健在だ。  
多分、ルナがスバルのことに好意を抱いていることも気付いてないだろう。

しかし、それはミソラにとっても好都合であり、スバルの小耳に挟むようなことをミソラはしようとは一切しなかった。

「……でも、ルナちゃんならきつと大丈夫だよ」  
交友関係を失いたくはないが、ミソラはルナの味方はできない立場だ。

ルナの味方＝スバルとの関係の消滅を意味し、それはミソラにとって、一つの生きがいを失うことを意味した。  
しかし、もしルナとスバルを争う立場になったとしても、ミソラは負ける気はしなかった。

それは、容姿しかり、性格しかり、スバルとの現在関係しかり、様々な要素からの、ミソラの女の勘に過ぎはしないが、ミソラは十八九間違いないと言い切れた。

それを言わないのは、当然関係をこじらせたくないからであり、スバルに悪印象を与えたくないからだ。

両思いだとは承知しあっても、気が変わるのは一瞬だ。それがいつ起こるか、起きないかは不明だが、用心にこしたことはない。

「……心配だね」

後で見に行ってみよう、とは口が裂けても言えなかった。前述通り、用心にこしたことはない。

「後で保健室に行ってみる？」

スバルがそう言うのは必然とも言えたが、ミソラにとっては面白くない。

「……そつとしておいたほうがいいかもしれないけどね」  
行くのは止めよう、と強く言えないのは当然だった。

「でも行こうよ、僕たち委員長の友達だしさ」

友達でもあるが、恋敵でもある。

他でもない、今日の前にいるあなたを巡って。

「……うん、そうだね」

私は行かない、とは言えない。

スバルに嫌な女にうつるし、何よりスバルとルナを二人きりにしたくない。

前述通り、用心にこしたことはないのだ。

「じゃあ、この授業が終わったら行こう。ゴン太やキザマロも誘ってさ」



スバルが笑顔で呟いた。

「うん」

ミソラも笑顔で返した。

心の中でため息をつく。

大変だと思ったからだ。

最善策は、ルナを傷つけず、スバルと交際する。

これは言わずもがな。

しかし、先ほどのルナの態度を見る限り、それは不可能に近かった。

なら、今の最善策は、ルナを少々傷でスバルを諦めさせ、ミソラ

はスバルと交際をする、だ。

ミソラは心の中で、もう一度ため息をついた。

難しそうと考えたわけではない。

今、自分がとんでもない賢い女に見えたからだ。

ずる賢い女（後書き）

いやあ、ミソラは腹黒いですね（笑）

ゲームしてた時は、一回も腹黒そうと思ったことはなかったんですけどね。

これは、ミソラが成長したんでしょうか？

それとも、キャラ崩壊でしょうか？

ちよっと疑問ですね

「……何、やってるのかしら」

ルナは保健室のベッドに、仰向けに寝転びながら、天井を見た。

「……スバル君は、ミソラちゃんのことか……」

先ほどの出来事を思い返すだけで、ルナは涙ぐんだ。

「……なんで、涙ぐんでるのかしら、たかがスバル君程度で」

強がりな台詞は吐けたが、どうにも泣け止めなかった。

心の中では、すでにスバルがどれほど大きな存在か理解していたからだ。

「……なんで」

私じゃないの。

ルナの台詞は、発する前にポトンと地面に落ちた。故に、誰にも聞こえない。もつとも、今の環境にそれを聞く人もいない。

ルナは寂しくなり、涙を流した。

「……スバル君」

今にも掻き消えそうな声だった。

だが、思いが届くわけではない。

ルナは胸が締め付けられる思いだった。

自然と、目をつぶった。

「……ソフフ。何を苦しんでいるんだか」

ルナはハツとなり、目を開けた。

その瞬間、手で口を思い切り塞がれた。

ルナはもがくが、相手の力は強く、とても離せる雰囲気ではない。見たことがある顔だった。いや、相手だった。確か、ファントム・ブラックという、ロックマンの敵。

「安心しろ。お前に力を貸すだけだ。とっておきで、強力な力をな」

『ルナちゃんに何を!!』

ルナのワイザード、モードがワイザードオンをした。

「邪魔をするな」

ファントム・ブラックが、モードを軽く触った。

それだけで、モードは活動を停止した。

「軽いノイズを当てた。当分は動けまい」

ルナに、恐怖心が生まれる。助けを呼びたい。

しかし、スバルの顔が浮かぶと、自然と恐怖心が劣等感に変わった。もう、全てをどうでもよく感じた。

「……無駄なあがきをやめたか」

ファントム・ブラックが呟いた通り、ルナは力が抜けていた。

「……お前の中の残留電波を、メテオGのノイズに共鳴させる。…

…これで、お前の恋は叶うな」

ファントム・ブラックが高らかに笑った。

口を塞がれながら、ルナは悶えた。

苦しい。

「……ンフフ。ロックマンを奪い合う少女達。しかし、片方は敵に

操られている。もう片方の少女は出だしできず、ロックマンも……」  
ルナが一層苦しみだした。  
すると、鋭い閃光が走った。

「頼んだぞ、白金ルナ。……いや、オヒュカス・クイーン！」

## 復讐劇 2

『……スバル、下からとんでもない周波数を感じるぞー!!』  
ウォーロックが叫んだ。

今は授業中だけに、先生含め生徒の視線がスバルに集まった。

スバルはごまかすように笑った。

「……ロック、授業中だろ。静かにしろよ」  
スバルは呟いた。

『バカ、そんなこと言ってる場合じゃねえ。保健室あたりから感じるんだよ』

「え」

保健室には、ルナがいる。

スバルは背筋が凍るような感覚に陥った。

「ミソラちゃん」

スバルは横を見た。

ミソラは頷いた。

「先生、具合が悪いので、保健室に行ってもいいですか？」  
ミソラが拳手し、言った。

「な、なら、僕が付き添います!!」  
スバルが続けた。

「ほう。……まあ、いいだろ。行ってこい」  
育田は言った。

二人は急いで教室を飛び出し、エレベーターのほうに向かった。  
エレベーターの前に立つと、スバルはハンターV.Gからエアディスプレイを出現させ、一階をタッチした。

「……エレベーターが来ない」  
スバルは呟いた。

『スバル、ノイズのせいだ!!』

「そんな……この階には、ウェーブステーションはないのに」

「……スバル君、窓から飛び降りましょ!!」  
ミソラが窓を指差した。

『駄目よ。学校の外に、ジャミングが張られてるみたい。外に出たら、入れなくなるわ』

「……じゃあ、どうすれば」

「安心しろ。手間はかけさせない」

スバルは上を見た。

しかし、当然、天井しかない。  
確かに、上の方から声がしたような気がしたが。

『……スバル、ビジライザーをかける!!』

ウォーロックが言った。

スバルは言われた通り、ビジライザーをかけた。そして、もう一度上を見ると、言葉を失った。オヒュカス・クイーンがいたからだ。

「嘘……でしょ？」

「な、何が見えるの、スバル君」

ミソラはスバルのビジライザーを取り、かけた。そして、黙る。

「何を驚いている。さっさと電波変換をしろ」

オヒュカス・クイーンは言った。

「待ってよ、ルナちゃん。どうして、こんなことを!？」

「あなたのせいよ。スバル君を奪った、あなたの、ね」  
オヒュカス・クイーンはミソラを指差した。

「……え」

「あなたがスバル君を奪った。私は友達でしょ。私の気持ちだって知ってたくせに……なのに」

『待って、そんなこと言ったら、ミソラは恋愛をしちゃいけないの?』

「そつよ……!」

オヒュカス・クイーンは叫んだ。



「好きな仕事ができ、好きな人と付き合えて、あなたばかりずるいじゃない!!」

「委員長!!」

スバルは叫んだ。

「ミソラちゃんがずっと幸せだと思ってるの。だったら、違つよ。ミソラちゃんだって、たくさん苦しんでるんだ!!」

「私だって同じよ。好きな人に振り向いてもらえず、苦しい思いしかしてない!!」

『……スバル、今のあいつには何を言っても無理だ』

「……そうだね。なんとか正気に戻せないかな」

「待って、スバル君」

ミソラは言った。

「何？」

「多分、ルナちゃんの標的は私。スバル君は、手出ししないで欲しいの」

「でも」

『安心して、スバル君。ミソラだって強いんだから。それに、これは女の戦いよ』

「……てことで、いいよね、スバル君？」

ミソラはスバルに笑顔を見せた。

「う……わかったよ。でも、いつでも加勢できるように、僕は傍で見てるよ」

「わかった。なら、行くよ、ハーブ」

トランスコード

ハーブ・ノート……!

### 復讐劇 3 女の戦い

一足先に、戦闘に出たハーブ・ノートを追いかけるため、スバルは電波変換し、校庭に飛び降りた。

「ショックノート!!」

ハーブ・ノートが、ギターの弦を弾くと、巨大な音符が、オヒュカス・クイーンに、一直線に飛んでいった。

「ゴルゴルアイ!!」

オヒュカス・クイーンが目が怪しく光と、ビームが飛び出した。音符を蹴散らし、ビームがハーブ・ノートを襲った。

「くっ」

ハーブ・ノートはギターで受け止めた。

『ミソラ、それは止めてって!!』

「だって、他に防ぎようが……」

ハーブ・ノートは呟いた。

「スネークレギオン!!」

大量の蛇が、ハーブ・ノートに襲いかかった。

「ショックノート!!」

ハーブ・ノートは、何度も弦を弾き、巨大な音符を大量に出した。蛇は消滅した。

「クイックサーペント!!」

オヒュカス・クイーンは、不規則な動きでハープ・ノートに突進した。

「ごめん、ハープ!!」

ハープ・ノートはそう言い、ギターで攻撃を受け止めた。

「……なんで、あなたばかり」

オヒュカス・クイーンは呟いた。

「……ルナちゃん」

「いつも笑顔でいて、非のうちどころがなくて……私があなたに勝つてるものなんてないじゃない!!」

「そんなことないよ」

「……だから、力で手に入れるしかないのよ」

「それは間違ってるよ」

「わかってるわよ!!」

オヒュカス・クイーンは叫んだ。

「でも、他にどうすればいいのよ!!」

ハープ・ノートは押し黙った。

「……なんで、何も言わないのよ。何か言いなさいよ!!」

ハープ・ノートは、それでも何も言わなかった。

「……ルナちゃん、ごめんね」

ハープ・ノートは言った。

「わかってた。ルナちゃんの気持ち。でも、スバル君には言い出せなかった。敵を増やしたくなかったの」

「フン。ズルい女ね!!」

「……でも、それは、スバル君のことが本当に好きだからなの。この気持ち、ルナちゃんもわかるでしょ？」

「……わかるわよ」

当然じゃない、とオヒュカス・クイーンは続けた。

「……だから、スバル君は譲らない。例え、ルナちゃんと友達じゃなくなっても。私にとって、スバル君はそれくらいかけがえのない存在なの」

「それは私も一緒よ」

ハープ・ノートは頷いた。

「スバル君は渡さない」

ハープ・ノートは後ろにジャンプし、オヒュカス・クイーンと距離をとった。

「ショックノート!!」

「スネークレギオン!!」

巨大な音符と、蛇がぶつかり合う。

砂煙が立ち込めた。

「何も見えない」

オヒュカス・クイーンは、目を細めた。

ハーブ・ノートは、その隙にオヒュカス・クイーンの懐に入りこんだ。

「パルスソングー!!」

ハート型の超音波が、オヒュカス・クイーンを襲った。

「体……が」

オヒュカス・クイーンは、体の自由が効かないようだった。

「無理だよ。当分、体は動かない」

「……わかってたわ。こうなることは」

オヒュカス・クイーンは、呂律が回らない状態で呟いた。

「……ごめんね。ルナちゃん」

ハーブ・ノートは、ギターの弦に指をかけた。

「シヨックノート!!」

## 復讐劇 4

「……ルナちゃん？」

ハーブ・ノートは、気絶しているオヒュカス・クイーンに近寄った。

『おかしいわね。どうして電波変換が解けないのかしら』

すでに、オヒュカス・クイーンは気絶しているので、電波変換が解かれてもおかしくはなかった。

「……ミソラちゃん、怪我は!？」

ロックマンがハーブ・ノートに近寄った。

「ないよ。でも、ルナちゃんの様子がおかしいの」

「委員長の!？」

ロックマンは意識を失っているオヒュカス・クイーンを見た。

「気絶してるのに、電波変換が解けてない」

「うん。普通、そんなことないよね」

「なぜだと思う？」

聞き覚えのある声だった。

ロックマンは声のした方向を振り向いた。

「フロントム・ブラック」

ロッキマンは言った。

「あなたの仕業だったのね」

「勘違いをするな。私は、その少女の手助けをしたまでだ」  
奇天烈に、ファントム・ブラックは笑った。

『……お前がただで力を貸すわけがない。変なことを吹き込みやが  
つて』

「言っただろ。私は手助けをしたただけだ、と。その少女は、ハープ・  
ノートを憎んでいた。私は力を与えただけだ」

『ミソラが何をしたって言うのよ!!』

「それはその少女に訊け。もっとも、意識を取り戻せただけど、  
な」

「何？」

「少女はハープ・ノートを憎んでいた。だから、私は力を与えた。  
それは、少女の身をも削る」

『……どうということ？』  
ハープは首を傾げた。

『……まさか』  
ウォーロックはファントム・ブラックを見た。

「……ンフフ。さらばだ」



フアントム・ブラックは、姿を消した。

『スバル、あいつ、ルナを爆弾にしたんだ!!』  
ウォーロックが叫んだ。

「え!?!」

『あいつがルナの中に眠るオヒユカスの残留電波をノイズで蘇らせ、きつとその時に一緒に時限式の爆弾か……とにかく爆発する何かを仕込んだ!!』

「……そんな、それじゃ委員長は!!」

ロックマンはオヒユカス・クイーンを見た。

『あいつのことだ。確実に俺たちを始末するため、この学校はぶっ壊せるくらいの力を秘めた爆弾だろうぜ!!』

「それじゃ、みんなが」

ハープ・ノートは、授業が終わったのか、ざわつきだした校舎を見上げた。

「どうすればいいの、ロック!?!」

『……ルナを殺すしか』

ロックマンは目を見開いた。

「そんなこと出来るわけないだろ!!!!!!」

『ゴチャゴチャ言っていたら、みんな死ぬんだぞ！！！』

「委員長を殺すことなんか……」

ロックマンはひざまずいた。

「どうしたら……」

『スバル、一つでも多くの命を救うんだ。ルナだって、自分のせいでたくさんの方が死ぬなんて嫌に違いない』

ロックマンは歯を食いしばった。

一刻を争う。しかし、ブラザーであるルナを殺すことなどできない。

「……無理だ。委員長は……僕にとって、かけがえのない存在なんだ……！」

ロックマンの様子を見ていたハープ・ノートは、寂しそうな目をした。

「……学校に僕が行けるようになったのも……委員長ののおかげだ。カミカクシでみんなが行方不明にされた時、立ち上がったのも、委員長のおかげだ。僕に委員長を殺すことはできない」

『スバル……！』

ウォーロックは叫んだ。

『……あなた達はルナのことをそこまで……』  
ロックマンはオヒュカス・クイーンの隣を見た。

浮遊する紫色の電波体がいた。

『オヒュカス』

ハーブは言った。

『久しぶりね、ハーブにウォーロック。それに、ロックマン』

『……ファントム・ブラックのやろつに復活させられたんだな』  
ウォーロックは言った。

『ええ、強力なノイズの影響で急にな。私の体はノイズの影響を普通以上に受けるようになってしまった。それで、電波変換も解けない』

オヒュカスは言った。

『……なら、ノイズを吸収すれば』  
ロックマンは言った。

『そうか、電波変換は解ける』  
ウォーロックは言った。

『……僕の出番だね』

ピーー、とハンターV.Gが鳴った。

『デルタドライブシステムハツドウ。ノイズエネルギーガイドレイン』

『スバル、周りのノイズが下がってきたぜ』

『うん』

ロックマンは頷いた。

ノイズは、すぐに全て消え去った。

「これで……」

オヒュカス・クイーンの電波変換が解かれた。

「良かった」

ロックマンは吐息をついた。

『よし、後は私をデリートしろ』

「……え？」

『やっぱりそうか。ノイズを与えられ、復活したのは、オヒュカス・クイーンではなく、オヒュカスだ。お前の体に、爆弾があるんだな』

『ああ、高濃度のクリムゾンだ。時限式で、一斉にはじけるように仕組まれている。だが、デリートは別みたいだな』

「……そっか、ごめんね、オヒュカス。せっかく復活できたのに」

『いいんだ。それより、ルナに謝っておいてくれ。二度も体に入っ  
てすまなかったと』

「わかったよ」

ロックマンは左手を銃器に変え、オヒュカスに向けた。

「ロックバスター!!」

復讐劇 4 (後書き)

日にち計算したら、多分10日くらいしか経ってないような気がしますね

違ったら、すいません

## 悩み

次の日、ミソラは虚ろな瞳で席についていた。

「……………ミソラちゃん」

ルナが、気まずそうな顔で、席の前にいた。

「え、何？」

「昨日は、本当にごめんなさい」

ルナが頭を下げるのを、ミソラは目を丸くして見ていた。

「私、ひどいこと言ったから」

「い、いいよ。今は幸せだもん」

ミソラは笑顔を見せた。

「……………今更、こんなこと言うのも変かもしれないけど、スバル君は、ミソラちゃんに譲るわ」

「……………え」

「元々、ミソラちゃんが先に告白したんだし、スバル君もそれに応えてた。それに、私は決意ができてなかった。ミソラちゃんと違って、振られるのが怖くて、告白できなかった。始めから、スバル君はミソラちゃんのものだったのよ」

「……………ありがとう」

「いいえ。だから、私はミソラちゃんがスバル君との交際に困らないように、サポートするわ。女の子同士のほうが、言いやすいことが多いでしょ？」

「うん、ありがとう!！」

ルナにこう言われたが、ミソラは一つ気がかりなことが生まれていった。

スバルが、ウォーロックにルナを殺すしかない、と言われた時だ。スバルは、ルナを殺すのは頑なに嫌がったのに、オヒュカスをデリートするのは躊躇わなかった。

かけがえのない存在と、ルナを言っていた。自分はどうなんだろう、とミソラは思った。

「……スバル君が来たみたいよ」

ルナの言葉に、ミソラは顔を上げた。

「……ほら、早速のろけて来なさい」

ルナは、ミソラの背中を押した。

椅子に座っていたミソラだが、ルナの手に押され、自然と立ち上がった。

不安げな顔でミソラがルナを見ると、ルナはウインクを返した。引き下がれる空気はなかった。

「お、おはよう、スバル君」

「あ、ミソラちゃん、おはよう!！」

このテンションを見て、スバルへの意識が若干変わったが、自然と先ほどの悩みが浮かんだ。

すると、次の台詞も浮かばなくなった。

ミソラはルナのほうに振り返った。

ルナは口を動かす。

どうやら、デートに誘え、と口を動かしているようだった。

「そ、そうだ。この前、どこかに行こうって言ったよね」

「あ、そうだったね。この前は隔離とかあって無理だったし……今週の日曜日は大丈夫？」

「うん！！」

ミソラは頷いた。

「なら、また連絡するよ」

「わかった。待ってるね」

そういえば、スバルに誘われたのは初めてではないか、とミソラは思った。

やはり、スバルは自分に尽くしてくれようとしているのではないか。ルナへの発言も、ただブラザーとしてであったのではないだろうか。そう考えると、不思議と心は落ち着いていた。



データ(前書き)

昨日は投稿できずにすいません

## デート

ミソラはハンターV Gで、時間を確認した。  
現在地は、ヤシブタウン。なんでも、103デパートに新作のバッグなどが入ったらしい。

ミソラはすでにヤシブタウンのバス停の前にいるが、103デパートに向かおうとはしていない。

「……まだかな」

『時間見たでしょ。スバル君の乗ったウェーブライナーが来るまで、まだ後3分くらいあるわよ。それより』

ハーブがウィザードオンして、現れた。  
手にはサングラスを持っていた。

『響ミソラが、ヤシブタウンに男の子という、なんてなったら、大変よ。かけなさい』

ミソラは渋面を見せた。

今、ミソラはスバルを待っていた。

この前約束した、デートの件だ。

「嫌だよ。スバル君に気付かれないかもしれないでしょ」

『その印象的な服ならわかるわよ』

ハーブは、ミソラのピンク色の服を指差した。

「それなら、みんな条件は一緒だよ。私、この服で仕事すること多いもん。だから、他の人にも気づかれるかもしれない。それに、小学生在サングラスなんて余計に目立つよ」

『……なら、これかけなさい』

ハーブは、ピンク色のフレームの眼鏡をミソラに差し出した。

「だから、もしスバル君が気付かなかつたら、どうするの？」

『スバル君だって、そこまでトロクはないわよ』

「……わかったよ」

渋々、ミソラはその眼鏡をかけた。

そして、スバルを待つ間、ベンチに腰掛けていることにした。

3分後、ウェーブライナーが到着した。

人が次々と降りてくる。そして、スバルも降りてきた。

『いたわね』

ハーブがハンターV.Gの中から、呟いた。

「うん」

ミソラは言った。

スバルは首を回し、ミソラを探しているようだった。

『……出て行かないの？』

「スバル君はそこまでトロクくないんでしょ？」

ミソラは嫌みたらしく言った。

ハーブも多少カチンとしたのか、あらそう、と平静を保って言った。  
ハーブの言った件でのこともあるが、ミソラには他にもスバルに近

づかないわけがある。

この前のオヒュカス・クイーンとの戦い以来、胸の中のモヤモヤがミソラを苦しめていた。

スバルの気持ち、考え、などなど、今更ながら、スバルのことがわからなくなっていた。

それがモヤモヤの原因だ。

まずは、スバルがミソラに気付くかどうか。

好きな人なら、見つけるのは容易だろう、と言っのがミソラの考えだ。

ミソラはスバルを試しているのだ。

「……あれ、ミソラちゃんどこだろう」

スバルの声が聞こえてきた。

下車のための人だからがあることで、少し遠くにいるミソラは見つけにくいと言ってもいいだろう。

だが、ミソラは腰を浮かせる気はなかった。

「……もう出たら？」

ハーブに言われ、ミソラの心に深く杭が刺さった。

既に人だかりは少ない。

だが、スバルは一向にミソラを凝視したりはしそうになかった。

「……うん、そうだね」

ミソラは腰を浮かせ、スバルに近寄った。

「おはよう、スバル君」

ミソラの声に、スバルが振り向いた。

「ミソラちゃん!!」

パツとスバルの顔が晴れた。

「眼鏡かけてたんだね。印象が変わって気付かなかったや」

「それ、本当かな?」

ミソラは茶化すように言った。

だが、内心は今にも泣き出したい気持ちを押さえていた。

眼鏡一つで印象は変わるかもしれないが、気付けないとは言い切れない。

むしろ、気付きやすいほうだろう。

「ほ、本当だよ。びっくりするくらい違ったから」

スバルは言った。

びっくりするくらい違った。

それは、あまりお互いのことが把握できていないからではないか、とミソラは一瞬感じた。

以前なら、数ヶ月に一回。

スバルの学校に転向した今でも、何かしら忙しく割と会えていなかった。

何より、今ミソラはスバルのことがわからなくなっている。

それはスバルも同様なのではないか。

「そろそろ行こっか」

スバルは言った。

ミソラはまだここで話していたい気分だった。

「うん、そうだね」

ミソラは言った。

気持ちが変わらないのに、変にスバルのやり方に口出しをしたら、

いやがられるのではないか、と思った。

ミソラは笑顔を心がけた。

たとえ楽しくなくても。

スバルに嫌われたくない。

一人でいるほうが、よっぽど楽な気がミソラはしていた。

## 不明瞭

二人は談笑しながら、103デパートを回った。

「あ、これいいかも!」

ミソラは一つの鞆を指差した。

「……え、あ、そうだね」

スバルは引きつった笑顔を見せた。

「……もしかして、駄目だった?」

「……ごめん、良くわかんないや」

「……そっか」

気を悪くしたな、とミソラは思った。

小学六年の男子に、異性のファッションを聞いてもまだ難しいに違いないかった。

「……じゃ、あっち行こっか」

ミソラは電気コーナーを指差した。

「うん、いいね!」

スバルの顔が晴れる。

「ハハハ……」

ミソラは渋面で笑った。

「あつ、これ最新の電波望遠鏡だ。隔離部屋にあったんだ!」

「隔離部屋に？」

「うん、あそこはすごい色々あったよ」

「……でも、もう入りたくはないでしょ？」

「……どうだろうな」

ミソラは黙った。

スバルは一体何を考えているのか。  
まったくわからない。

「……どうしたの、ミソラちゃん？」

気付けば、ミソラは大分長い時間スバルを見ていた。

「何でもないよ」

ミソラは笑顔で首を振った。

「これも隔離部屋にあったよ」  
スバルは別の機械を指差した。

「これは、何の機械？」

「マテリアルウェーブの復元率を上げる機械だよ。ああ、どんな構造になってるんだろ」  
スバルの目が輝きだした。

やはりスバルはわからない、とミソラは思った。



理解（前書き）

考えるのに時間がかかりました（汗  
すいません

## 理解

「……あつという間だったね」  
スバルは言った。

すでにヤシブタウンも、日が傾き始めていて、夕日が赤い。

「……スバル君、この後、暇？」

「え、まあ」

「なら、着いてきてほしいところがあるんだ」

スバルは数秒考えた後、笑顔で頷いた。

「いいよ」

ミソラはぎこちない笑顔で、スバルと一緒にウェーブライナーに乗った。

「……どうして、ここに？」

スバルは上にある望遠鏡を見ながら、ミソラに訊いた。

ミソラがスバルを連れてきたのは、コダマタウンの展望台だった。

「……ここで初めて会ったんだよね、私達」

「え……うん、そうだね」

スバルは戸惑いを隠せていなかった。

「……好きだよ、スバル君」

ミソラはスバルのほうを向きながら、落ち着いた声で言った。

「……あ、ありがとう」

スバルの顔は真っ赤だった。

「……スバル君は？」

またか、とスバルは思った。これは想像以上に恥ずかしい。

「ぼ、僕もだよ」

「……スバル君、訊きたいことがあるんだ」

「何？」

ミソラは俯いた。

モジモジしているわけではない。

ただ、言いづらそうな顔だった。

「スバル君が何を考えているかがわからない」

「え……」

「不安なの。とっても」

ミソラは目から涙を一滴、二滴。

「……スバル君のことが大好き。だから、スバル君のことをもっと理解したい。でも、わからないの、スバル君が」

ミソラは目を両手で覆った。  
嗚咽をもらしている。

好きな人が泣いている。

どうにかしたい、とスバルは思った。

しかし、スバルもミソラの気持ちがわかるわけではないから、どうにもできない。

しかし、スバルの頭に、単純な答えがでた。

「……………ミソラちゃん、僕はミソラちゃんが……………す、好きだよ。その気持ちだけは変わらないから……………だから、理解なんかしなくていいよ」

「え？」

ミソラがスバルを見た。

目は充血していた。

「ぼ、僕を好きでいて……………そうしたら、ずっと不安にならないでしょ？」

理解なんかいらないでしょ、とスバルは続けた。

「喧嘩だっつてするかもしれないけどさ、それも許せるくらい、僕はミソラちゃんを好きになるから……………」

「スバル君」

「理解し合う必要がないくらい、お互いを好きでいようよ」

「うん……………」

夕日が二人を照らしていた。

理解（後書き）

なんかあっさりし過ぎて駄文なような……

二人はこんなキャラだったっけ？  
と書いてて思ってます

教師として、親として

育田は背伸びをし、肩を鳴らした。

「育田先生、また来客ですよ」

校長が育田に近寄った。

「……いつもの人ですか？」

校長は渋面で頷いた。

育田はため息をついた。

「どこにいますか？」

校長は教室を答えた。

「それでは、行ってきます」

育田はそう言い、席を立った。

校長に言われた教室に着くと、育田はドアをノックした。

「入りますよ」

育田は呆れた声で言った。

眼前には、シドウ、クインティア、ジャックを捉えた。

「度々、申し訳ない」

「まったくだ。WAXAのあなた達がこうして毎日のように私を訪ねるから、私は何か犯罪をやらかしたんじゃないかと、先生方から

噂されるようになった」  
育田は不満を吐き出した。

「ハハハ、それは申し訳ことをしたが、こちらにとっては、あなたの力が必要なんですよ」

「そんなこと言ってもね。……私はこの力を使うのは嫌なんだ。自分の生徒を苦しめた力だと思つと、恐ろしくて仕方ない」

「……いい大人が言い訳かよ」

「こら、ジャック」

クインティアは、ジャックの手を叩く。

「だって、そうだろ。結局、こいつは過去からも今からも逃げてる。こいつにしかできないことはたくさんあるんだ。なのに、こんな所でくすぶって、みつともないったら」

「……悪いな、ジャック。だが、俺は死ぬわけにはいかないんだ。WAXAが始めようとしているのは、戦争だろ。俺には家族がいる。守るべき家族がな」

「そんなのみんな一緒だ!」

「頼むから、帰ってくれ」

育田は言った。

「……そうだな、今日はそうするか」

「シドゥー!」



「大丈夫だよ、育田さんはきつとわかってくれる」  
そう言い、シドウは立ち上がった。

## 学校襲撃

次の日

「みんなおはよう、出席をとるぞ」  
育田は名前を読みあげた。

「……何!？」

一人の生徒が耳を抑えた。

「どうしたの? ……う」

別の生徒が、胸を抑えた。

「……先生、ちょっとトイレに行ってきます!」  
スバルが手を挙げた。

「私も!」

ミソラも教室から出て行った。

二人は、多分敵を倒しにいったのだろう。

あの二人なら、どんな敵も倒せるだろう。

自分の仕事は、生徒達を励ますことだ、と育田は思った。

「大丈夫か？」

早くしてくれよ、と育田は思った。

選択（前書き）

久しぶりですm（| |）m  
色々あって投稿が遅れました

## 選択

「……くそっ」

育田は舌打ちをした。

苦しむ生徒達は増えていった。

どうやら、原因は超音波のようだった。

今も流れ続けている。

育田も多少、気分はグロッキーだ。しかし、我慢しなければならぬ。今は生徒達を心配するべきだ、と思った。

「……先生、気持ち悪いよ」

一人の生徒が育田に言った。

育田は顔を歪め、もう少し我慢するんだ、と言った。

ガラッ、とドアが開いた。

「育田先生!!」

隣の教室の担任が、へろへろの状態で教室に足を踏み入れた。

「……この教室もか」

隣の教室の担任は言った。

「この教室もかって、他の教室も!？」

隣の教室の担任は頷いた。

「どうやら、この学校全体のようです。……うっ  
隣の教室の担任は、ひざまずいた。」

「大丈夫か!？」

育田は背中をさすってやった。

「ええ……なんとか」

まだか、と育田は思った。苛立ちも感じた。スバル達は一向にかえってこない。しかし、自分の仕事は、生徒達を心配することだ。

「育田先生……」

生徒の一人が、うつ伏せで床に寝ていた。

「大丈夫か!？」

育田は駆け寄り、抱き上げた。

「……助けて」

生徒の一人はつぶやいた。

助けて。確かにそう言われた。

しかし、自分のすべき仕事は生徒達を心配することだ。敵を倒すべきは、スバルやミソラのすべきこと。

なぜ、生徒達を危険な目に合わせる？

自分は守る力があるのに、守ろうとしない。スバルやミソラのすることだって、変わるんだ。

だが、子供達もいる。自分が死んだら、その子達はどうなる。

「育田先生……助けて」

再びつぶやいた。

育田は視線を泳がせるが、数秒後、生徒をゆっくり床に寝かせ、立ち上がった。

「ここをお願いします。私は放送室を見えます」  
育田はそう言うと、足早に廊下に出た。

今回だけだ、と育田は思った。

緊急事態の今回は別だ。

生徒達の苦しむ姿はこれ以上見れない。  
だから、今回は戦う。  
それだけだ。それだけだ。

## 決断

超音波の発生源は、放送室だと育田は思った。

ここが各教室のサウンドを使い、超音波を発生させると考えるのがベストに違いない。

育田は電波変換し、放送室のメインコンピュータの電腦に侵入した。

リブラ・バランスとなった育田は、電腦中を見て、啞然とした。ウジャウジャいるウイルスは、今も数を増やしていた。

「……どうなってるんだ」

リブラ・バランスは、ノイズの塊があるのに気付いた。そこからウイルスは増殖を続けている。

「……あれを破壊するのが先みたいだな」

ようやくウイルスを全てデリートしたリブラ・バランスは、大きく息を吐いた。

「……戻るか」

リブラ・バランスはサイバアウトした。

ウェーブロードに立ったリブラ・バランスは、思わず、えっ、と声を上げた。

超音波が止まっていない。

「育田さん」

アシッド・エースがきた。

「あなたは……」

「よくスカウトに来てた暁ですよ。サテラポリスの」

ああ、とリブラ・バランスは言った。多少、素っ気ない態度は、以前から培った暁への面倒くささからだろう。

正直、話すのもウンザリしていた。

だが、今はそんなことは言ってる暇はない。

「なぜ、超音波は止まらないんですか!？」

リブラ・バランスは言った。

「それはちょっと……」

アシッド・エースは渋顔で言った。

リブラ・バランスは啞然とした。

「教える気はないのか。今なら、私は戦力になる気だ。生徒達を守るために」

「なぜですか。あまりにも都合がいいように、俺には聞こえる」

アシッド・エースの発言に、リブラ・バランスは反論をためらった。確かに、この前は戦う気はないといいながら、ここで戦うというのは都合が良かった。

「……いや、言い方が悪かったですね。すみません。実は、今は味



方以外に情報を漏らすと対処が大変になるからと、上のものから他言はするなと言われてて」

「サテラポリスに入っていない俺には、例えこの状況が協力的でも味方と決まりきってないから、情報は提供しないと？」

アシッド・エースはすみませんといいながら頷いた。

「スバルやミソラは、俺の教え子だ。守らなきゃいけない」

「二人なら、あなたが守らなくても大丈夫ですよ」

「超音波の被害にあってる子達は!？」

「もう少しの辛抱でしょう。あなたもどうぞ、待っててください」

「……俺がスカウトを断ったから、その仕打ちか!？」

リブラ・バランスは声を震わせながら言った。

「違いますよ。ルールです」

「違ってないだろ」

「あなたのような人のほうが多いですよ、むしろ。誰だって、いくら守る力があるからって、怖いですからね。スカウトは規定みたいなものなんです。トランスコードを持ってる人達には、基本的には何度もスカウトするんです」

「……怖いんだよ。子供達を守れなくなるのが……」

リブラ・バランスは声を振り絞った。苦痛がにじみでるような声だ

った。

「俺がいなくなったら、あいつら全員どうやって暮らすんだ」

アシッド・エースは黙って話を聞いていた。

「…………死にたくない」

「…………育田さん」

「暁さん。あんたはどうして戦ってるんだ？」

虚を突かれた質問だったのか、アシッド・エースはえっ、と声をあげた。

しかし、返事はすぐにでた。

照れくさそうな態度に、鼻の下をさすった。

「大切な人を守りたかったんです。俺には守れる力があるから、ね」

「守れる力？」

「あなたにもありますよ」

俺にも、トリブラ・バランスは言った。

子供達を守りたい。

守る力はある。その力は、決して全員が持てる力ではない。憎んだりした力だ。しかし、この力があれば、子供達は確実に守れるはずだった。

「暁さん、俺にも情報を教えてくれ。もちろん、ただでとは言わな

い。俺もサテラポリスに入る」

「本当ですか!?!」

「はい」

アシッド・エースはわかりました、と言うと、リブラ・バランスに戦況を教えた。

「早速向かいきましょう」

「はい!!--」

あ、といい、アシッド・エースは足を止めた。

「育田さん。俺が言った力って、この電波変換のことじゃないですよ」

え、とリブラ・バランスは言った。

「思いやる心です。これは電波変換にも負けない力を持っています」

リブラ・バランスはハツとした。

子供達を守りたい。その思いやりの心が、育田を変えたのだ。強く強く。

この力があれば、子供達を守ることができるとは違いなかった。

そして、この心が子供達にあれば、自分など必要ない、とリブラ・バランスは気付いた。

死に行く気はない。

でも、だからこそ、ためらったのだ。  
しかし、今はもう違う。

「ありがとう」

ポツリとリブラ・バランスはつぶやいた。  
子供達のために、絶対に生きて帰るんだ。  
そして、子供達を再び守るのだ。  
思いやる心が、子供達に芽生えるまで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8734v/>

---

流星のロックマン 永遠の絆

2011年11月27日03時11分発行